

大手前遺跡・上下遺跡

—近江八幡市野田町・長光寺町所在—

平成2年3月

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

正 誤 表

P68 L18

I期：奈良時代末～



I期：奈良時代初頭～

大手前遺跡・上下遺跡

—近江八幡市野田町・長光寺町所在—

平成2年3月

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生き甲斐のある生活を築くための一つとして、個性豊かな文化環境づくりに取りくんでいます。特に文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、化財の保護と活用に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力を得なければなりません。

ここに、昭和63年度に実施しました県営ほ場整備事業に係る発掘調査の結果を昭和63年度から平成元年度に整理調査を実施し取りまとめましたので、御高覧のうえ今後の埋蔵文化財の御理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

滋賀県教育委員会
教育長 西池 季節

例　　言

1. 本書は昭和63年度県営ほ場整備事業に伴う近江八幡市大手前遺跡・上下遺跡の発掘調査報告書であり、昭和63年度に発掘調査し、平成元年度に整理したものである。
2. 本調査は県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、近江八幡市教育委員会・八日市県事務所土地改良第二課・近江八幡市土地改良区の協力を得た。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

昭和63年度

平成元年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長　堀出亀与嗣
△　課長補佐　小川 啓雄
埋蔵文化財係長　林 博通
△　主任技師　木戸 雅寿
管理係主任主事　山出 隆

滋賀県教育委員会

文化財保護課長　伊香 照男
△　課長補佐　小川 啓雄
埋蔵文化財係長　近藤 滋
△　主任技師　田路 正幸
管理係主任主事　山出 隆

財団法人滋賀県文化財保護協会

理事長　吉崎 貞一
事務局長　中島 良一
企画調査課長　近藤 滋
調査第一係長　大橋 信弥
△　技師　小竹森直子
総務課長　山下 弘

財団法人滋賀県文化財保護協会

理事長　吉崎 貞一
事務局長　中島 良一
専門員兼企画調査課長　林 博通
調査第一係長　大橋 信弥
調査普及課技師　小竹森直子
総務課長　山下 弘

6. 本書の執筆・編集は、調査担当者の小竹森が行なった。

7. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

本文目次

序

例　　言

第1章 位置と環境.....	1
第2章 調査の経過と方法.....	3
第3章 調査結果.....	3
1. 試掘調査.....	3
2. 発掘調査.....	8
第4章 まとめ.....	66
1. 遺物について.....	66
2. 遺構について.....	68

挿図目次

第1図 大手前遺跡・上下遺跡および周辺遺跡位置図.....	1
第2図 A地区トレンチ配置図.....	4
第3図 A地区試掘調査土層断面柱状図.....	5
第4図 B・C地区トレンチ配置図.....	6
第5図 B・C地区試掘調査土層断面柱状図.....	7
第6図 T 1 全体平面図.....	9
第7図 T 1 - SK 1・2 平面図・断面図・出土土器実測図.....	10
第8図 T 2 全体平面図.....	11
第9図 T 4 全体平面図.....	12
第10図 T 4 - SD 1・3・6 断面図・SD 3・6・P35出土遺物実測図.....	13
第11図 T 6 全体平面図.....	15
第12図 T 6 - SD 6・SK 2 平面図・断面図・SB 3・SD 5・6・8 出土土器実測図.....	17

第13図	T 7 全体平面図(1)	18
第14図	T 7 全体平面図(2)	19
第15図	T 7 -SH 1・2 平面図・断面図・出土土器実測図	21
第16図	T 7 -SB 3・4 平面図・断面図	23
第17図	T 7 -SE 2・3 平面図・断面図 SE 1 出土土器実測図	25
第18図	T 7 -SE 2・3 出土土器実測	27
第19図	T 8 -SD 2・3 断面図 SD 1・2・3・4・7・10 出土土器実測図	28
第20図	T 8 全体平面図	29
第21図	T 9 -SD 1・3 断面図	30
第22図	T 9 全体平面図 (1・T 9-a)	31
第23図	T 9 全体平面図 (2・T 9-b)	32
第24図	T 9 -SB 2 平面図・断面図・出土土器実測図	33
第25図	T 9 -SB 4 平面図・断面図・出土土器実測図	34
第26図	T 9 -P142・149・181・290 出土土器実測図	35
第27図	T 9 -SB 7 平面図・断面図	36
第28図	T 9 -SB 7 出土遺物実測図	37
第29図	T 9 -SB 8 平面図・断面図	38
第30図	T 9 -SB 8 出土土器実測図	39
第31図	T 9 -SB 9 平面図・断面図・出土土器実測図	40
第32図	T 9 -SB10・11 平面図・断面図	42
第33図	T 9 全体平面図 (3・T 9-c)	43
第34図	T 9 -SD13・16・17・20 断面図・SX 2 平面図・断面図	44
第35図	T 9 -SD 2・3・10・11 出土土器実測図	45
第36図	T 9 -SK 3・5・6 平面図・断面図・出土土器実測図	47
第37図	T10全体平面図	49
第38図	T11全体平面図	50
第39図	T11-SD 5・6・7・8・10・11 断面図・SD 5・7・8・11 出土土器実測図	51
第40図	T11-SH 1・2 平面図・断面図・出土土器実測図	53
第41図	T11-SH 3 平面図・断面図	54
第42図	T12全体平面図	55
第43図	T13全体平面図	57
第44図	T13-P46・T14-P17・31・35・92 出土土器実測図	58
第45図	T14全体平面図	59
第46図	T15-SD 3 出土土器実測図	60
第47図	T15全体平面図・SD 3 断面図	61

第48図	T16-SD13出土銅錢拓影図	62
第49図	T16全体平面図	63
第50図	T16-SX 1・2 平面図・断面図・出土遺物実測図	65
第51図	T16-SX 3 平面図・断面図・出土土器実測図	67

図 版 目 次

図版1	1. 調査前風景	2. T1全景(南西から)
図版2	1. T1-SK1土層断面	2. T1-SK2土層断面
図版3	1. T2全景(北東から)	2. T2西端柱穴列(北東から)
図版4	1. T4全景(南西から)	2. T4-SD3全景(北東から)
図版5	1. C地区全景	2. T5全景(西から)
図版6	1. T6全景(東から)	2. T6-SB3・SK2周辺(西から)
図版7	1. T7全景(北東から)	2. T7-SB1~4・SH1・2周辺(北西から)
図版8	1. T7-SH1・2全景(南西から)	2. T7-SH1・2土層断面
図版9	1. T8全景(北西から)	2. T8~9溝列(北西から)
図版10	1. T9-SD3(南から)	2. T9-SD3土層断面
図版11	1. T9-a東端部全景(北東から)	2. T9-b全景(南東から)
図版12	1. T9-SD16・17周辺(北東から)	2. T9-SD16土層断面
図版13	1. T9-P127(SB2)黒色土器出土状況	2. T9-SX2土層断面
図版14	1. T10西端部(北西から)	2. T10東端部(南東から)
図版15	1. T11全景(北東から)	2. T11-SD5~11(南東から)
図版16	1. T11-SH1・2全景(南から)	2. T11-SH1カマド
図版17	1. T12全景(北西から)	2. T12東端部(北西から)
図版18	1. T13全景(北西から)	2. T13南半部(南東から)
図版19	1. T14北端部(北西から)	2. T14南端部(南東から)
図版20	1. T15全景(南東から)	2. T15-SD3土層断面
図版21	1. T16全景(南東から)	2. T16-SX1~3(南東から)
図版22	1. T1-SK1・2出土土器(外面)	2. 同左(内面)
図版23	1. T4-SD3出土砥石	2. T4-SD6出土陶磁器
図版24	1. T6-SB3出土土器(外面)	2. 同左(内面)
図版25	1. T7-SB3出土土器(外面)	2. 同左(内面)
図版26	1. T7-SE1出土土器	2. T7-SE1・2出土土器
図版27	1. T7-SE2出土土器(外面)	2. 同左(内面)
図版28	1. T7-SE3出土土器(外面)	2. 同左(内面)

图版29 1. T 8 - SD 1 · 7 · 10出土土器(外面) 2. 同左(内面)

图版30 T 9 - P127(SB 2) · P189 · 198(SB 7)出土土器· 砧石

图版31 T 9 - P197(SB 8) · P203出土土器

图版32 1. T 9 - SK 3 出土土器(外面) 2. 同左(内面)

图版33 1. T 9 - P290 · 197出土土器(外面) 2. 同左(内面)

图版34 1. T11-SH 1 · 2 · SD 8 · 11出土土器

图版35 1. T13-P46 · SK 1 出土土器(外面) 2. 同左(内面)

图版36 1. T14-P17 · 35 · 92出土土器(外面) 2. 同左(内面)

图版37 1. T15-SD 3 出土土器(外面) 2. 同左(内面)

图版38 1. T16-SX 2 出土土器(外面) 2. 同左(内面)

图版39 1. T16-SX 3 出土土器(1. 外面) 2. 同左(内面)

图版40 1. T16-SX 3 出土土器(2. 外面) 2. 同左(内面)

第1章 位置と環境

大手前遺跡と上下遺跡の所在する近江八幡市は、近江最大の低地である湖東平野の中に位置し日野川下流域を占めている。湖東平野は布引丘陵・八日市丘陵等を流れ出た日野川・愛知川・犬上川によって形成されて扇状地・三角州から構成されているが、湖東島状山地と称される湖東流紋岩・花崗岩を基盤とする標高160m～450mの小山地が散在しており、諸河川と共に更に幾つもの小地域に分割される。近江八幡市は南を日野川、東を八日市丘陵、北を湖東島状山地の1つである觀音寺山に囲まれ、西方に琵琶湖が広がる地域である。今回調査対象地となった大手前遺跡・上下遺跡の所在する野田町・長光寺町周辺は、丘陵下位面端部から約500mのところに位置し、現在の標高は概ね98m～100mである。丘陵下位面端部に発する数条の旧河道が両町周辺まで認



1 大手前遺跡	7 出町遺跡	13 半田遺跡	19 香庄遺跡	25 宮前遺跡	31 觀音寺城跡
2 上下遺跡	8 森ノ前遺跡	14 谷氏館遺跡	20 慈恩寺遺跡	26 上出A遺跡	32 安土城跡
3 金剛寺遺跡	9 撫上遺跡	15 御所内遺跡	21 小中遺跡	27 上出B遺跡	33 安土城城下町遺跡
4 金剛寺城跡	10 蔴ノ町遺跡	16 後川遺跡	22 西才行遺跡	28 観音寺城城下町遺跡	34 八幡山城跡
5 九里氏遺跡	11 久那屋敷遺跡	17 高木(浅小井)遺跡	23 中屋遺跡	29 老森遺跡	35 長光寺城跡
6 里内遺跡	12 柿本原遺跡	18 新園遺跡	24 常楽寺山古墳群	30 瓢箪山古墳	

第1図 大手前遺跡・上下遺跡および周辺遺跡位置図

められるが、遺跡の立地している地点は、比較的安定している。調査前の状況は水田であり、その中に鳥状の高まりとなって畠地が散在する。

次に、歴史的環境について周辺地域の状況を踏まえつつ、概観することとする。近江八幡市域における考古資料は旧石器時代に遡るが、明瞭な遺跡としては弥生時代以降に拡張を見せる。弥生文化受容期の遺跡は、湖岸に立地する長命寺湖底遺跡・安土町大中の湖南遺跡、現在の市街地に位置する堀川遺跡・三明遺跡等が確認されている。弥生時代中期以降は、日野川・佐久良川・白鳥川に沿って内陸部へと遺跡の拡張が顕著に認められる。方形周溝墓等の墓域の検出例が多い様であるが、出町遺跡・蛇塚遺跡・安土町西才行遺跡等、集落の検出例も増加している。

古墳時代に入ると、觀音寺山の麓に前方後円墳である安土瓢箪山古墳が築かれる。また、雪野山の山頂には、三角縁神獣鏡・内行花文鏡をはじめ多くの武器類を有する雪野山古墳が築かれているが、平野部には前期古墳は認められない。古墳時代中期以降には、形象埴輪を有する帆立貝形古墳を中心とする千僧供古墳群・蒲生町木村古墳群が平地に造営され、尾根上には安土町常楽寺古墳群等の群集墳が形成される。これら古墳群の母体である集落内における基本的住居形態は、古墳時代を通して竪穴住居であり、概ね7世紀前半まで大きな変化は認められない。しかしながら、その終末期については差異が存在し、近江八幡市中央部以南つまり白鳥川以南においては7世紀後半期には堀立柱建物への交代が完了する傾向にあるのに対して、それより以北においては、後川遺跡・安土町中屋遺跡・同老蘇遺跡・蒲生町外広遺跡等に見られる様に8世紀初頭においても、2・3棟~数棟の単位で遺存している状況を捉らえることができる。

野田町・長光寺町は、かつての蒲生郡にあたるわけであるが、周辺には古代から中世の莊園関連遺跡の存在が文献からも知られており、考古資料も増加している。金剛寺遺跡では、9世紀末頃から10世紀後半にかけての企画性の高い堀立柱建物群が検出され、莊官舎あるいは有力農民の屋敷跡になると想定されている。また、日野川流域つまりかつての蒲生郡内においては、条里の遺存が良好である。日野川流域に施行された蒲生郡統一条里に規制されたと考えられる堀立柱建物・溝等が点的に各所で確認されているが、考古資料からの条里復原や施行時期の決定は未だ停滞していると言わざるを得ない。

鎌倉時代以降は近江守護職の任にあった佐々木六角氏による支配下にあり、八日市市小鷹町から移った觀音寺城を拠点として、周辺に佐々木氏・家臣の居城が数多く存在している。佐々木六角氏・代頼綱が設けた金田別館が前身とされる金剛寺城・家臣浅小井氏の居城である浅小井城・同じく長田氏の居城である長田城等をはじめとして、それらの近辺には更に方形区画溝を有する居館が複数確認される例が増加している。浅小井城の位置する高木遺跡に3箇所、長田城の位置する後川遺跡に2箇所以上が調査で確認されており、遺跡地図にも数多くの跡跡が記載されている。また、九郷屋敷跡等の有力農民の屋敷跡の調査も進められている。

1568年に織田信長によって觀音寺城が落城すると共に佐々木六角氏が滅亡し、以後織田信長による安土城・豊臣秀次による八幡山城を中心として文化・経済の中心となり、現在の集落の大半はほぼ形成されていたと想定される。

これらを支えた要因の一つとして、古代以来主要交通経路上にあったことがあげられる。東山道の中仙道は、現武佐町に武佐宿を置き、周辺には馬街道・馬三味と称される間道・地名等が遺存している。湖岸寄りには東山道・中仙道の間道である浜街道があり、後には朝鮮人街道が通ることとなる。琵琶湖に面していることから湖上交通も主要な交通・運搬手段であり、湖岸からかなり内陸部まで船が往来していた様である。

第2章 調査の経過と方法

昭和63年度県営は場整備事業（近江八幡市野田地区武佐・御所内工区）が大手前遺跡・上下遺跡の範囲内で施行されることとなり、事前に文化財調査を行い遺跡の保護策を講じることとなった。

まず、工事対象地区内における遺構・遺物の有無とその深さを確認するための試掘調査を昭和63年4月22日～4月28日・同年5月25日・同年10月25日～10月28日・同年12月17日に実施した。試掘調査は掘削・削平を伴う排水路・切土面を対象とし、2m×3mのトレーナーを計118個所設けた。この試掘調査の結果に基き協議を行い、切土面については盛土対応によって遺構の保護が講じられたが、概ね深さ1mの掘削を伴う排水路部分約4580m²については、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、0.4m²級バックホーを用いて耕土除去後、更に遺構面直土まで掘削し、人力により遺構検出・掘削・清掃を行い、実測・写真撮影等によって記録化を図った。現地調査は昭和63年7月30日～同年12月7日の約4か月間を要し、整理調査は平成元年度に実施した。

第3章 調査結果

1. 試掘調査

調査対象地が広汎であるため、道路・線路等で区画された3地区に大別し、以下北から順にA～C地区と称する。

A地区基本層序は、耕上約20cm・床土約15cm・褐色系土約10cm～40cmであり、黄茶色系土を遺構面形成土とする。溝・柱穴等の遺構はほぼ全面で検出されるが、黒褐色土が厚く堆積する地点がある。A1～33では平安時代～鎌倉時代の、A34～66では奈良時代を中心に中世までの遺物が出土している。

B地区基本層序は、床土下に黒褐色系土が約20cm～30cm堆積し、遺構面に達する。黄褐色系土の遺構面は、B5～9を除く全てにおいて検出されたが、遺物の出土は認められなかった。

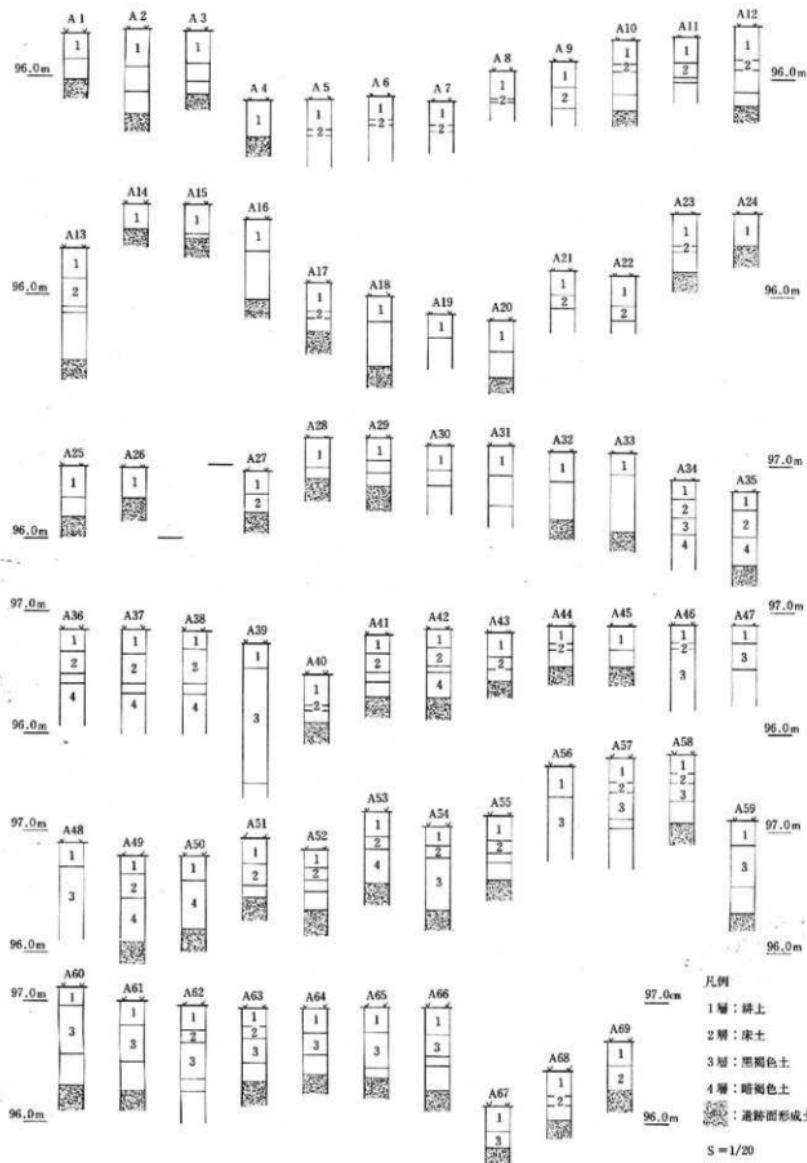
C地区基本層序はB地区とはほぼ同じであるが、黒褐色系土が30cm～60cmと厚く、A・B地区とは若干様相が異なる。遺構面形成土は若干粘性のある黄褐色系土であるが、部分的に茶褐色系土のところもある。遺構は柱穴を主体として全域で検出され、C17・18では竪穴住居と推定される遺構が確認された。遺物は中世の土器類小片が若干出土したのみである。

2. 発掘調査

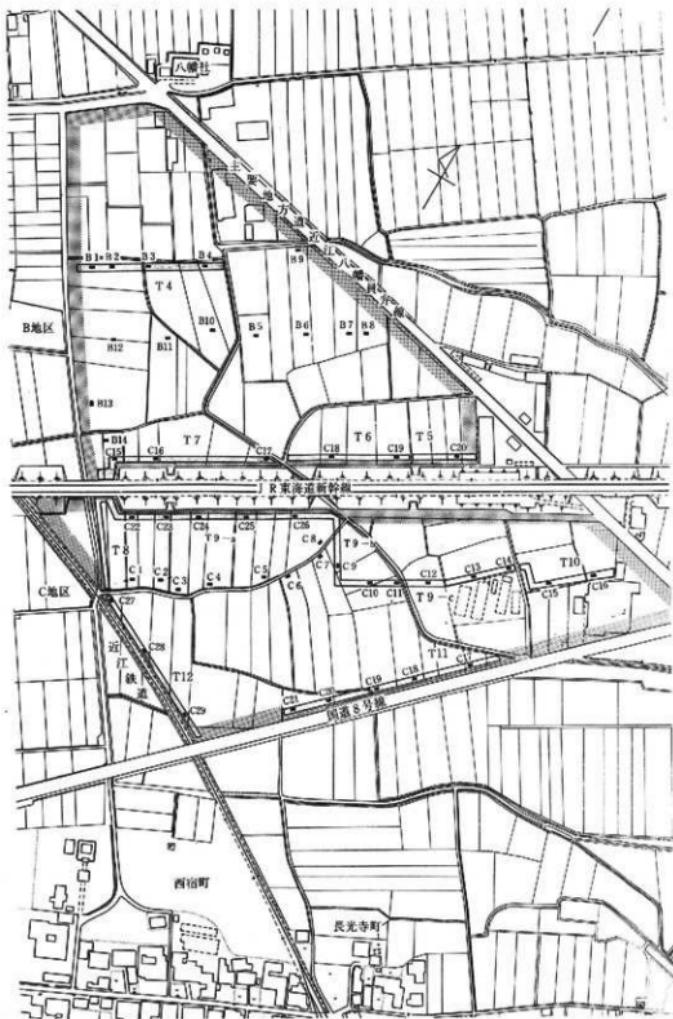
試掘調査の結果に基き、工事により直接影響を受ける排水路部分についてトレーナー（T1～



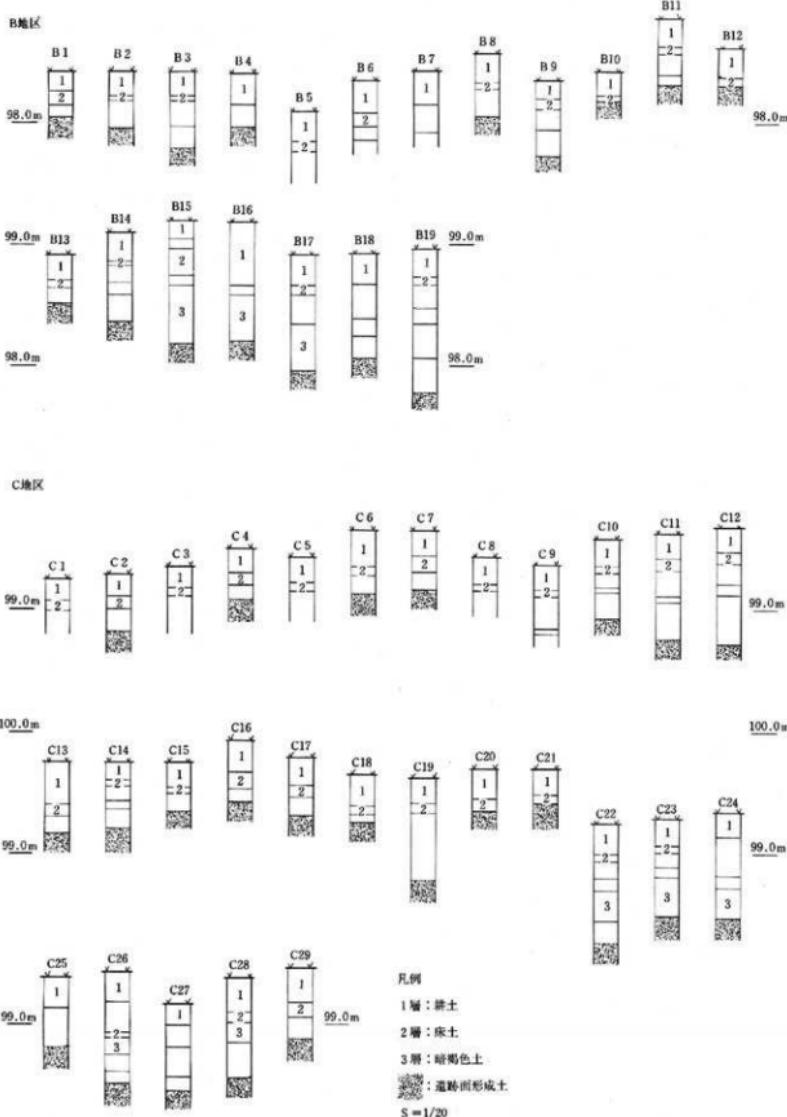
第2図 A地区トレーニング配置図 (1/3000)



第3図 A地区試掘調査土層柱状図



第4図 B・C地区トレーニング配置図 (1/3000)



第5図 B・C地区試掘調査土層柱状図

T18) を設けて発掘調査を実施した。以下トレンチ番号順に、遺構・遺物について記す。尚、遺跡全体については章を改める。

(1) T1・A 地区

今回調査区北西隅に位置する幅約3m・延長約56mのトレンチである。検出された主要遺構は、土塙2基・柱穴である。遺構面形成土である黄褐色系土は粘質が強く、全体に潤滑である。尚、トレンチ東半分では規格性を有する長方形土塙群が検出されたが、これらは前回のは場整備前に移転した墓地跡であることから、掘削はしていない。

SK1 トレンチ西端で検出された、径約2.9mの土塙である。平面形は橢円形もしくは卵形を呈し、深さは約65cmである。埋土は上層から暗灰褐色土・黄茶色土塊を混入する暗褐色土・暗灰色粘土であり、湧水が認められる。

埋土内からは、須恵器・土師器が出土している(第7図・1~6)。1・2は須恵器の杯蓋である。1は天井部のみであるが、やや丸みを帯び、宝珠つまみの刺離痕が認められる。2は口絆13.2cmを計り、内面に断面三角形のかえりが付いている。3・4は、須恵器の杯身底部である。底部は回転ヘラ切りであり、緩やかに口縁部が立ち上がっており。3では、口縁部が外彎して延びる。5・6は、土師器の杯である。口縁部は若干外彎し、端部内面に1条の沈線が巡る。

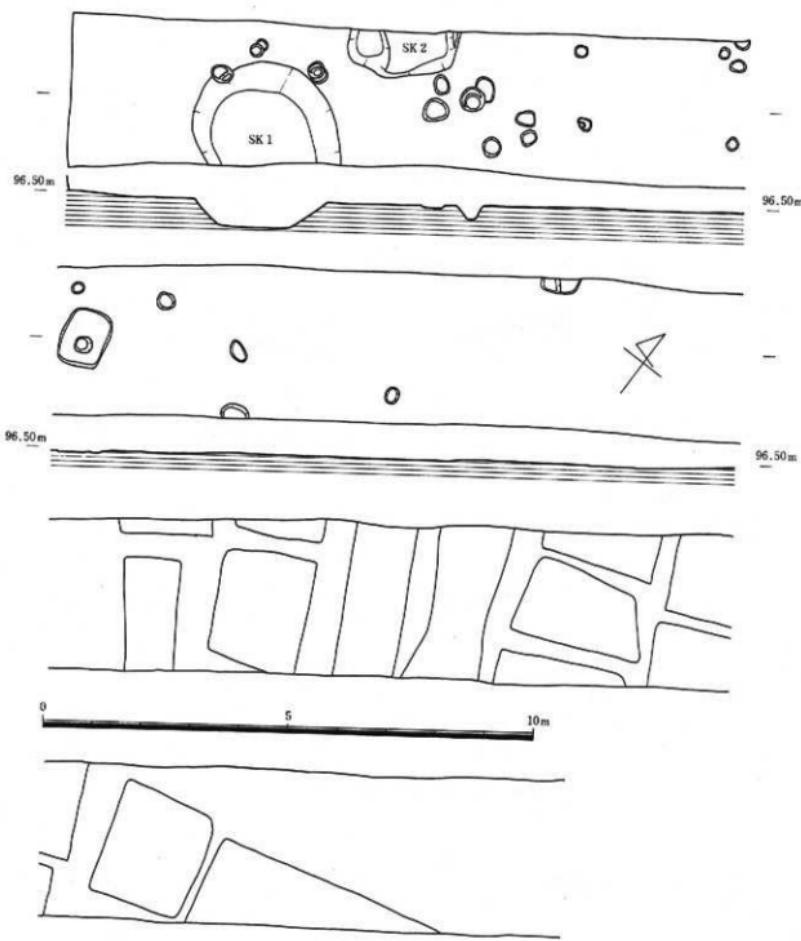
SK2 SK1の北外側に隣接する、1辺約1.9mの土塙である。西側部分には、径約60cm・深さ約80cmの土塙が重複している。埋土は灰褐色土の單一層であり、底面は皿状を呈する。埋土からは、須恵器・土師器が出土している(第7図・7~10)。7は、須恵器の壺形土器口縁部の断面である。ほぼ水平に伸びた口縁の端部は上方へ突出し、外面の平坦面には細い沈線が1条巡っている。内外面には、緑灰色の自然釉がかかっている。8・9は、土師器の杯である。形態はSK1のものと同様であるが、より器高が低く扁平である。10は、土師器の長胴壺である。胴部はほとんど張らず、口縁部は受口状を呈している。口縁上端部と端部外面に平坦面を有する。

(2) T2・A 地区

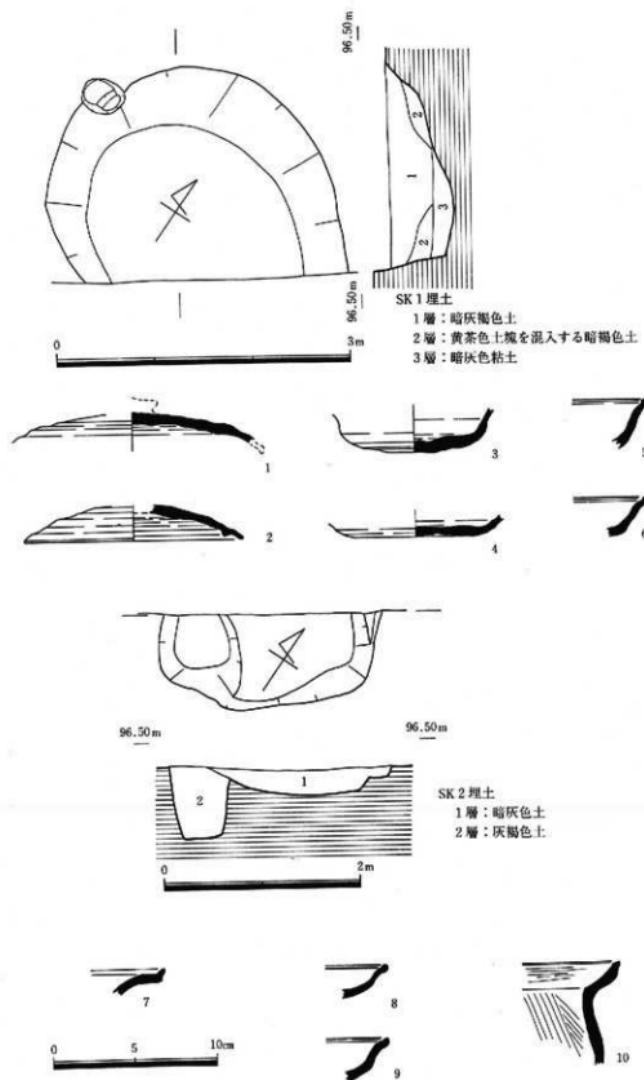
T1の南方に位置する、幅2.8m・延長約74mのトレンチである。主要遺構は、溝7条・柱穴である。遺構面は極めて粘性が強く、湧水が著しい。

SD1~7 概ねトレンチに直交してN-35°-Wに延びるが、SD3・SD6の2条は若干斜交しており、SD6はN-6°-Wに延びている。また、SD3・SD6以外は、幅約50cm~70cm・深さ約20cm~30cmと規模が近似している。SD1・2とSD4・5は各々2条が近接しており、両者の間隔は約21mである。埋土は、いずれも暗褐色粘土である。

P14・15・16・17 SD1・2とSD4・5の間に位置する4個の柱穴であり、規模・形状から同一の性格を有していると想定される。径約20cm~25cmの円形を呈し、埋土は黒褐色粘土の單一層であるが、微小な木片が残存している。柱穴間は平均1.9mであり、溝とはば直交する。P15からは、白磁の碗が出土している。口径は18.0cmであり、口縁部は正縁状を呈し、釉は黄色か



第6図 T 1 全体平面図



第7図 T 1-SK 1・2 平面図・断面図・出土土器実測図

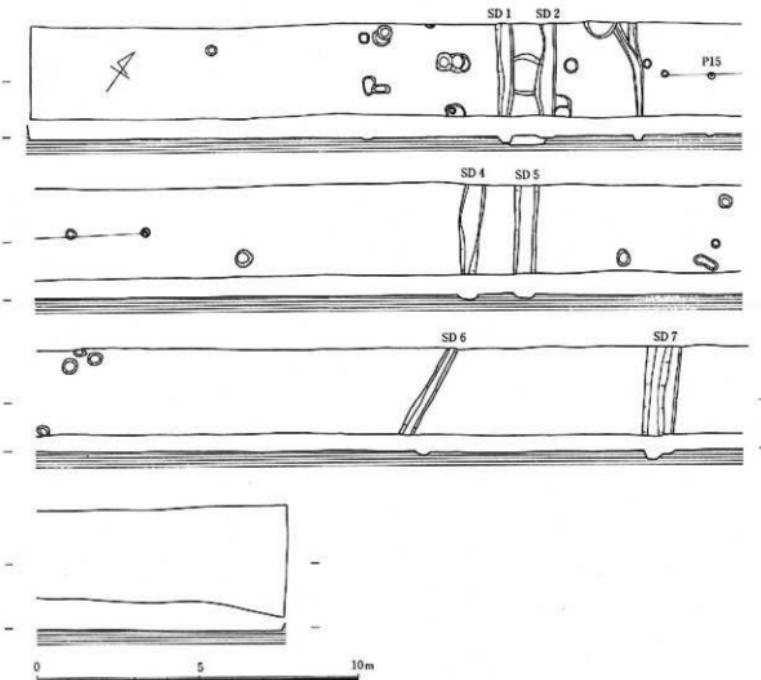
った淡灰白色である。これらは、柵列とも想定されるが、これ以上の延長が認められないことから、掘立柱建物の1辺である可能性が高い。

(3) T3・A 地区

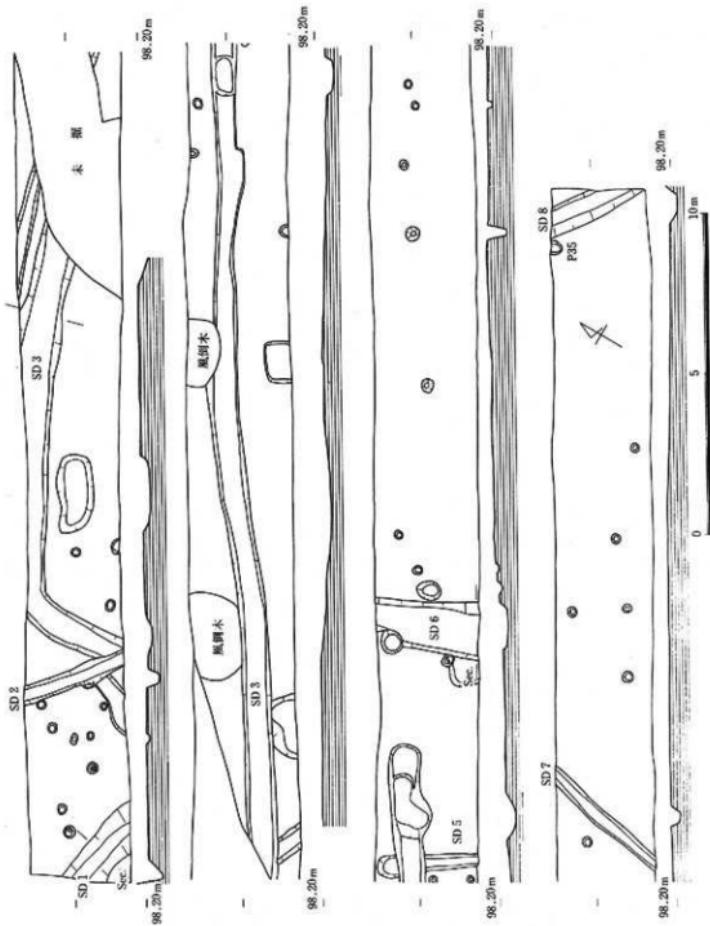
T2の東側に連続する、幅約2.5・延長約30mのトレンチである。遺構は認められず、湧水が著しい。床土下には黒褐色粘土が厚く堆積し、遺構面形成土である黄灰色粘土は東に向かって落ち込んでいる。沼沢地の縁辺部分にあたると想定される。

(4) T4・B 地区

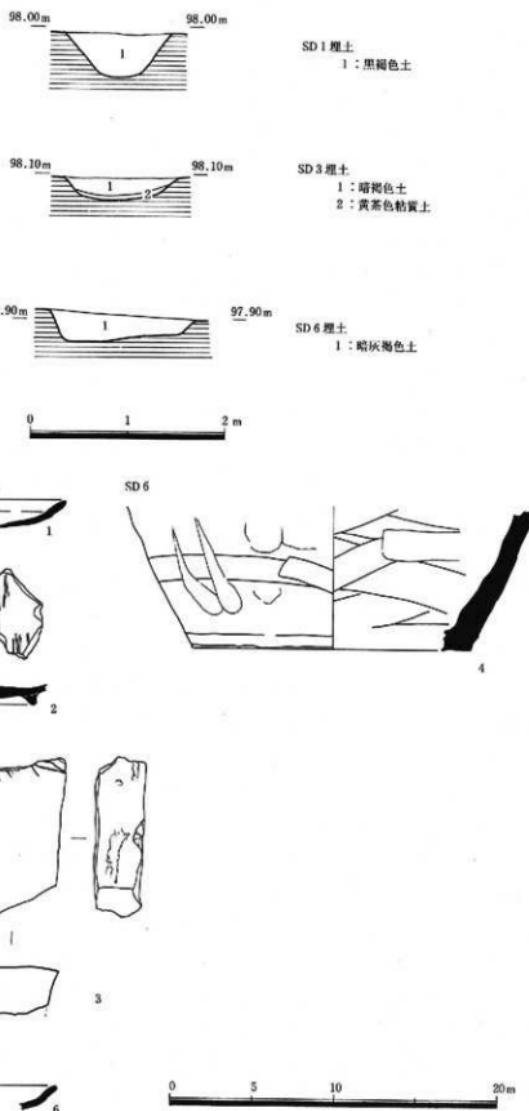
幅約3m・延長約81.5mのトレンチであり、B地区の北半分にあたる。遺構面形成土である



第8図 T2全体平面図



第9図 T 4 全体平面図



第10図 T 4 — SD 1・3・6 断面図・SD 3・6・P35出土遺物実測図

黄茶色土は、T 1～3 と比較すると粘性が低く、むしろ砂質である。検出された主要遺構は、溝8条・柱穴・風到木痕である。

SD 1・SD 8 トレンチの西端と東端で検出された、N-55°～75°-W に延びる溝である。埋土は黒褐色粘質土の單一層であり、遺物は出土していない。

SD 2 SD 3 を切り込み、N-50°-W に延びる溝である。幅約55cm・深さ約40cmを計り、埋土は、暗褐色土・灰褐色土の上下2層から成る。埋土中には、土師質土器の小片が含まれる。

SD 3 トレンチの西半部分を占める、L字状の溝である。トレンチと平行する部分は N-57°～67°-E に延び、西端部分が鈍角的に南に屈曲する。幅約70cm・深さ約20cm・延長約48mを計り、東端の終息部分は不定形の土塹状に深くなっている。埋土は、暗褐色土・黄茶色粘質土の上下2層であり、土師質土器・瓦器・砥石が出土している（第10図・1～3）。1は、土師質土器の小皿である。口径8.8cm・器高1.7cmを計り、連続的に口縁部が外方へ開く。底部は指頭圧痕とナデによって平滑に仕上げられ、外面にはヨコナデによる弱い段ができる。2は、瓦器碗の底部である。高台径は5.4cmを計り、若干丸みを帯びた断面三角形の高台が貼り付けられている。底部および高台部はヨコナデにより平滑に仕上げられ、内面にはジグザグ暗文が施されている。色調は、内外面共に黒色を呈する。3は、砂岩質の砥石である。最大幅6.6cm・残存長10.0cmであり、上下端および裏面が剥離・欠損している。表面は若干凸面気味であり、周囲に粗い削痕が認められる。

SD 6 SD 3 の東端から約3mのところに位置する溝である。幅約1.5m・深さ約20cmを計り N-23°-W に延びる。底面は平坦であり、埋土は暗灰褐色土の單一層である。トレンチの北壁際で、陶磁器片が集中して出土している（第10図・4・図版23・2）。4は、須恵質の底部である。底部径は17.0cmであり、未調整の平底である。胴部は直線的に延び、外面は板状工具による横方向のナデで平滑に仕上げられ、1部に指頭によるナデ・ナデアゲが加えられている。胴部最下部には強いヨコナデが1条加えられ、若干窪んでいる。内面は、全体に幅広い横～斜方向の強いナデによって仕上げられている。図版23・2は、常滑焼の胴部に施されたタタキを持つものである。口縁部・底部の破片は出土していないが、ほぼ一個体分の胴部破片が出土している。

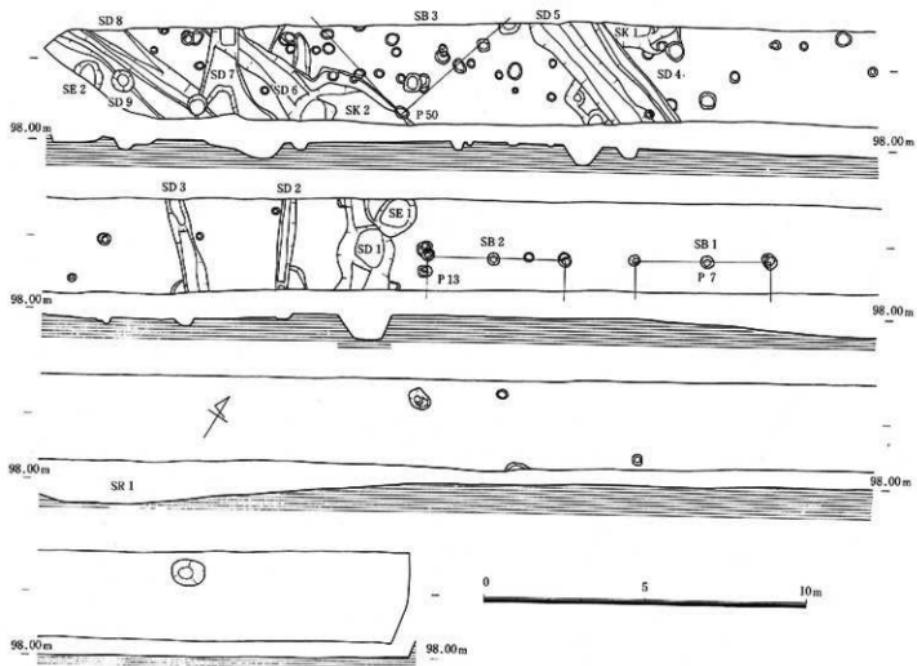
P35 SD 8 の西に位置する径約40cmの柱穴であり、土師質土器の小皿が1点出土している（第10図・7）。口径4.4cm・器高1.6cmであり、外反する口縁端部に面を持つものである。

(5) T 5・B 地区

幅約2.5・延長約30mのトレンチである。遺構は認められず、中央部に南北方向の落ち込みが検出された。落ち込み部分には黒褐色粘土が堆積し、基盤層は黄灰色粘土となっている。最上面において陶磁器・土師質土器小片の出土が見られたが、2次的堆積であると考えられる。

(6) T 6・B 地区

T 5 の西側に隣接する、幅約2.6m・延長約88mのトレンチである。検出された主要遺構は掘



第11図 T 6 全体平面図

立柱建物3棟・溝9条・井戸2基・土塙2基・落ち込みである。遺構面形成土は黄灰色系土であるが、東端ではT5と近似して粘性が強く、西半では砂質を増す。

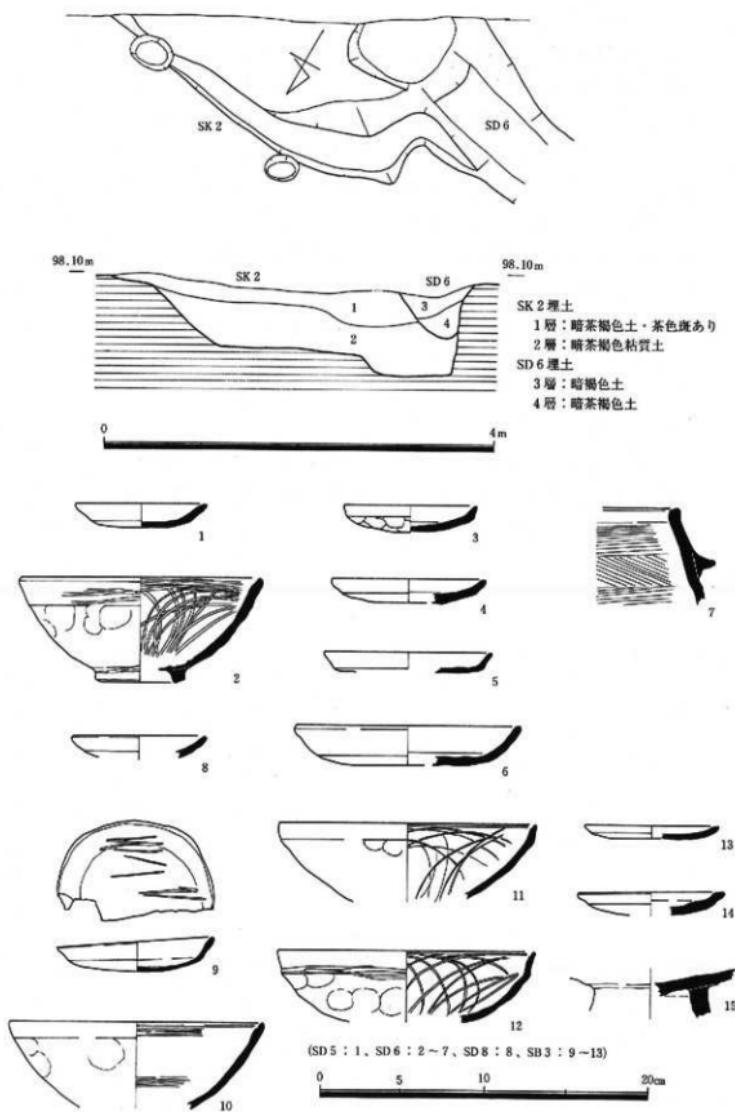
SB1 東西2間×の掘立柱建物であり、主軸方位はN-32°-Wである。径約40cmの円形柱穴によって構成され、柱穴間は2.2mである。P6には木質が若干ながら残存し、その周囲には粘土化した柱材の痕跡が認められた。また、P7の埋土中からは、黒色土器の小片が出土した。

SB2 SB1の西側に並列する、東西2間×掘立柱建物である。当初SB1と一緒にもので東西5間の掘立柱建物を想定していたが、若干方向にずれがあるため一直線とは成り得ないことがら、ほぼ同規模の2棟の建物とする。径約35cmの円形もしくは隅丸方形の柱穴から成り、柱穴間は2.2mである。

SB3 SD5とSD6の間に位置し、溝とほぼ同じN-17°-Eを主軸方位とする2間×2間以上の掘立柱建物である。長径約40cm~50cmの楕円形柱穴によって構成され、柱穴間は東西南辺が1.8m、南北東辺が2.1mである。P50・54からは、瓦器・黒色土器が出土している（第12図・9~13）。9は、瓦器の小皿である。口径9.4cm・器高1.8cmを計り、底部から援やかな屈曲を持って立ち上がる口縁端部に面を持っている。全体の形態・成形は土師質土器と共に、底部内面にジグザグの暗文が認められる。色調は、内外面共に黒色である。10は、口径14.4cmの瓦器碗である。内彎気味の体部は若干深目であり、口縁端部内面に1条の沈線を巡らし、内面は横方向のヘラミガキが密に施されている。11・12は、黒色土器の碗である。口径はいずれも14.6cmであり、口縁部は若干屈曲して立ち上がる。内面のラセン状暗文・口縁端部内面の沈線は共通し、12の口縁部外面には、横方向のヘラミガキが3条程施される。13は、土師質土器の小皿である。口径8cm・器高0.8cmであり、かなり扁平である。

SD1・2・3・7 当トレンチで検出された溝は、大まかにトレンチに直交する1群と斜交する1群に分けられ、SD1・2・7は前者にあたるN-30°-Wに延びる。SD3はN-42°-Wと若干異なるが、この1群に含めることとする。SD1は幅約1.5mを計り、中央が土塙状に窪んでいる。SD2・3は幅約50cm~60cmを計り、底面が浅い皿状を呈する溝である。SD7は幅約1mであり、Y字状に分岐している。底面は浅い皿状を呈し、SD6を切り込んでいる。いずれの溝も暗茶褐色系土を埋土とし、遺物は含まれない。

SD4・5・6・8・9 トレンチに斜交して、N-73°-Wに延びる溝である。SD4・5、SD8・9が各々近接して位置しており、SD4と8が幅約50cm~70cm、SD5と9が幅約1mと規模も近似している。深さが約70cmであり、N-30°・42°-Wの1群と比較すると深くなっている。埋土は暗褐色土・暗灰褐色土の上下2層から成り、SD5・6・8・9からは土器類が出土している（第12図・1~8）。1は、SD5出土の土師質土器小皿である。口径・器高は8cm・1.3cmであり、底部から援やかに口縁部が立ち上り、端部は単純におさめる。2~7は、SD6から出土している。2は黒色土器の碗であり、口径14.4cm・器高6.4cm・高台径4.2cmを計る。高台は断面台形のしっかりしたものであり、口縁部外面と高台接合部に横方向のヘラミガキが加えられている。口縁端部は面を有し、内面は若干窪むだけで沈線は施さない。内面は口縁端部に横方向のヘラミ



第12図 T 6 - SD 6 · SK 2 平面図・断面図 SB 3 · SD 5 · 6 · 8 出土土器実測図

ガキを数条施し、全面にラセン状暗文を描く。3~6は土師質土器であり、3~5は小皿、6は大皿である。口径・器高は各々8cm・1.6cm、9.4cm・1.4cm、10.0cm・1.3cm、13.4cm・2.5cmである。小皿類は口縁部を単純におさめるものであり、大皿については弱い押しナデが加えられている。7は土師質の羽釜であり、内傾する口縁部下に断面三角形の鶴が付くものである。

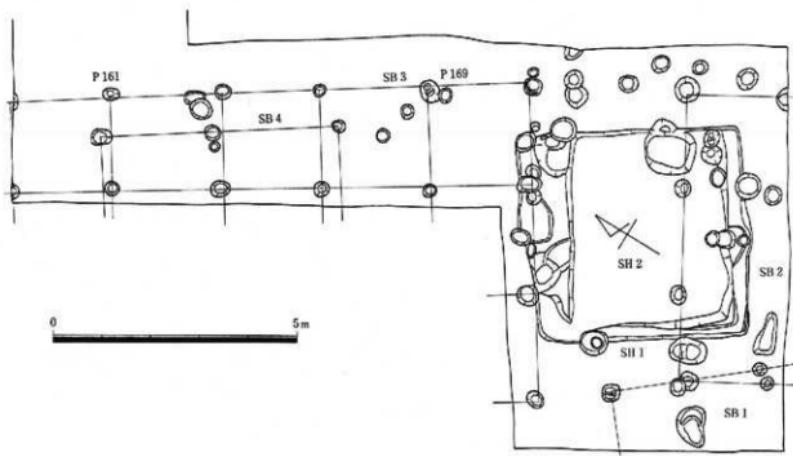
SE1・2 各々SD1・9と重複して検出され、SE1は長径約1.8m・短径1.5m、SE2は径約1mである。いずれも井戸桿等の施設は認めわれず、埋土は暗茶褐色土である。

SK2 SD6に切り込まれた土塁であり、北辺部分では袋状になっている。埋土内からは若干量の土師質土器、黒色土器片が出土している。

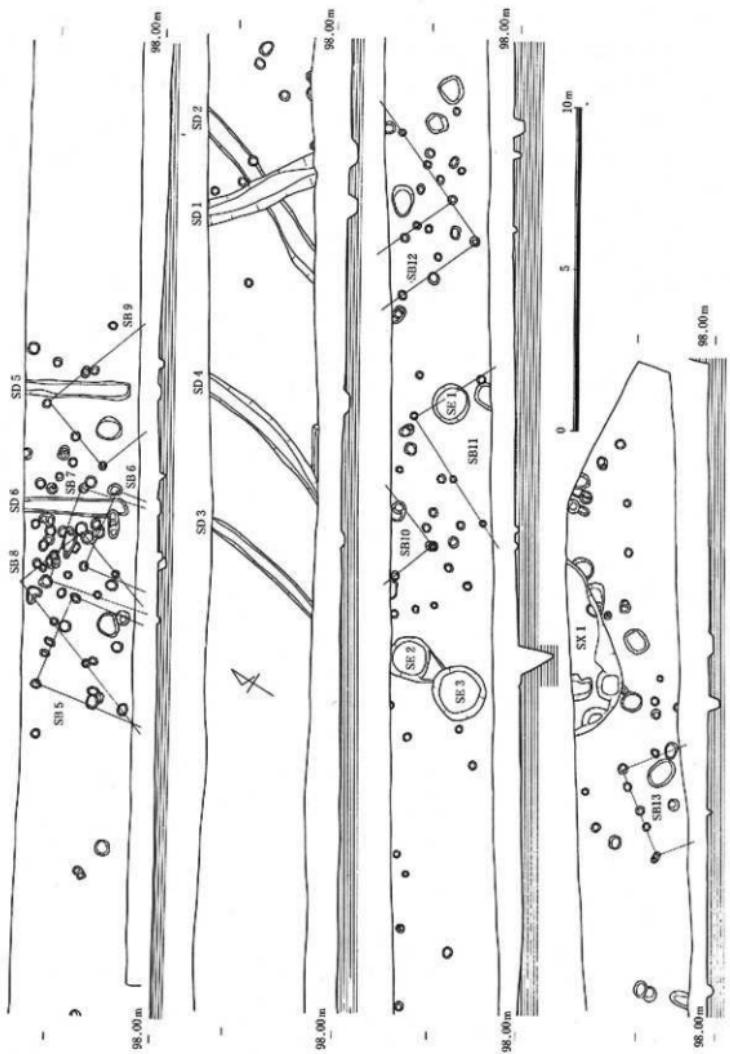
SR1 トレンチ東端に散在する柱穴とSB1の間には、幅約18.5mの緩やかな南北方向に延びる落ち込みが検出された。最深部で約85cmの比高差を有し、黒褐色粘土が堆積する。T5の状況と近似し、自然流路的性格を呈している。尚、SB1はSR1の肩部に位置しているが、埋土上面において柱穴が検出されており、SR1埋没後SB1が建てられたと判断される。

(7) T7・B 地区

T6の西側に連続する、幅約3.2m・延長約129mのトレンチである。検出された主要遺構は、竪穴住居2棟・掘立柱建物13棟・井戸3基・溝6条である。遺構面形成土は黄褐色系土であるが、東半では、茶褐色土となっている。



第13図 T7全体平面図(1)

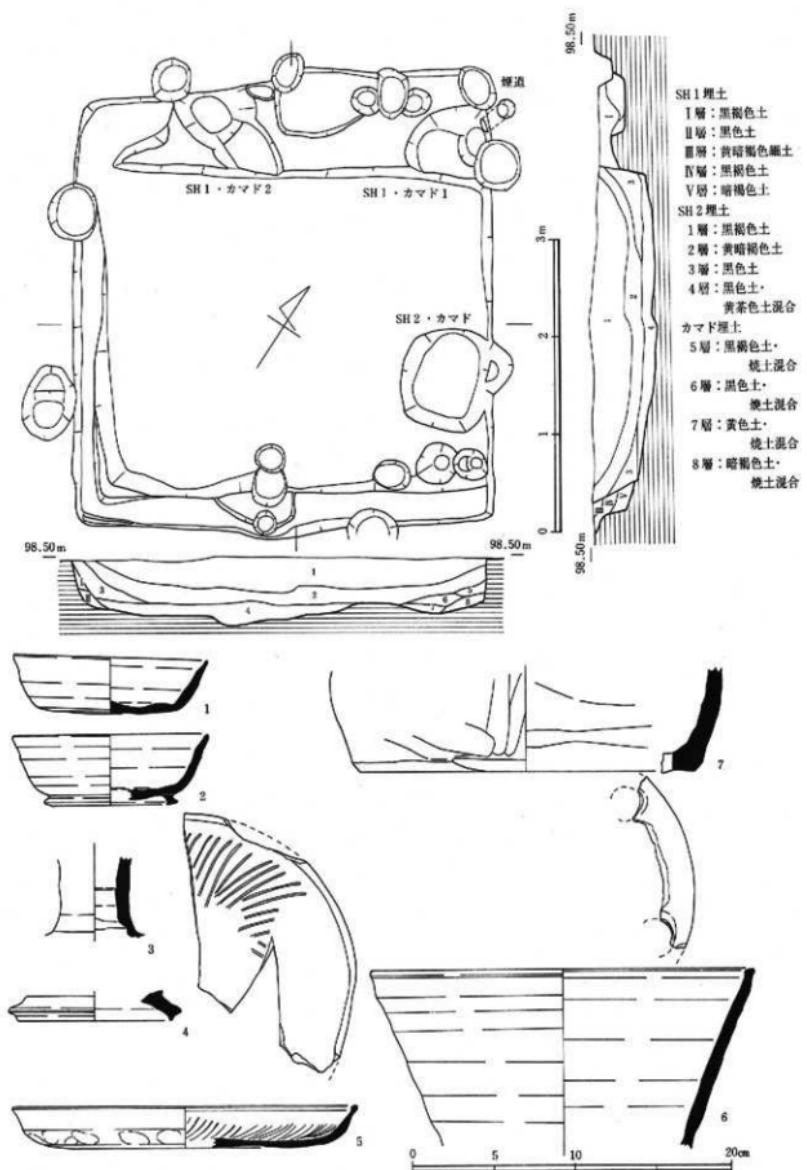


第14図 T 7 全体平面図

SH1・2 トレンチの西端で検出された2棟の竪穴住居であり、同一位置に建て替られている。当初南半分のみが検出されたが、全容を把握するため、また耕土直下であり運土による影響を受けることが予想されたため北側に拡張して調査を行なった。遺構検出時にはSH1の平面形のみが検出され、これに従って掘削を進めたところ中に一回り小さい掘り込みが認められた。この時点では北辺に段を有するものと想定されたが、断面による土層堆積状況の観察から別の竪穴住居が切り込んでいることが認められた。また、北辺のカマド痕についても焚口が切断されていることからも傍証される。ここでは切り込まれた当初の竪穴住居をSH1、切り込んだ新しい竪穴住居をSH2として取り扱う。

まず、SH1から記すこととする。東西4.3m・南北4.7mを計り、主軸方位はN-33°-Wである。南北方向にやや長い平面を呈し、床面積は約20m²である。現存するところでは西辺・南辺に浅い壁溝が巡っているが、床面はSH2によって掘り抜かれており、柱穴は認められない。カマド痕は北辺に2個所あり、燃焼部の掘り込みとカマド2には煙道が残存している。カマド1は、中央部から若干西寄りの位置にあり、北辺に対して斜交して設けられたものである。壁面から外方へは突出せず、壁面に沿って立ち上がる。埋土には炭化物・焼土と共に、土師器片が若干含まれる。カマド2は、東辺北端に位置し、カマド1と同様に壁面に沿って立ち上っている。壁面中央からは、外部に向かって径約16cmの煙道が貫通している。カマド1の埋土からは、土師器の痕が出土している(第15図・7)。底部付近の破片であるが、底部径は20.6cmである。平底の底部から立ち上がる脛部は内彎気味であり、外面は横・縱方向のヘラケズリ、内面は横方向の強いナデによって調整されている。底面には、径約2cmの穿孔が認められる。

SH2は、東西4.0m・南北3.3mを計り、SH1とは逆に東西辺が長い平面形を呈している。東辺はSH1のものを踏襲しているため、主軸方位は変動していない。床面積は、約13m²である。SH2には、壁溝・柱穴は認められない。床面は黒褐色土と遺構面形成土の混合土を貼床とし、その上面において平坦面を形成する。カマド痕は東辺の中央やや南寄りに直交して位置し壁面から若干外方へ突出している。燃焼部の掘り込み部分を残すのみであるが、焼土・炭化物を含む埋土内からは、土師器皿(第15図・5)と土師器長脣壺の脣部破片が出土している。5は口径21cm・2.5cmを計り、平底の底部から援やかな屈曲を有して短めの口縁部が立上り、口縁端部は内面に若干肥厚する。底部外面は指頭压痕、口縁部内外面はヨコナデによって平滑に仕上げられ、内面には数条ごとに若干方向を変えながら施された放射状暗文が認められる。SH2の埋土内からは、須恵器が出土している(第15図・1~4・6)。1・2は須恵器の杯身であり、2は高台を有する。高台を除く形態は共通し、口径・器高は各々11.8cm・3.5cm、12cm・4.2cmである。2の高台は断面長方形を呈し、内側のみが接地している。3・4は長脣壺の頸部および底部および底部であり、色調・焼成等から同一個体であると判断される。4の高台は大きく八の字状に開き、接地面端部は尖っている。外面には、緑灰色の自然釉がかかっている。6は直口の鉢であり、口径18cmである。内外面共にヨコナデによって平滑であり、口縁部は若干屈曲し上端部には内傾する平坦面を持つ。



第15図 T 7 - SH 1・2 平面図・断面図・出土土器実測図

SB1 SH 1・2の西側に隣接する2間以上×の掘立柱建物である。径約35cmの円形もしくは隅丸方形の柱穴から成り、主軸方位はN-40°-Wである。

SB2 SH 1・2の南部分に重複する3間×1間以上の掘立柱建物であり、主軸方位はN-30°-Wを取る。柱穴間の平均は1.95mであり、埋土は黒褐色土である。

SB3 SB 2の北辺に平行して位置する、3間以上×5間以上の掘立柱建物である。径約30cm~40cmの円形もしくは隅丸方形の柱穴によって構成され、東辺から西1間目にも柱筋が通る。柱穴間の平均は2.1mであり、主軸方位はN-34°-Wを取り、ほぼSB 2と同じである。東辺P161・169からは常滑焼の甕が出土している(図版25)。底部は認められないが、ほぼ1個体分の破片が、両柱穴から約半分づつ出土している。埋土は、焼土を含む黒褐色土である。

SB4 SB 3の内側に重複する、東辺2間以上×の掘立柱建物である。主軸方位・柱穴の規模等はSB 3とほぼ同じであるが、埋土に焼土を含まない。

SB5 SD 1・2の周辺に密集する柱穴群の中に位置する5棟の掘立柱建物の内最も西側のものであり、主軸方位をN-11°-Wとし、2間×1間以上の規模を有する。径約30cm~40cmの柱穴から成り、平均柱穴間は北辺が1.6m、東西辺が2.0mである。埋土は、茶褐色土である。

SB6 SB 5の東側に並列する、北辺2間以上の掘立柱建物である。柱穴間は1.3mと若干狭く、埋土は茶褐色土である。

SB7 SB 5・6と主軸方位を同じくし、SB 5より半間分北寄りに位置している2間×2間以上の掘立柱建物である。径約30cmの円形柱穴によって構成され、平均柱穴間は1.6mである。

SB8 SB 5~7とは異なるN-20°-Eを主軸方位とする2間×3間以上の掘立柱建物である。梁間の柱穴間が1.25m、桁行の柱穴間が1.65mとなるため、南北に細長い平面形となってている。

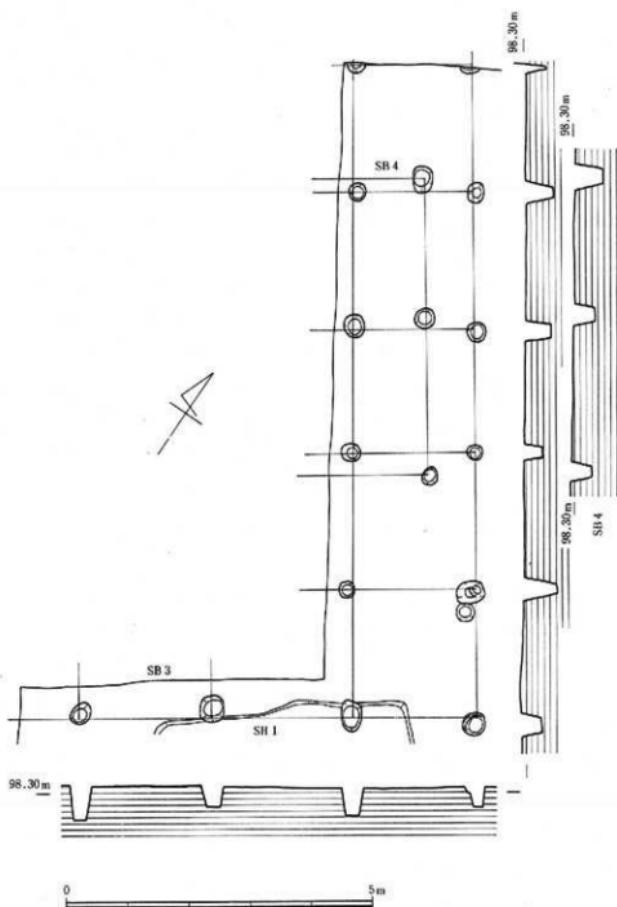
SB9 SB 8の東に位置し、ほぼ直交するN-20°-Eを主軸方位とする2間×2間以上の掘立柱建物である。径約30cmの円形柱穴から成り、平均柱穴間は1.4mであるが、若干梁間が狭い。

SB10 トレンチの東側SE 2・3以東集中する柱穴から構成される4棟の掘立柱建物の内最も西で検出されたものである。南東隅部分を検出したに留まるが、主軸方位をN-20°-Eとし柱穴間は1.5mである。

SB11 主軸方位をN-25°-Eとし、1間以上×2間以上の規模を有する掘立柱建物である。柱穴は径約2.5cmと若干小さく、平均柱穴間は2.25mである。

SB12 SB11の北東辺とは並列して位置する、2間以上×3間以上の掘立柱建物である。南西辺から1間北にも柱筋が通っており、平均柱穴間は桁行が1.75m・梁間が1.4mである。SB10・11・12はほぼ主軸方位を同じくし、埋土も共通していることから、同時期並存の可能性が高い。

SB13 トレンチの東端において検出された、2間×1間以上の掘立柱建物である。主軸方位はN-37°-Eとし、径約25cm~40cmの柱穴によって構成される。柱穴間の平均は梁間が1.4m、桁行が1.6mである。埋土は暗褐色土である。



第16図 T 7 - SB 3 · 4 平面図・断面図

SE1 SB11と重複する、径約1.2mの井戸である。埋土は暗灰褐色系土を主体とし、これに混入する土質および粘性の強弱によって3層に大別される。湧水が著しいため完掘し得なかつたが、底面までの深さは約2mを計り、井戸枠等の施設は認められなかった。

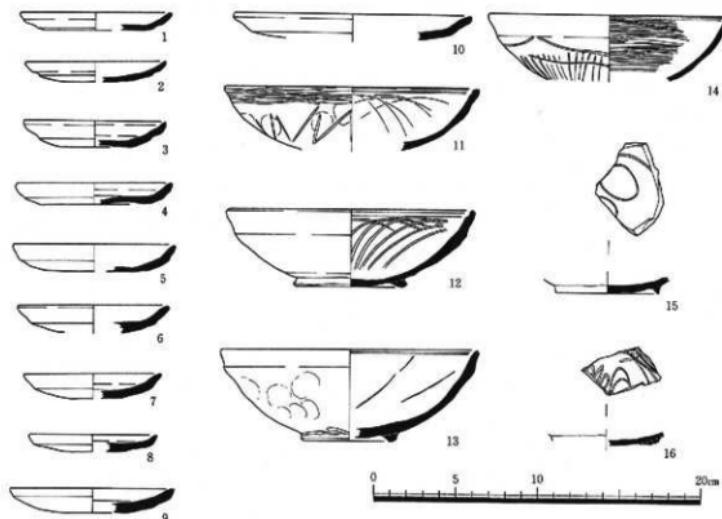
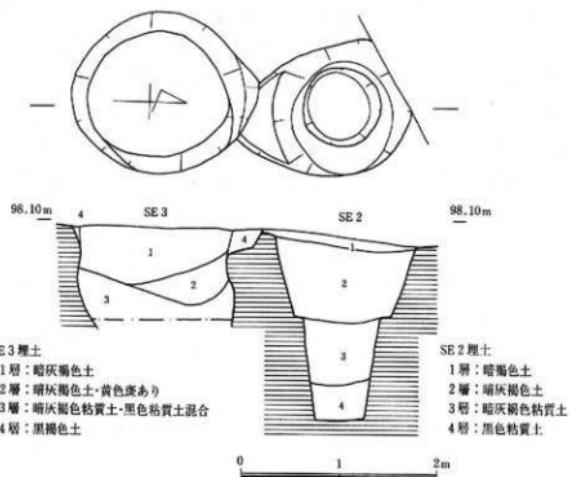
最上層の約20cmにおいては遺物が見られない以外は、各埋土中から土師質土器・黒色土器・瓦器が出土している（第17図・1～16）。1～9は土師質土器の小皿であり、口径は9.0cmを中心にして7.8cm～10.0cm、器高は1.1cm～1.7cmの範囲内に収まる。1～3は口縁部に加えられるヨコナデによってその下端に段を有しており、2においては凹線状になっている。端部は若干尖り気味におさめられ、3では外面に弱い面を形成している。4～9は底部から連続的に口縁部が内彎気味に立ち上がるるものであり、端部は単純におさめる。8は口縁端部を短く上方へ折曲げた様であり、器高1.1cmと極めて平であることと合わせて、若干趣を異にする。10は、口径14.4cm・器高約1.6cmを計る土師質土器の大皿である。口縁部は外彎気味に大きく開き、端部外面に弱い面を持つ。

11～13は、黒色土器の碗である。口径・器高・高台径は各々11が14.4cm、12が14.8cm・4.7cm・6.4cm、13が15.4cm・5.7cm・5.0cmである。11はやや扁平であり、大きく内彎して口縁部が立ち上がる。外面には、体部には放射状のジグザグのヘラミガキが、口縁部には密な横方向のヘラミガキが施されている。口線上端部は平坦であり、内面に1条の沈線・ラセン状暗文を施す。12は口縁部の器壁が厚く、外面は指頭圧痕とナデによってのみ調整される。高台は扁平なものであり大きく八の字状に開くため、底部中央が接地している。13は3点の中では器高の深いものである。高台は扁平な断面台形を呈し、外面接合部に横方向のヘラミ調整が加えられている。口縁端部は単純におさめ、内面には細い沈線が1条巡る。暗文部分は磨滅のため不明であるが、放射状にナデの単位が認められる。

14～16は、瓦器碗である。14は口径14.6cmを計り、体部外面下半に放射状のヘラミガキを施した後に、2～3条の密な横方向のヘラミガキを加える。内面は口縁端部に1条の沈線を巡らし、全体に密な横方向のヘラミガキを施す。15・16はいずれも底部であり、断面三角形の小さな高台が貼り付けられている。底部内面には15では整ったラセン暗文が、16では乱れたラセンあるいはジグザグ暗文が加えられている。

SE2 SB10の西側に位置する2基の井戸の内、北側にある長径約1.8m・短径約1.3mの井戸である。中央部は径約80cmの正円となっており、井戸枠が用いられたと想定される。南端はSE3に切り込まれ、埋土は大まかに暗茶褐色系土・暗灰褐色系粘土の上下2層から成る。

埋土中からは、土師質土器・黒色土器が出土している（第18図・1～12）。1～5は土師質土器の小皿であり、口径9.0cm前後・器高1.5cm前後の法量を示す。1・2は口縁部を外彎させるものであり、端部は単純におさめる。3・4は底部から連続的に口縁部が立上り、端部に弱い押しナデを加える。3では、口縁部のヨコナデによる緩やかな段が外面に認められる。5は器高が1.1cmと極めて扁平であり、口縁部と底部の境が無い。6は、口径12.2cm・器高2.0cmを計る土師質土器の大皿である。底部から内彎曲気味に口縁部が立上り、端部は単純におさめる。



第17図 T7-SE2・3平面図・断面図 SE1出土土器実測図

7～10は、黒色土器の碗である。7・8は口径が各々14.4cm、15.0cmであり、外面にヘラミガキを施すものである。7は、口縁部外面が強いヨコナデによって若干外彎曲し、口縁部外面上半に横方向の、体部には放射状のヘラミガキを持つ。内面は口縁端部に1条の沈線を巡らせ、全体にやや乱れたラセン状暗文を施す。8は、口縁部外面の横方向ヘラミガキが2段であり、内面のラセン状暗文が極めて整っている。9・10は外面にヘラミガキを加えないものであり、各々の口径・器高・高台径は、9が15.4cm・5.2cm・5.4cm、10が14.2cm・5.3cm・5.2cmである。高台は縮小・扁平化の傾向にあり、10では底部中央が接地している。外面は指頭圧痕・ナデのみであり、10では口縁部内面の沈線も無い。

11・12は、土師質の羽釜である。口径は共に25.0cmであり、口縁部が内彎し球形を呈する。2点共に外面は大まかなケズリ・ナデ、内面は横方向の粗く幅の広いハケ調整であるが、12の外面には2・3条づつのヘラミガキ様の細い条線が認められる。いずれも外面にススが付着し、暗褐色を呈する。

13～15も土師質土器の皿類であるが、1～10の1群とは明らかに時期の異なるものであり、最上面において検出されている。いずれも長い口縁部が外方へ開くものであり、口径・器高は各々6.8cm・2.0cm、10.6cm・2.2cm、13.8cm・2.5cmである。胎土・色調共に、1～6とは異なる。

SE 3 径約1.4mの井戸であるが、湧水が著しいため完掘はできなかった。壁面はかなり崩落しており、若干袋状を呈すると共に、埋土内に造構面形成土である黄色系土塊が混入している。暗褐色系土・暗灰褐色系土を埋土とし深さは2m前後と推定される。

埋土内からは、土師質土器・黒色土器・瓦器が出上している（第18図・16～19）。16は土師質土器の小皿であり、口径8.6cm・器高1.3cmを計る。外半気味の口縁端部はやや尖らせておさめ底部は若干びつである。17・18は黒色土器の碗であり、17は口径14.4cm、18は高台径が5.4cmである。器高は5.8cm前後であり、いずれも高台接合部外面に1条のヘラ調整を加え、他はナデ・指頭圧痕による調整である。19は口径15.8cm・器高6.0cm・高台径7.0cmを計る、瓦器碗である。半球状の体部に細長い断面台形の高台が付き、器壁が平均的に薄い。外面は指頭圧痕による凹凸が著しく残存し、粗い横方向のヘラミガキが施されている。内面は口縁端部に1条の沈線を持ち、体部に横方向の密なヘラミガキ、底部に一筆書きのラセン暗文が施されている。色調は、内外面共に暗銀灰色を呈する。

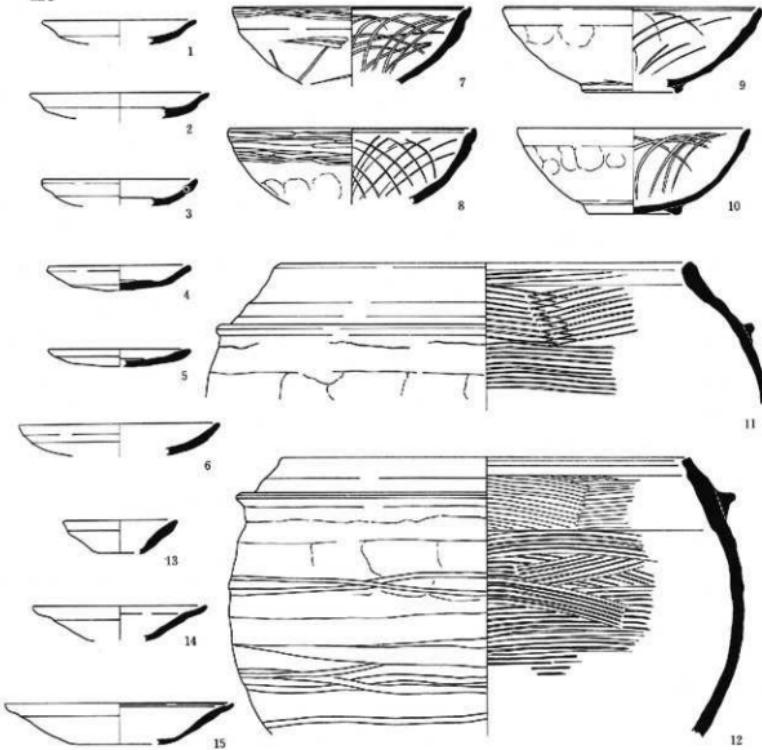
SD 1・2 約3.5の間隔を有して平行する、幅約50cmの溝である。深さ約15cmの浅い皿状を呈し、N-30°-Wに延びる。トレンチ南壁直前で2条共に終息しており、灰褐色の埋土も共通することから、2条1組であると想定される。

SD 3・4 SD 2の東約25mに位置する、やはり2条1組の溝である。幅約50cm～60cmであり、底面は平坦である。若干彎曲しているが、概ねN-10°-Eに延びている。SD 3とSD 4の間隔は、約3mである。埋土は、暗褐色土の單一層である。

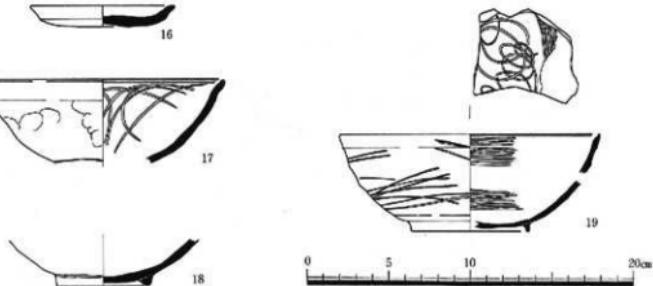
SD 5 N-53°-Wに延びる幅約1mの溝であり、SD 6を切り込んでいる。

SD 6 SD 3・4と方向・規模を同じくする溝である。

SE 2



SE 3



第18図 T 7 -SE 2・3 出土土器実測図

(8) T8・C 地区

C 地区の西端に設定した、幅約 3 m・延長 58 m のトレンチである。黄茶色系土を遺構面形成土とし検出された主要遺構は、溝 11 条・柱穴である。

SD 1 幅約 50 cm・深さ約 20 cm の黒褐色土を埋土とする溝であり、N-43°-W に延びる。

SD 2 SD 1 に平行する、幅約 1.5 m・深さ約 70 cm の溝である。埋土は最下層が暗灰色粘土である以外は、いわゆる黒ボク質の暗褐色系土であり、断面は鈍い V 字状を呈する。埋土内からは土師器杯の小片が出土している（第19図・1～3）。いずれも断面のみが実測できる程度の小片であり、胎土は精良で橙褐色の色調を呈する。

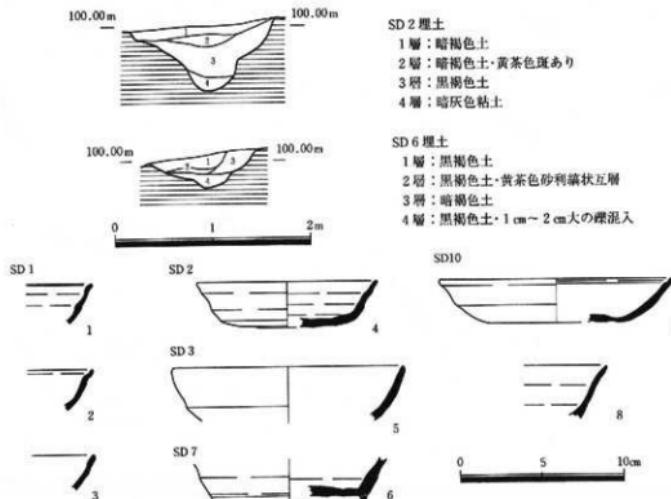
SD 3・5 幅約 1 m・深さ約 50 cm の溝であり、N-32°-E に延びる。間隔は約 5 m、断面は台形を呈する。埋土は黒褐色系土であり、SD 3 から土師器杯が出土している（第19図・5）。

SD 4 幅約 30 cm・深さ約 25 cm を計り、N-70°-W にのびる溝であり、須恵器杯身が出土している（第19図・4）。口径 11.0 cm・器高 2.8 cm を計り、底部は回転ヘラ切りである。

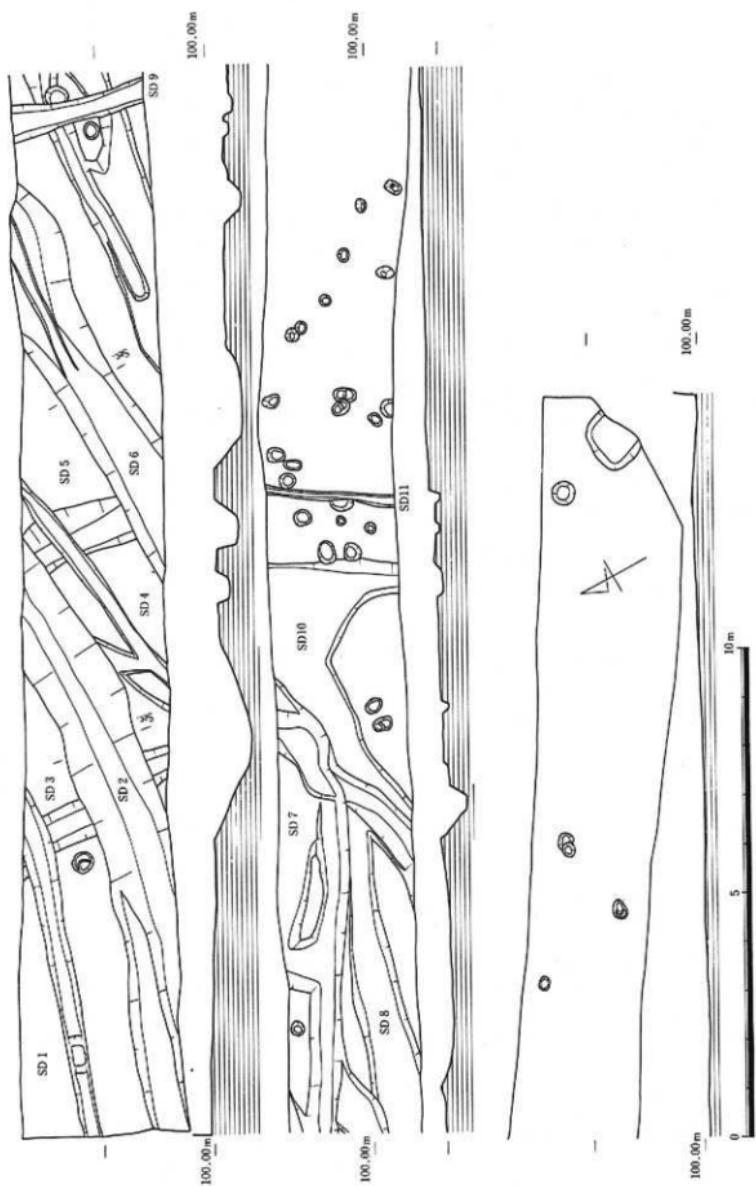
SD 6 幅が約 1.5 m であり、方向・埋土と共に SD 1 と近似するが、深さ約 40 cm の皿状を呈している。SD 1 との間隔は、約 3.5 m である。

SD 7 SD 6 の南に検出された不整形の溝であり、暗褐色土の埋土から須恵器杯身が出土している（第19図・6）。小さな高台が直立して付き、底部は回転ヘラ切りである。

SD 10 Y 字状に分岐する溝であり、土師器杯が出土している（第19図・7・8）。7 は口径 14.2 cm・器高 2.7 cm を計り、口縁端部内面に 1 条の沈線を巡らす。8 と共に色調は橙褐色である。



第19図 T8-SD 2-6 土層断面図・SD 2・3・4・7・10出土土器実測図



第20図 T 8 全体平面図

(9) T9・C 地区

JR 新幹線高架を挟んでB地区のT6・7と平行する、幅約3.5・延長約338mのトレンチである。総延長が長い上、途中で屈曲していることから、西からa～cに3分割して記述を行う。

T9-a

T7と対象形を成すトレンチであり、検出された主要遺構は溝9条・土塙2基・掘立柱建物1棟・柱穴である。遺構面形成土は東側に進むにつれ砂質を増し、暗黄褐色を呈する。

SD1・2 トレンチの西端で検出されたN-30°-Eに延びる2条の溝であり、T8-SD3・5と連続するものである。幅約1.6m・深さ約90cmであり、V字状に再掘削されている。

SD3 幅約3.2m・最深部約1.6mを計る溝であり、N-52°-Eに延びる。一部底面が2段掘りになっているが、概ね鈍いV字状の断面形を成す。埋土は下層が暗灰色粘土、大部分を占める上層が黒ボク質の黒褐色土である。下層においては砂質土と縞状を成しており、水流があったことが窺われるが、その後短期間に黒褐色土によって埋没している。規模・形状・埋土から、T8-SD2が屈曲もしくは分岐したものである。埋土内には土師器・須恵器の細片が数点出土している。実測可能なものは含まれないが、概ねT8-SD2出土の土師器類と同形態である。

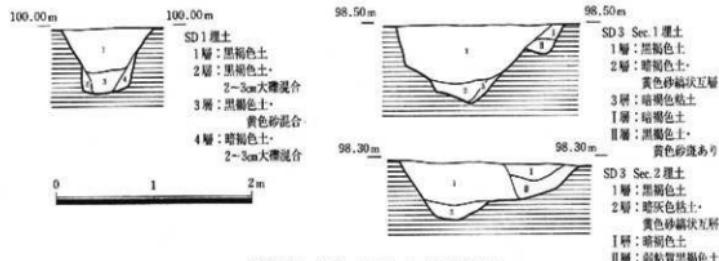
SD9 トレンチ東端部分に散在する柱穴群の中の位置する、幅約50cm・深さ約30cmの溝である。ほぼ東西にのび、埋土は暗褐色土である。SD9の延長部分は、T9-bにおいても検出されている。

SB1 SD9の西側に位置する掘立柱建物の北西隅部分である。一辺約45cmの隅丸方形の柱穴で構成され、柱穴間は2.1mである。主軸方位をN-10°-Eとしており、東側約3.8mに位置するSD9とはほぼ同じである。

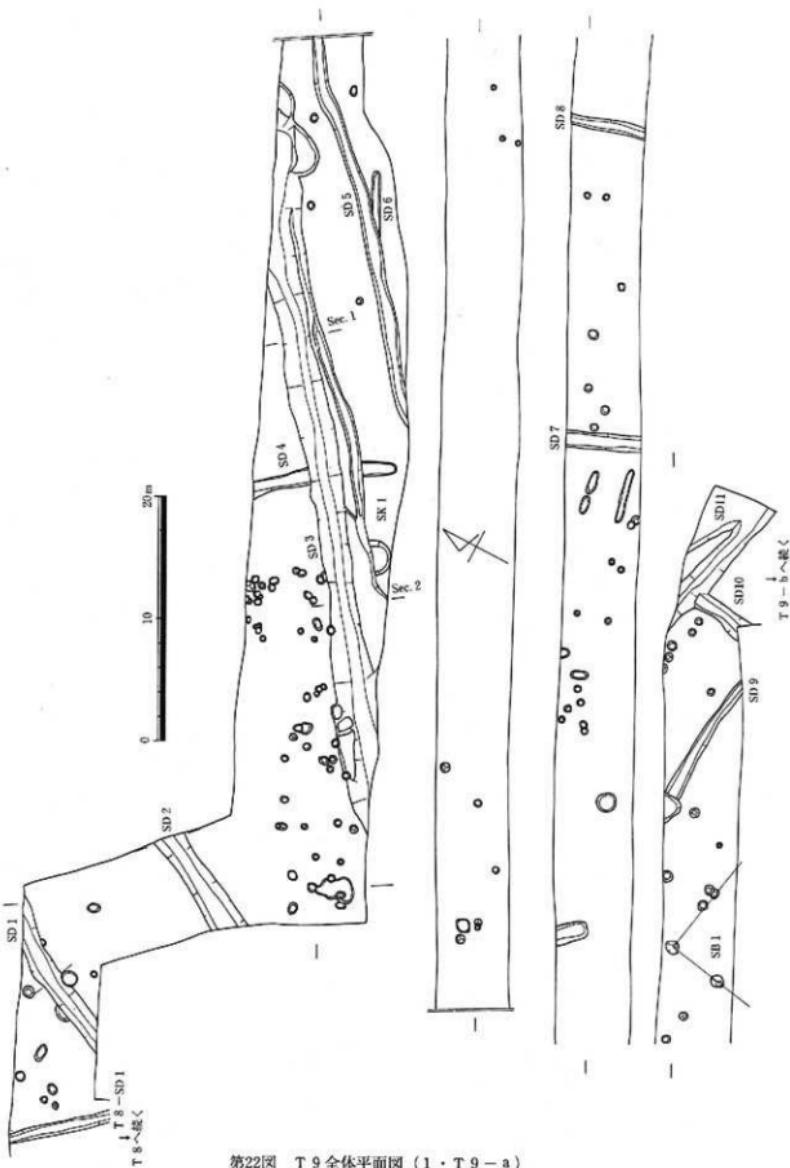
SK1 SD3を切り込む径約1.3mの円形もしくは梢円形の土壙である。埋土は暗褐色土であり、近世の陶磁器片が若干量出土している。

T9-b

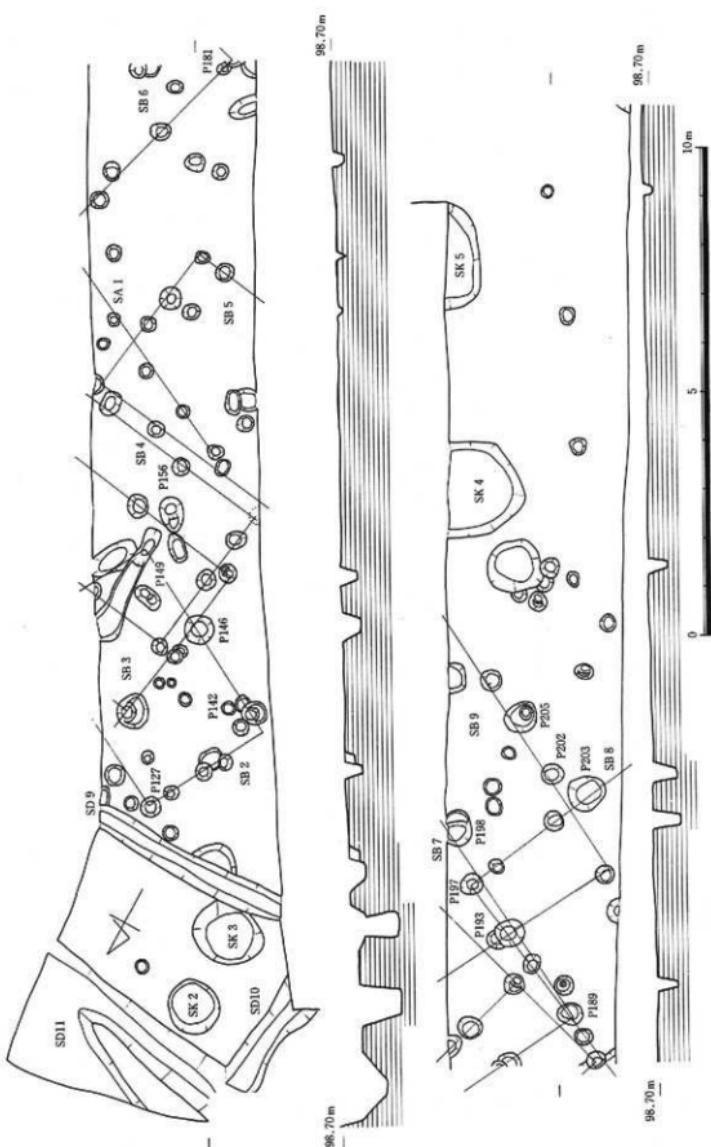
T9-aの東端から南に延びる延長約37m分であり、検出された主要遺構は掘立柱建物8棟・土塙4基・溝4条である。



第21図 T9-SD1・3 土層断面図



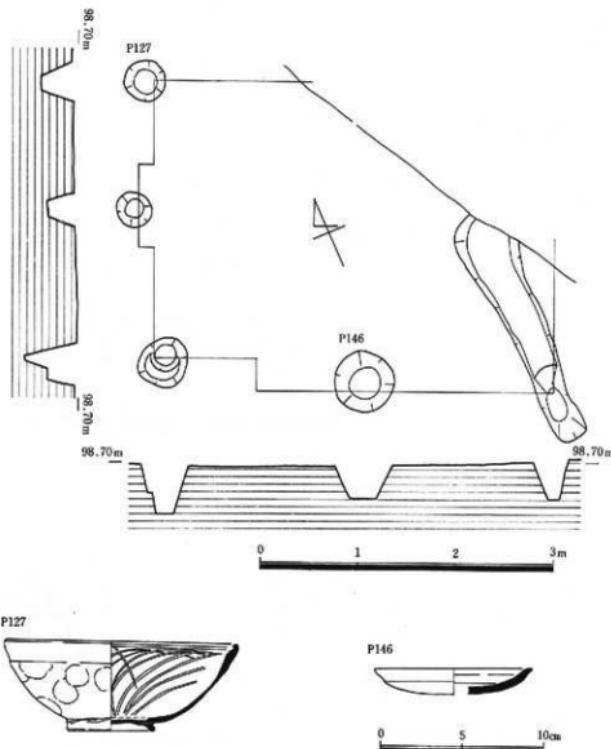
第22図 T9全体平面図 (1・T9-a)



第23図 T9全体平面図 (2・T9-b)

SB 2 トレンチの両端にある SD 9・13の間に密集する柱穴によって構成される掘立柱建物の内、最も北に位置するものである。2間×2間以上の規模を有し、主軸方位を N-24°-E とする。柱穴は径約40cm～60cmの円形のものであり、柱穴間は西辺が1.3m・南辺が2.1mである。北西隅部分のある P 127からは、黒色土器がほぼ完形で出土している（第24図・1）。出土の状況は、掘方中位部の壁面に接して伏せた状態、つまり高台部を上にして検出された。口径14.2cm・器高5.3cm・高台径5.0cmを計り、内縁気味に口縁部が立ち上がる。外面は、ヨコナデ・指頭圧痕によって成形され、高台接合部外面にヘラ調整が加えられている。口縁部の器壁が最も厚く、単純におさめられた口縁端部内面に1条の沈線、全体にラセン状暗文を施す。南辺の P 146からは、土師質土器の小皿が出土している（第24図・2）。口径・器高は9.6cm・1.6cmであり、口縁端部を外反気味に尖らせておさめている。

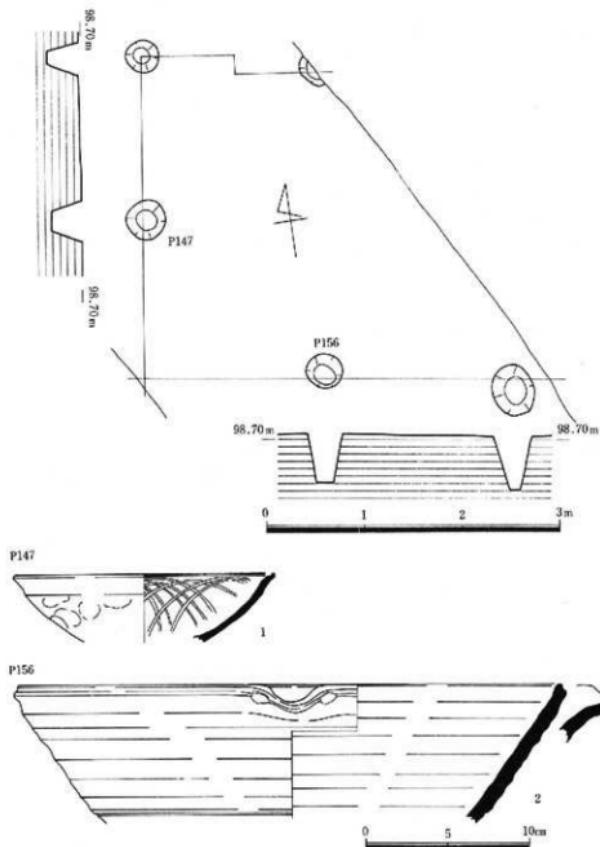
SB 3 SB 2と重複する2間以上×1間以上の掘立柱建物であり、N-9°-Eを主軸方位と



第24図 T 9-SB 2 平面図・断面図・出土土器実測図

する。径約40cm~70cmの円形柱穴から成り、柱穴間は西辺が1.75m・南北辺が2.1mである。

SB 4 SB 3と主軸方位をほぼ同じくして重複する、2間×2間以上の掘立柱建物である。径約40cmの円形柱穴によって構成され、柱穴間は西辺が1.6m・南北辺が1.8mであり、桁行方向に若干長くなっている。梁間にあたる西辺中央のP 147からは、黒色土器碗が出土している（第25図・1）。器高は5.0cm前後と推定されるが、口径が15.6cmであり、かなり扁平な印象を与える。口縁部はヨコナデによって若干外彎し、端部内面と言うよりはほぼ上端に1条の沈線を巡らす。内面には比較的整ったラセン状略文を施し、外面は指頭圧痕・ナデによってのみ調整される。南辺のP 156からは、常滑焼のこね鉢が出土している（第25図・2）。口径は33.0cmであり、片口



第25図 T 9 - SB 4 平面図・断面図・出土土器実測図

となっている。口縁端部外面には平坦面を有し、1条の凹線が巡る。成形は水引きナデにより、色調は暗赤褐色である。

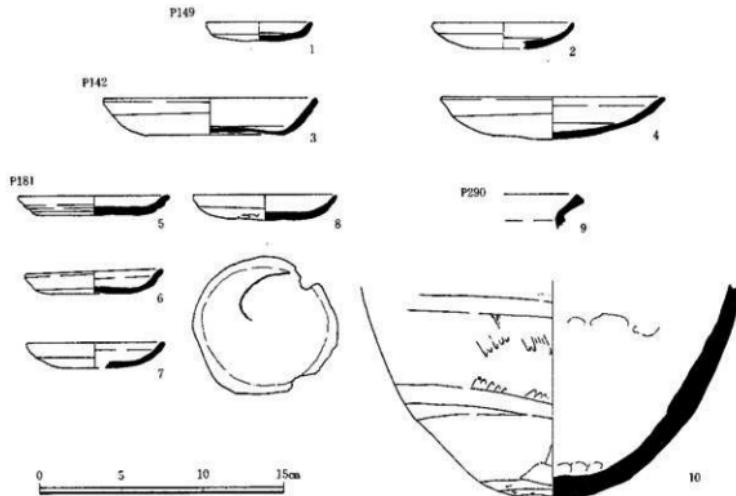
SB 5 SB 3 と主軸方位を同じくし、南側に並列して位置する 2間以上×2間以上の掘立柱建物である。径約30cmの円形柱穴によって構成され、柱穴間は北辺・東辺共に1.6mを計る。

SB 6 SB 5 の東側に位置する、1間以上×2間以上の掘立柱建物である。トレンチの東方に2・3間分延びるのではないかと想定される。径約40cmの円形もしくは隅丸方形の柱穴によって構成され、西辺から東1間にも柱筋が通る。平均柱穴間は2.1mであり、SB 3～5 と主軸方位はほぼ同じ N-15°-E とする。

SA 1 SB 2 から約2m南に、南辺と平行する径約20cmの柱穴が4個検出された。柱穴の規模や間隔が約1.1mと他の掘立柱建物と比較すると狭いことから、方向を同じくする SB 2 に付随するもしくは同時期の横列であると想定される。

P142 SB 2 の南西隅部分のやや内側にある径約30cmの円形柱穴であり、土師質土器の大皿が2点出土している（第26図・3・4）。いずれも口縁端部に押しナデを加えるものであるが、3は平底から明瞭な屈曲を有し、4は底部から緩やかに内弯して口縁部が立ち上がる。口径・器高は各々12.6cm・2.3cm、13.4cm・3.0cmである。

P149 SD12の西側に検出した長径約60cmの隅丸長方形の柱穴であり、土師質土器小皿が2点出土している（第26図・1・2）。1は口径6.4cmで小さ目であるが、形態は2と同じである。

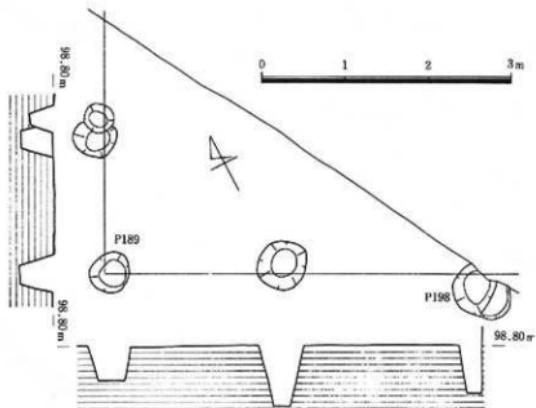


第26図 T 9 - P142・149・181・290出土土器実測図

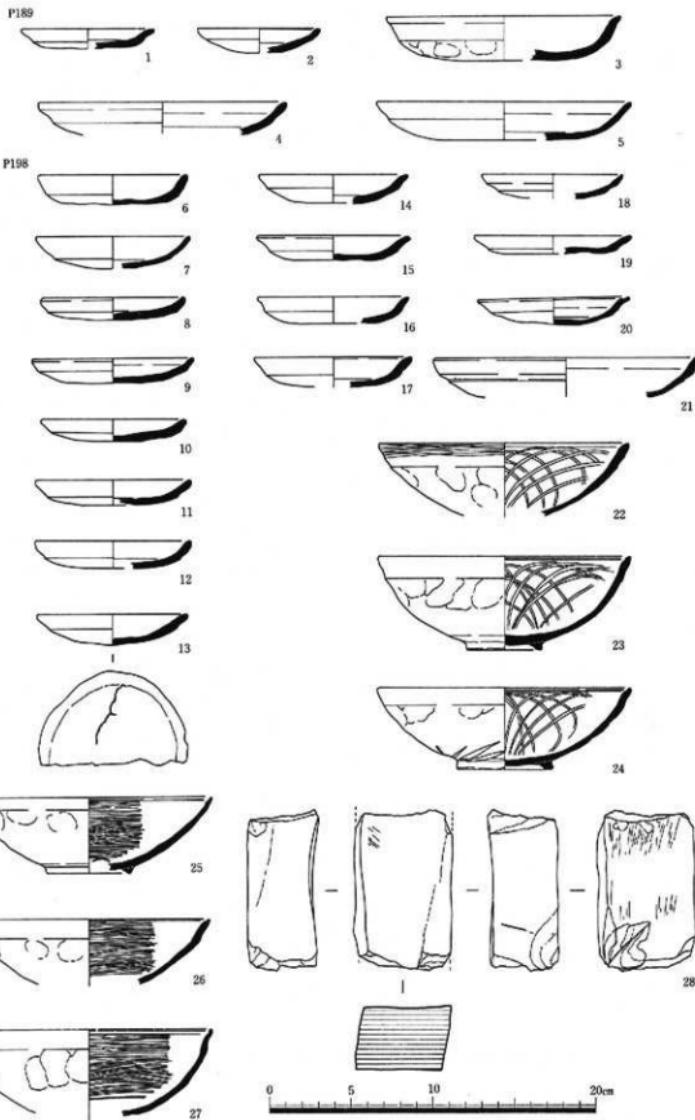
SB 7 SB 6 と重複する 1 間以上×2 間以上の掘立柱建物であり、N-28°-E を主軸方位とする。当トレンチで検出された掘立柱建物の中で最もしっかりした径約60cmの円柱形穴によって構成され、径約15cm～20cmの柱痕が認められる。柱穴間は西辺が1.6m、南辺が2.1mであり、東西にやや長くなる。

南西隅にあたる P189からは、土師質土器皿類が出土している（第28図・1～5）。1・2は小皿であり、口径・器高は各々8.0cm・1.2cm、7.4cm・1.5cmである。1は口縁部を外反させ、2は底部から連続的に緩やかに立ち上がる。3～5は、口径14.2cm～15.4cmの大皿である。平底の底部から緩やかに口縁部が立ち上がるもので、端部は単純におさめられている。底部内面には1方向のナデが加えられ、外面は指頭圧痕が残存するが概ね平滑に仕上げられている。

同じく南辺を構成する P198からも、多量の土器類・砥石が出土している（第28図・6～28）。6～20は土師質土器の小皿であり、口径が8.6cm～9.6cm、器高が1.2cm～1.8cmの範囲内に収まる。6～13は、底部から連続的に口縁部が内縛して立ち上がるものである。口縁端部は概ね単純におさめるが、8・9では弱い押しナデが認められる。14～19は口縁部を外反させるものであり、端部はやや尖り気味である。20は口縁端部内面、むしろ上面に凹線状の段を有するものである。21は、口径15.8cmの土師質土器大皿である。口縁部外面には強いヨコナデによる凹線状の段を持ち、端部には弱い押しナデが施される。22～24は、黒色土器の碗である。口径15.4cm・器高5.8cm～5.0cmであり、断面三角形の高台を有する。22では口縁部外面に横方向のヘラミガキが、24では高台接合部外面に放射状のヘラ調整が施される。口縁端部内面の沈線は極めて細く、22には認められない。25～27は瓦器碗であり、口径約15.0cm・器高約5.0cmである。いずれも外面にヘラミガキは認められず、内面は密な横方向のヘラミガキを施し、口縁端部に1条の沈線を持つ。28は砂岩質の砥石であり、幅5.5cm・厚さ4.0cmを計る。



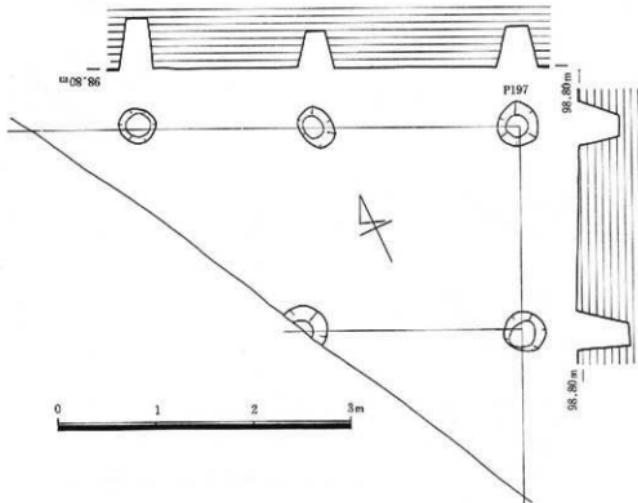
第27図 T 9 - SB 7 平面図・断面図



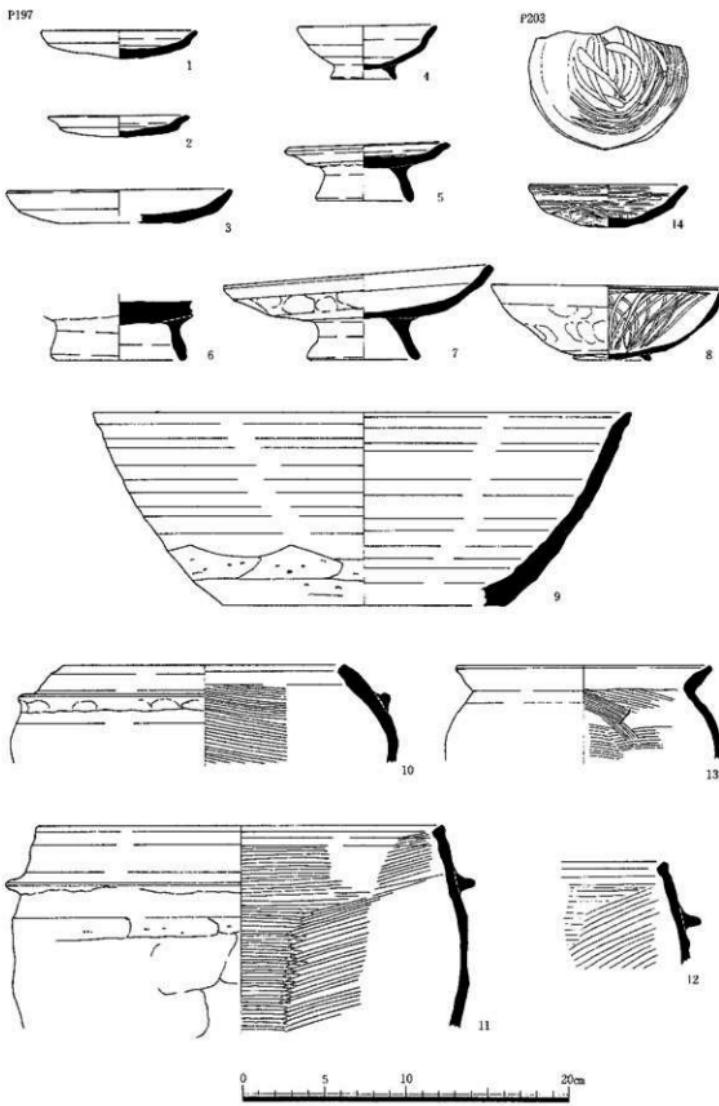
第28図 T 9 - SB 7 出土遺物実測図

SB 8 SB 7 の南辺と北辺が重複する 1 間以上 × 2 間以上の掘立柱建物であり、N—30°—E を主軸方位とする。径約40cmの円形柱穴から成り、柱穴の間隔は平均2.0mである。トレンチの南側に 2 間程度広がるものと想定され、北辺から南 1 間にも柱筋が通る。

北東隅部分にあたる P 197からは、SB 7 に次ぐ量の土器類が出土している（第30図・1～13）。1・2は土師質土器の小皿であり、口径・器高は各々9.2cm・1.7cm、8.4cm・1.3cmである。いずれも口縁部を外反させ、端部は若干尖り気味である。3は土師質土器の大皿であり、口径13.4cm・器高2.0cmを計る。口縁部は緩やかに内彎し、端部は単純におさめる。4は土師質土器の杯であり、口径・器高・高台径は8.5cm・3.3cm・3.8cmである。口縁部は弱い屈曲を呈して外反し、断面二等辺三角形の高台が余り開かず付く。内外面共に指頭圧痕・ヨコナデ調整であるが、内面には光沢がありヘラミガキが施されたと想定される。5～7は台付き皿であり、5は口径9.3cmの小皿、7は口径16.2cmの大皿に脚の長い高台が八の字状に貼り付けられている。5の口縁端部内面には1条の沈線が巡り、7では端部に押しナデが加えられる。8は黒色土器の碗であり、口径14.2cm・器高4.5cm・高台径5.0cmを計る。高台は粗雑・扁平であり、内面の暗文は2方向の放射状文の組合せである。9は灰釉系のこね鉢であり、口径34.0cm・器高11.8cmである。全体は水引きナデによって成形され、外面最下部に2段程度横方向のヘラケズリ調整を加える。色調は灰白色であり、2～3mm大の砂粒を含む。10～12は土師質の羽釜であり、10では口縁部が大きく内彎する。いずれも口縁端部に内傾する平坦面を持ち、内面には横方向のハケが顕著に残る。13は単純くの字状口縁を有する土師質の壺であり、口径は15.4cmである。器高はあまり高くならず、鍋と称した方が良いであろう。



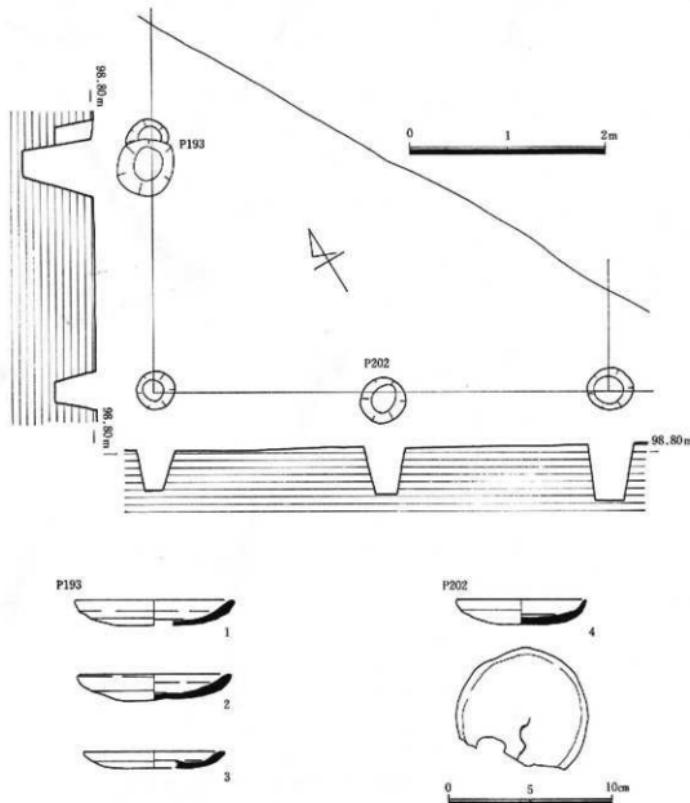
第29図 T 9 - SB 8 平面図・断面図



第30図 T 9 - SB 8 出土土器実測図

SB 9 SB 8と同じ主軸方位をとる、2間×1間以上の掘立柱建物である。径約40cmの円形柱穴で構成され、柱穴間は2.4mである。西辺のP193は、SB 8の南辺を構成するP192に切り込まれている。なお、SB 9以降においては柱穴が極めて散漫になっており、SB 2～8の範囲が建物群つまり1つの住居域の中心であると想定される。

西辺のP193からは、土師質土器の小皿が出土している（第31図・1・2）。いずれも短めの口縁部が底部から緩やかに内彎して立ち上がり、口径・器高は各々9.6cm・1.5cm、9.4cm・1.7cmである。口縁端部は単純におさめ、内面には1方向のナデを加える。南辺のP202からも、1点土師質土器小皿が出土している（第31図・3）。口径8.0cm・器高1.5cmを計り、P193出土の2点より口縁部の内彎が強い。また、全体に器壁が薄く、口縁端部は尖らせ気味におさめられている底部外面には、成形時の粘土接合痕が顕著に残存している。



第31図 T 9 - SB 9 平面図・断面図・出土土器実測図

P 181 SB 6 の南西隅部分の柱穴に切り込まれた、径約30cmの柱穴である。埋土内からは、土師質土器が4点出土している（第26図・5～8）。5は外面の口縁部下端にヨコナデによる2条の凹線状の段を持ち、口径9.2cm・器高1.2cmである。6～8はいずれも口径8.4cm～8.6cm・器高1.5cmであり、口縁端部は丸くおさめる。8の底部外面には、成形時の粘土接合痕が顕著に認められる。

SK 2 SD 9 と SD10 の間に検出された2基の土塙の内、北側に位置するものである。径約1mの円形であり、深さは約80cmである。底面は平坦であり、埋土は暗褐色系土が20cm程度ずつ堆積している。埋土内からは土師質土器・黒色土器の小片が若干量出土しているが、図示し得ない。

SK 3 SK 2 の南側に位置する、径約1.4mの卵形を呈する土塙である。深さは約1mを計り南半部分の下半部は袋状になっている。埋土の状態はSK 2 とほぼ同質であり、土師質土器・黒色土器・瓦器が出土している（第36図・1～4）。1は口径8.6cm・器高1.4cmを計る土師質土器の小皿であり、口縁部は緩やかに内擣して立ち上がる。2は、瓦器の小皿である。口径が9.2cm、器高が2.3cmであり、土師質土器と比較すると若干深目となっている。丸みを帯びた底部から明瞭な屈曲を持って口縁部が外反して延び、端部外面に弱い面を持っています。底部外面には指頭圧痕が顕著に認められ、口縁部はヨコナデによって成形される。底部内面には、一筆書きのジグザグ暗文が施されている。色調は、内外面共に黒灰色を呈する。3も瓦器であり、口径13.0cmの碗である。器高は深く、大きく内擣して口縁部が立ち上がる。口縁部上端には水平な平坦面を持ち、端部内面に1条の沈線を巡らす。外面には横方向のヘラミガキを数条加え、内面は横方向のヘラミガキが極めて密に施されている。4は、黒色土器の碗である。口径・器高・高台径は14.0cm・4.5cm・5.4cmであり、直線的に大きく外方へ口縁部が延びるため、扁平な印象を与える。口縁部外面には横方向のヘラミガキが加えられ、内面には疊らなラセン状暗文が施される。高台は断面三角形を呈し、大きく八の字状に貼り付けられている。

SK 5 T 9-b の南端で検出された径約2.5cmの土塙であり、深さ約1mを計る。埋土は暗褐色系土でありSK 2・3と近似するが、炭化物を多量に含む土層が含まれること、前2者が井戸状の形態であるのに対してSK 5 は摺鉢状を呈することから性格・機能が異なると想定される。

埋土内には土師質土器・黒色土器・瓦器片が多量に含まれるが、いずれも小片であり図示し得たのは3点に過ぎない（第36図・5～7）。5は口径・器高が8.2cm・1.6cmとなる土師質土器の小皿であり、口縁部を外反気味に立ち上がらせる。6は口径14.6cmの黒色土器碗であり、内外面共に磨滅が著しいが、外面下方に放射状のヘラミガキが認められる。7は口径13.4cmを計る瓦器碗であり、内面には幅広の横方向ヘラミガキが施されている。

SD10 T 9-b の北端で検出された幅約60cmの溝であり、SD11に直交して連続する。

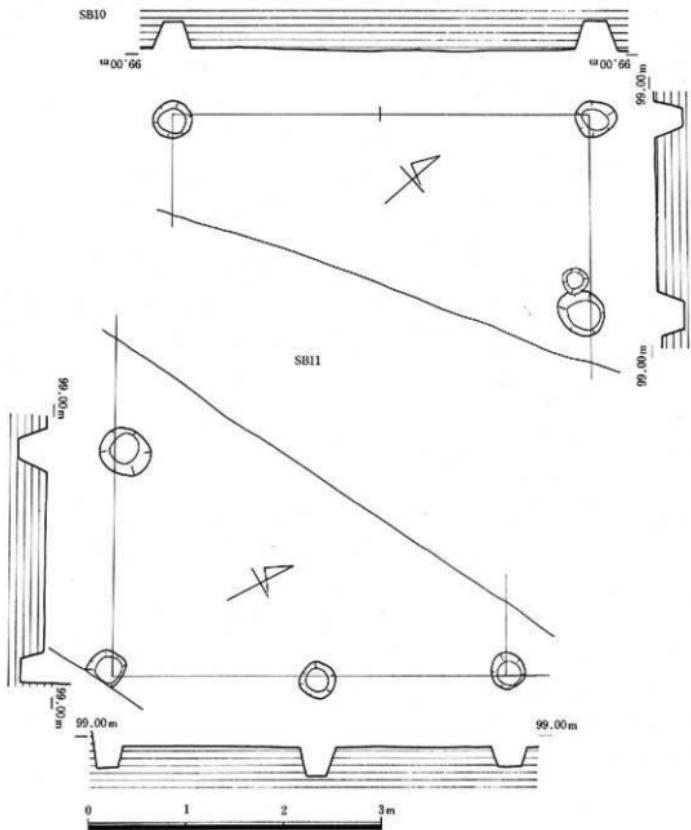
SD11 トレンチ北壁に沿って検出されたN-80°-Wに延びる溝であり、検出部分における最大幅は約2.5mである。底面は一部W字状をなし、東壁における断面観察では砂質土と黒褐色土が縞状に互層を成す層があり、流水があったことがうかがわれる。

T 9-c

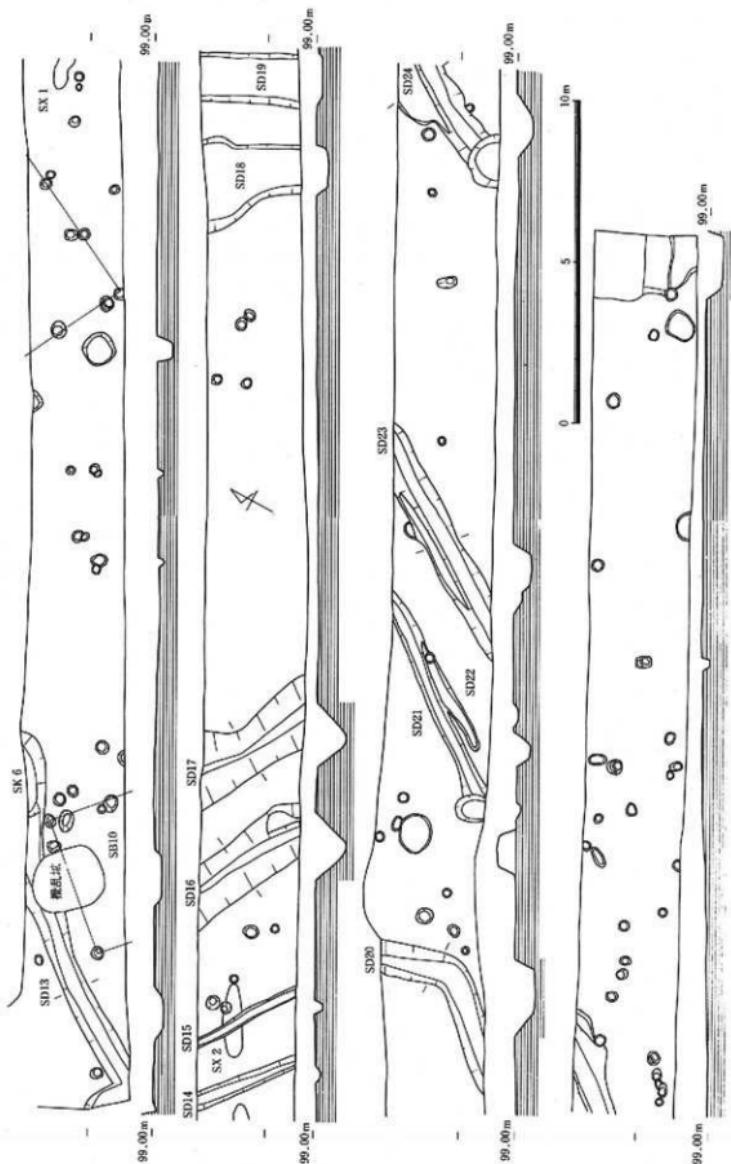
T 9-b 南端から東に連続する、延長約125m部分である。検出された主要遺構は、掘立柱建物2棟・溝12条・土塙3基・焼土土塙2基である。

SB10 SD13の南に近接して検出された、2間×1間以上の掘立柱建物である。径約40cmの円形柱穴によって構成され、柱穴間は2.1mである。主軸方位はN-48°-Wであり、SD13とはほぼ直交している。北辺中央の土塙は、近世のものである。

SB11 SB10の東方約15mに位置する、2間以上×1間以上の掘立柱建物である。径約35cmの円形柱穴から成り、柱穴間の平均は1.8mである。主軸方位をN-28°-Eに取り、SB10とは若干異なる。



第32図 T 9-SB10・11平面図・断面図



第33図 T 9 全体平面図 (3・T 9 - c)

P 290 SD24以東に散在する柱穴の1つであり、径約45cmの円形である。埋土内からは、須恵器が出土している（第26図・9・10）。9は口縁部の断面であり、短いくの字状口縁の端部は平坦であり、自然軸がかかっている。10は壺の底部であり、9とは別個体である。底部は丸底であり、外面はタカキが僅かに認められるが、ナデによって平滑に仕上げられ、底部は回転ヘラケズリである。内面はナデによって極めて平滑に仕上げられ、器壁は約1.5cmと厚い。色調は灰白色を呈し、胎土は精良である。

SD13 T 9-c の西端に位置する幅約90cm・深さ約70cmの溝であり、N-37°-E に延びる。断面は台形を呈し、底部が平坦になっている。埋土は上層が黒褐色土、中・下層が暗褐色土であり、下層は粘質土となっている。SK 6との切り合い関係は、SD13がSK 6よりも新しい。

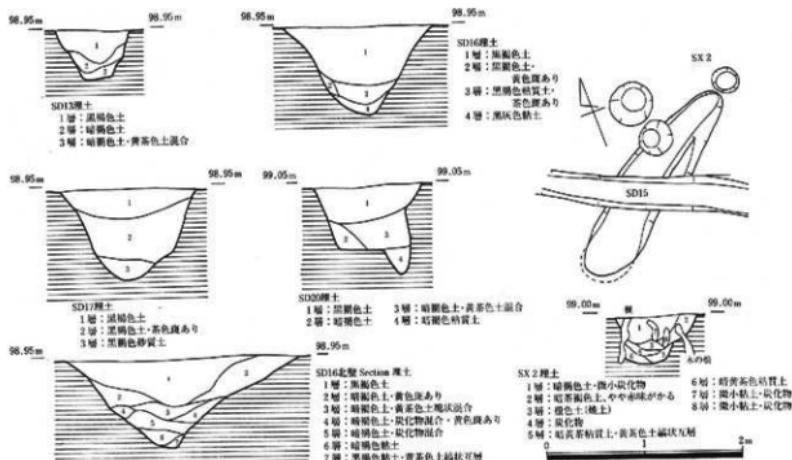
SD14・15 SB11の東側で検出された4条の並行する溝の内、掘立柱建物に近く幅約50cmと狭いものである。N-55°-W に延び、2条の間隔は約1.8mである。いずれも埋土は暗褐色土の単一層であり、遺物の出土は認められない。

SD16・17 SD15・16の東側約3mに並行する、幅約1.5mの溝である。深さは約1mであり黒褐色系土を埋土とする。断面形はU字状を呈し、2条の間隔は約3mである。

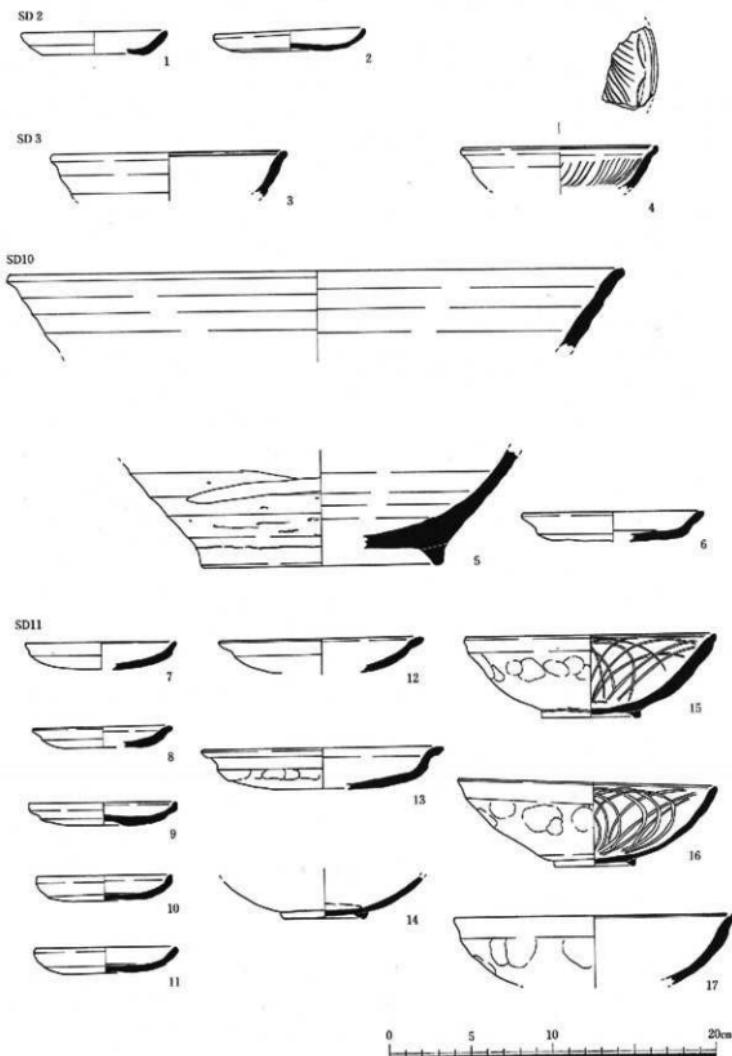
SD20 L字状に屈曲する幅約1.2mの溝であり、埋土は黒褐色土・暗褐色土である。

SD21・23 共に N-35°-E に延びる溝であり、2条の間隔は約2.5mである。幅はSD21が約50cm、SD23が約1.2mであり、埋土は黒褐色土の単一層である。

SD24 SD23の東方約7mに位置する幅約1mの溝であり、SD21・23と平行する。埋土も黒褐色土の単一層であり、共通している。



第34図 T 9-SD13-16-17-20断面図・SX2平面図・断面図



第35図 T 9 - SD 2・3・10・11出土土器実測図

SK 6 SD13に上面を切り込まれた径約2.8mの円形もしくは隅丸方形の土壙である。深さは1m以上あり、埋土は暗褐色系土の瓦層である。埋土内からは、土師質土器・黒色土器・瓦器が出土している（第36図・8～10）。8は土師質土器の小皿であり、口径・器高は9.2cm・1.3cmである。9は黒色土器碗であり、口径15.0cmを計る。磨滅が著しいが外面にはヘラミガキは認められない。10は口径15.0cmの瓦器碗であり、内面は密な横方向のヘラミガキが施される。この他にも多量の土器片が出土しているがいずれも小片となっており、埋土の状態・土壙の形態・土器の出土状況等SK 5と極めて近似している。

SX 1・2 SD14・15と重複する幅約50cm・長さ約2.2mの土壙状の遺構である。部分的に袋状となっており、埋土内に多量の炭化物・焼土を含んでいる。炭化物は上層では1cm以下の細片であるが、下半部においては径3～5cm・長さ5～15cm大であり、木炭の原型を留めている。土器類は検出されず、性格は不明である。

SD10・11出土土器 第35図・5・6はSD10出土、7～17はSD11出土である。5は灰釉系のこね鉢であり、口径38.0cmを計る。口縁端部は丸くおさめられ、丸みを帯びた断面三角形の高台が付く。全体は水引きナデで成形され、外面下半にはヘラケズリが施されている。胎土には1～3mm大の砂粒が多量に含まれ、色調は灰色である。6は土師質土器小皿であり、口縁部を外反させ立ち上がらせる。口径・器高は、11.0cm・1.8cmである。

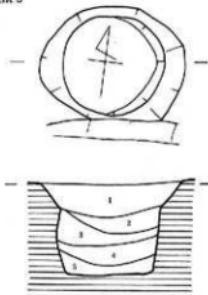
7～11は土師質土器小皿であり、7・8は口縁部を外反させるもの、9～11は内縫気味に立ち上がらせ端部に押しナデを加えるものである。口径は8.2cm～9.2cm、器高は1.3cm～1.6cmの範囲内に収まる。12・13は土師質土器の大皿であり、共に口縁端部を大きく外方へ引き出している。口径・器高は各々、12.4cm・2.2cm、14.6cm・2.5cmである。14～17は、黒色土器の碗である。14は磨滅が著しく調整は不明であるが、高台部に対応する底部内面には高台接合時にできたと想定される爪跡が円形に巡っている。15は口径15.2cm・器高5.0cmを計り、器壁が極めて厚いものである。外面はヨコナデ・指頭圧痕で成形され、高台接合部外面にヘラ調整が加えられている。口縁端部内面に1条の沈線を巡らし、ラセン状暗文を施す。高台は断面台形を呈するが、かなり縮小・扁平化している。16は口径・器高・高台径が各々15.7cm・5.2cm・4.8cmであり、体部が外方へ開き気味に立ち上がっているため、15と比較すると若干扁平な印象を与える。高台は小さな断面三角形のものであり、外面のヘラ調整は施されていない。口縁端部内面の沈線は極めて細く、ラセン状暗文も整っている。17は磨滅が著しく調整は不明であるが、口縁部を外反気味に崩曲させ、端部を尖らせておさめている。

(10) T10・C地区

T 9-cの東側に連続する幅約3m・延長約77mのトレンチであり、遺構面形成土は黄茶色砂質土である。東端部分は擁壁工事等による影響を受けている様であるが、検出された主要遺構は溝数条・土壙2基・柱穴である。

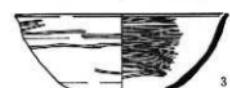
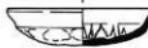
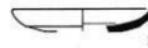
SD 1 トレンチ西端および南端部分で検出された幅約60cmの溝であり、N-53°-Wに延び

SK 3

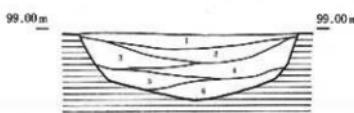


SK 3 地上

- 1層：暗褐色土
2層：暗茶褐色土
3層：暗茶褐色土・黃茶色土混合
4層：暗褐色土・黃茶色土壤
5層：暗褐色粘土

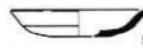


SK 5

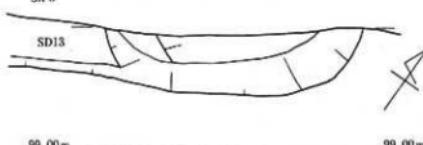


SK 5 地上

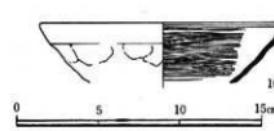
- 1層：暗褐色土
2層：暗褐色土
3層：暗褐色土・碳化物混入
4層：暗灰褐色土・碳化物混入
5層：暗灰褐色土
6層：暗褐色粘土質土



SK 6



- SK 6 地上
1層：暗褐色土
2層：暗茶褐色土
3層：暗褐色土・
暗茶褐色土・粘土質土
4層：暗褐色土
5層：暗褐色粘土質土
6層：暗褐色粘土質土
黃茶色土粘土質土



第36図 T 9—SK 3・5・6 平面図・断面図・出土土器実測図

ている。埋土は暗褐色土の単一層であり、遺物の出土はない。

SK 1 トレンチ中央部で検出された長辺5.2m・短辺約3.0mの長方形土塙である。東半部が深さ約1.4mと深くなっている、埋土は灰褐色土・黄灰色土である。埋土中からは、陶磁器・瓦片が出土しているが、概ね近世のものである。

SK 2 径約1.5m・深さ約45cmの円形土塙であり、重複する溝を切り込んでいる。埋土は灰褐色土の単一層であり、近世陶磁器小片が若干量出土している。

(11) T11・C地区

国道8号線沿い幅約3.5m・延長約153mのトレンチであり、遺構面形成土は黄茶色系土である。西端部では粘質を増し、東端部では1~2cmの大の礫が混入する。検出された主要遺構は、竪穴住居3棟・溝14条である。

SD 1・2・3 トレンチの東端で検出されたほぼ東西に延びる溝であり、トレンチの東側に広がる落ち込みに流れ込んでいる。SD 3はSH 2を切り込んでおり、埋土は茶褐色粘質土である。

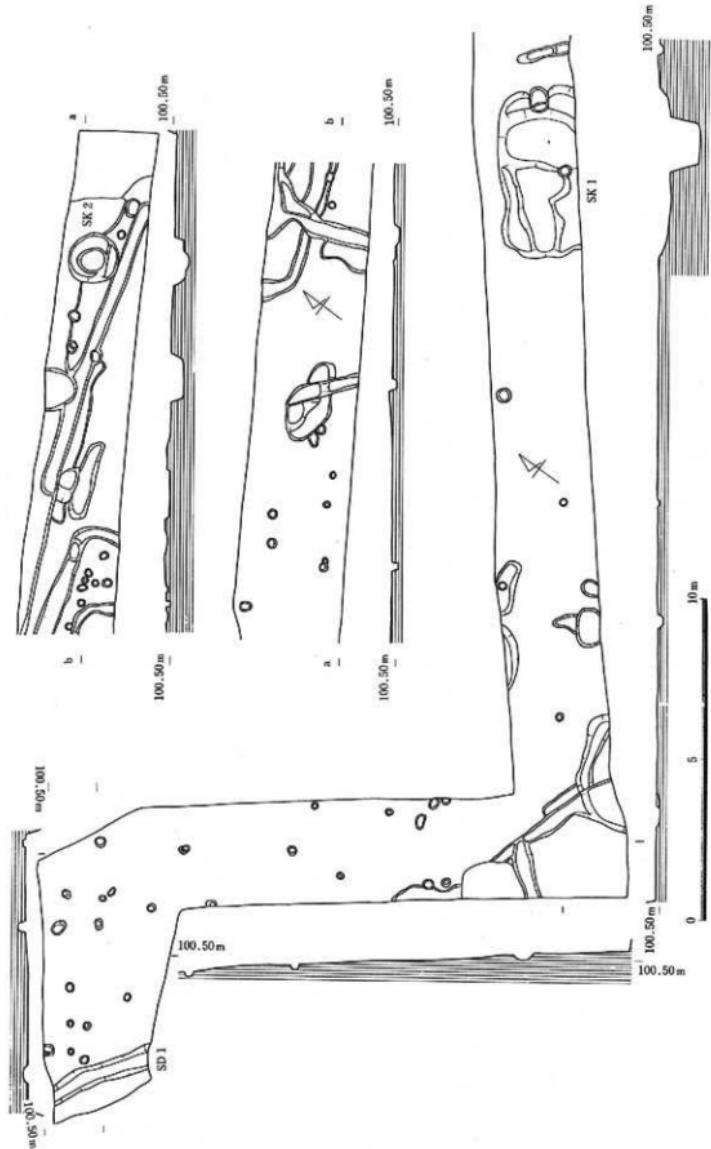
SD 5 SH 3以西において検出された溝列の内最も東側に位置する、幅約3.5m・深さ約75cmの溝である。N-45°-Wに延びており、この方向はSD 6~10に共通している。底面は中央部が緩やかなW字状を呈し、暗褐色系土および黒褐色土を主体とする埋土中に、暗茶褐色系土を埋土とする幅約1.5m・深さ約65cmの溝が切り込んでいる。当初溝の埋土からは、須恵器杯壺が1点出土している(第39図・1)。天井部が平坦であり、宝珠つまみの剥離痕が認められる。端部は短く内側に屈曲し、断面三角形を呈する。

SD 6 SD 5の西約1.8mにある幅約1.2mの溝である。西肩に暗茶褐色土を埋土とする浅い皿状の溝が切り込んでいるが、SD 6自体は断面台形を成し、暗褐色系土を埋土としている。

SD 7 SD 6との間隔が約2.5mを計る幅約1.2m・深さ約80cmの溝であり、断面形がV字状となっている。埋土は3層に分けられるがいずれも黒褐色土系土である。埋土中からは、須恵器杯身が1点出土している(第39図・2)。底部のみであるが、高台を作わない形態のものであり、底部外面は回転ヘラ切りである。

SD 8 幅約5.4mを計る溝である。底面がW字状を呈しているのは、黒褐色系土を埋土とする西側の溝に暗褐色系土を埋土とする2段掘りの溝が切り込んでいるためである。礫を混入する黒褐色土層である5層からは、黒色土器碗が出土している(第39図・6・7)。6は口径・器高・高台径が各々15.6cm・5.5cm・5.2cmであり、比較的しっかりした高台が付いている。口縁部外面および高台接合部外面には丁寧な横方向のヘラミガキが施され、その間に放射状および短い横方向のヘラミガキが認められる。内面は口縁端部に1条の沈線を施し、極めて整ったラセン状暗文を施す。7もほぼ同様のものであるが、若干体部の内彌が強い。

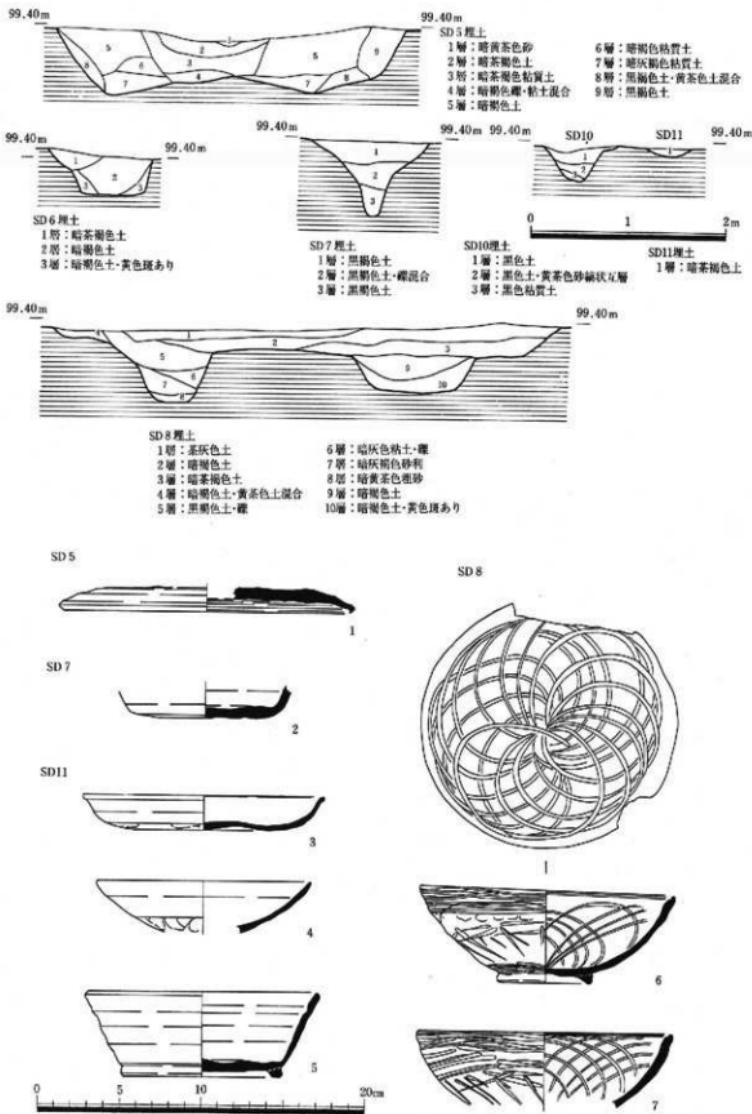
SD 9・10 幅約50cmの溝であり、T11の中では細いものである。埋土は暗褐色土の単一層であり、浅い皿状となっている。



第37図 T10全体平面図



第38図 T11全体平面図



第39図 T11-SD 5・6・7・8・10・11断面図 SD 5・7・8・11出土土器実測図

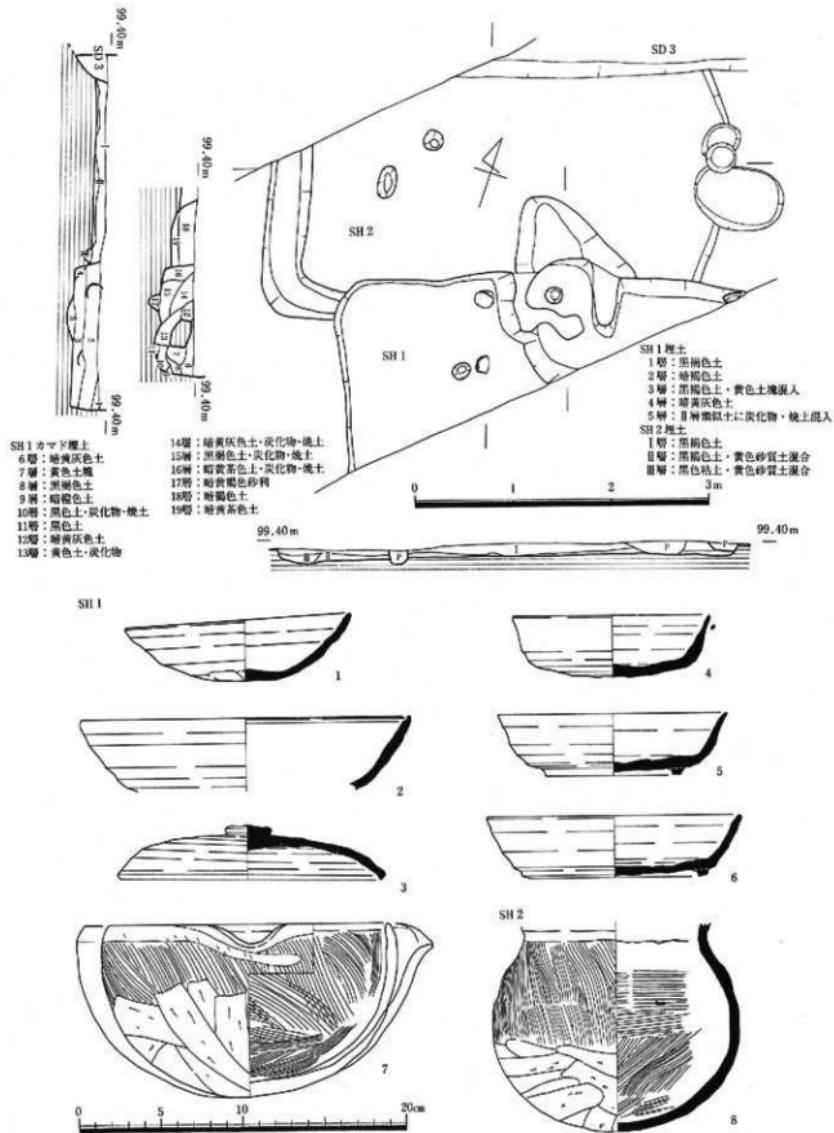
SD11 SD10に切り込まれた幅約60cmの溝であり、方向はN-67°-Wに延びている。埋土は黒色土質であり、下層では粘土・中層では黄灰色砂と縞状の互層を成している。埋土内からは、土師器・須恵器が出土している（第39図・3～5）。3は土師器の皿であり、口径14.8cm・器高2.1cmを計る。底部から緩やかな屈曲を呈して口縁部は立ち上がり、端部を外方へ突出させておさめる。胎土は精良であり、色調は橙褐色を呈する。4は口径13.2cm・推定器高約3.5cmの土師器杯であり、長い口縁部は内側気味に大きく開いている。焼成は堅固であり、色調は黄灰褐色を呈する。5は須恵器の杯身であり、口径・器高・高台径は13.8cm・5.3cm・4.6cmを計る。底部から口縁部が直線的に立ち上がり、端部は単純におさめる。高台は幅広の断面台形のもので、底部は回転ヘラケズリである。

SH1 トレンチ東端部分で検出された2棟の竪穴住居の内、南側に位置しSH2を切り込むものである。北西隅部分と北辺に取り付けられたカマド痕のみの検出であるが、1辺約4.5mと推定され、床面積は約20m²と想定される。主軸方位はN-23°-Wであり、北辺がSD3とほぼ平行している。カマドは、両袖がほぼ完全に残っており、床面との比高は約25cmである。北辺のはば中央に位置しており、壁面から若干外方へ突出している。燃焼部の底面には支柱石痕が認められ、カマド内部は崩落壁体・焼上・炭化物が堆積している。カマド内および前面からは土師器皿・甕の破片が出土しているが図示し得ない。

他の遺物はカマド西側および北東隅部分から出土している（第40図・1～6）。1・2は土師器の杯であり、口径・器高は各々12.8cm・3.5cm、22.0cmである。1は外面ヘラケズリの底部から連続的に口縁部が立ち上がるるもので、端部は単純におさめる。2は口縁端部内面に1条の凹線を巡らせ、外面下半～底部はヘラケズリによって調整される。1は焼成が堅緻であり、色調は1が橙灰色、2が橙褐色を呈する。3は宝珠つまみを持つ須恵器の杯蓋であり、口径16.2cmを計る。丸みを帯びた天井部には扁平な宝珠つまみが付き、口縁端部は外面に面を形成することによって断面三角形にする。4～6は須恵器の杯身であり、4は高台を有しない。4の口径・器高は12.0cm・3.7cmであり、直立気味の口縁端部を尖らせておさめる。底部は回転ヘラ切りであり、内面にガラス質の自然釉が溜まっている。5・6はいずれも扁平な断面台形の高台を有し、口径・器高は各々13.8cm・3.8cm、15.4cm・3.8cmであり、6は杯蓋である3と組み合わされる。7は土師器の片口鉢であり、長径20.0cm・短径17.0cmの橢円形を呈している。底部は外面ヘラケズリ調整の丸底であり、口縁端部はヨコナデによって単純におさめられる。内面には全面にハケメが顯著に見られ、成形・形態等長財甕と共通している。

SH2 SH1に南辺を切り込まれている1辺約4.5mの竪穴住居である。主軸方位はSH1とほぼ同じであり、床面積は同規模である。東辺に若干の膨らみが認められるが、基本的には方形の平面形を成す。西辺および南辺には極めて浅い皿状の壁溝が巡っているが、床面にはその他の竪穴住居に伴う遺構は認められない。また、SH1と比較すると残存する床面までの深さが浅く黒褐色土を埋土とする。

床面直上からは、土師器の甕が1点出土している（第40図・8）。口縁部は欠損しているが、



第40図 T11-SH1・2平面図・断面図・出土土器実測図

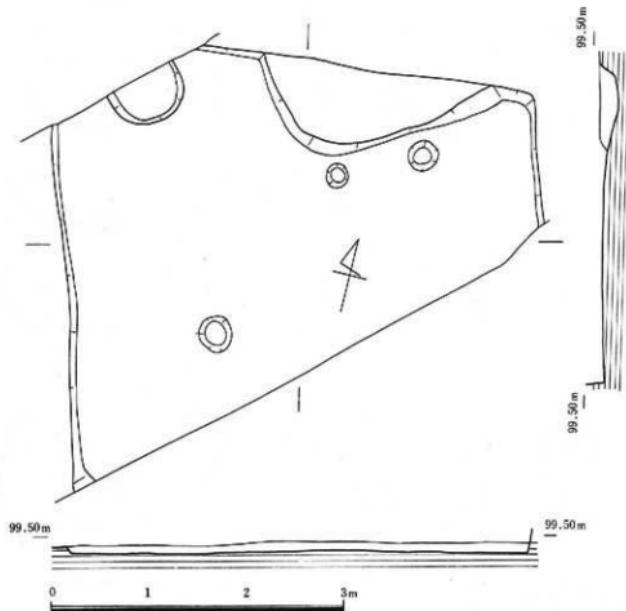
器高15cm前後を計る小形の壺である。体部下半はヘラケズリ、上半および体部内面はハケ調整であり、外面にはスヌの付着が認められる。

SH 3 SH 1・2 の西方約18mに位置する1辺4.6m～5.0mの整穴住居であり、規模は前2者とほぼ同じであり、主軸方位は N-17°-W である。極めて浅くしか残存していないが、北辺中央部に半円状の高まりが検出された。極めて堅固であり、断面観察によると床面を若干掘り窪め、地山質の土を盛り上げている。北西隅部分には焼土・炭化物の含む埋土を持つ落ち込みがあり、カマドの痕跡であると想定される。壁面に対しても、斜交することとなる。床面には当整穴住居に伴う柱穴は存在せず、遺物の出土も無い。

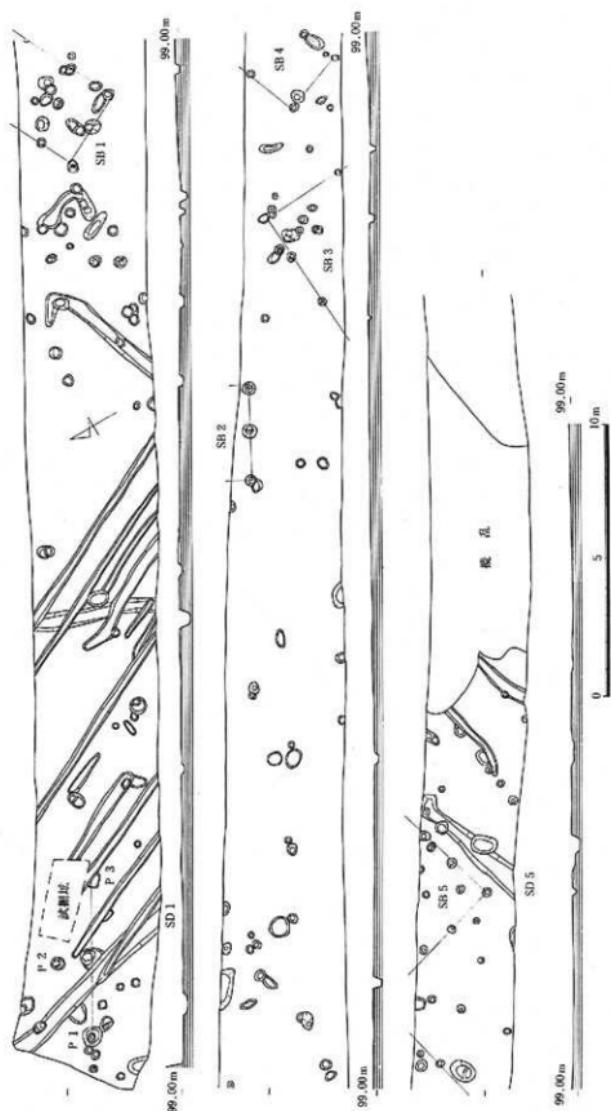
(12) T 12・C 地区

近江鉄道沿いに設定した幅約4.5m・延長約120mのトレンチである。黄茶色砂質土を造構面形成土とするが、南端では粘性が増し、若干疊が混入する。検出された主要遺構は、掘立柱建物5棟・小溝列である。

SD列 トレンチの北西端から約25mの間において検出された22本の並行する溝である。各溝の規模は幅約30cm～40cm・深さ約10cm～20cmであり、N-25°-W の方向に延びている。溝の



第41図 T 11-SH 3 平面図・断面図



第42図 T12全体平面図

間隔は1mもしくは50cmであり、ほぼ均一である。柱穴の重複も見られないことから、耕作痕と判断される。

SB1 2間×2間以上の掘立柱建物であり、耕作痕と直交するN-64°-Eを主軸方位としている。柱穴は径約30cm~50cmの円形のものであり、柱穴間の平均は約1.7mである。

SB2 トレンチのはば中央に位置する掘立柱建物であるが、西辺2間分を検出するのみである。主軸方位はN-62°-Wであり、柱穴は当トレンチ内の掘立柱建物を構成する柱穴の中でも最もしっかりしたものであり、径約50cmの円形を呈する。

SB3 SB2の南に位置する2間以上×2間以上の掘立柱建物であり、主軸方位をN-9°-Wに取る。径約30cmの円形柱穴から成り、柱穴間の平均は北辺が1.95m・東辺が1.70mである。

SB4 SBの南側に位置する1間×2間以上の掘立柱建物であり、主軸方位はN-19°-Wである。

SB5 SB4とほぼ直交するN-18°-Wを主軸方位とする2間以上×1間以上の掘立柱建物である。径約30cm~40cmの円形柱穴によって構成され、柱穴間は西辺が1.8m、南辺が1.6mを計る南辺と平行してSD5が検出されている。

P1・2・3 耕作痕に切り込まれた3個の柱穴である。径約70cm・柱痕径約25cmを計る円形もしくは隅丸方形の平面形を持ち、柱穴間は約3mである。当トレンチの中では他に認められない柱穴であり、これらを1辺とした掘立柱建物の存在する可能性がある。

SD1 トレンチ北西端において検出されたN-18°-Wに延びる溝であり、幅約80cmを計る。底面は浅い皿状を呈し、暗褐色土を埋土とする。P2を切り込み、耕作痕に切り込まれている。

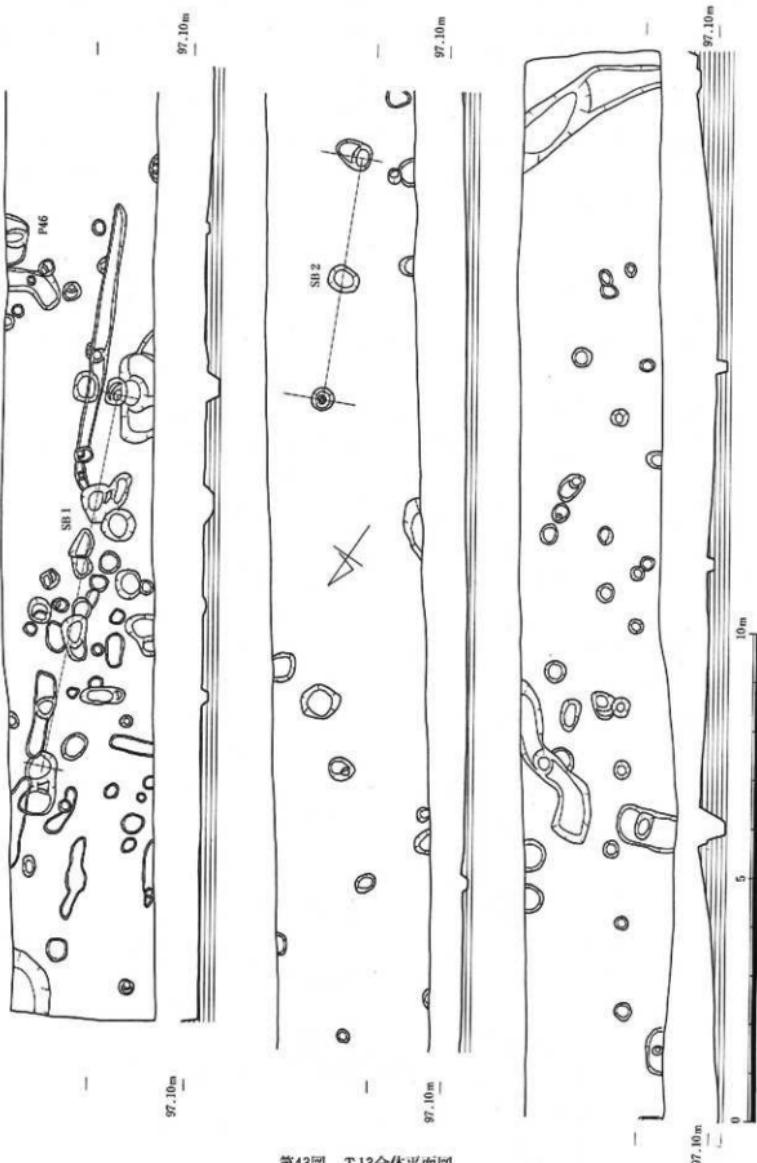
SD5 N-71°-Eに延びる幅約70cmの溝であり、底面は浅い皿状を呈する。SD5以降においては遺構面の擾乱が著しく、遺構は確認されなかった。

尚、当トレンチにおいては上部質土器の微小片が若干量出土したに過ぎず、遺物からの時期決定は出来ない。

(1) T13・A地区

幅約3m・長延約61mのトレンチである。遺構面形成土は黄茶色系土であり、北側では粘性が南側では砂質性が増加する。トレンチの南約40m部分は現水田との比高差約1mの畑地であり概ね盛土によって形成されているが、トレンチの北端と南端とでは約1mの高低差があり、緩やかではあるが遺構面においても傾斜が認められる。検出された主要遺構は、掘立柱建物2棟・溝である。

SB1 トレンチ北端約15mの部分には柱穴がかなり重複して検出されており、その中で最も形状・規模がしっかりした柱穴によって構成される3間以上×の掘立柱建物である。柱穴は1辺50cm~60cmの隅丸方形のものであり、柱穴間の平均は2.4mである。主軸方位はN-23°-Wとし、周辺の溝とほぼ平行もしくは直交している。したがって、当初は耕作痕とも想定されたが、掘立柱建物に伴う雨落ち溝的性格も考えられる。



第43図 T13全体平面図

SB 2 トレンチのはば中央に位置する2間×の掘立柱建物の西辺であり、主軸方位はN-25°-Wである。径約50cm-60cmの円形もしくは梢円形の柱穴によって構成され、柱穴間の平均は約2.5mである。

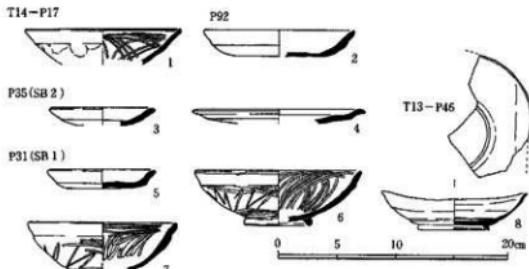
P 46 トレンチの壁沿いに検出された柱穴であり、1辺約1mの隅丸方形になると想定される。埋土からは、縁釉牛生地の耳皿が1点出土している(第44図・8)。高台内面には段を有し、近江産の特徴を興味ある。内面見込み周縁およびこれに対応する外面には浅い凹線が1条巡り、口縁部の折返しは弱い。

(14) T14・A地区

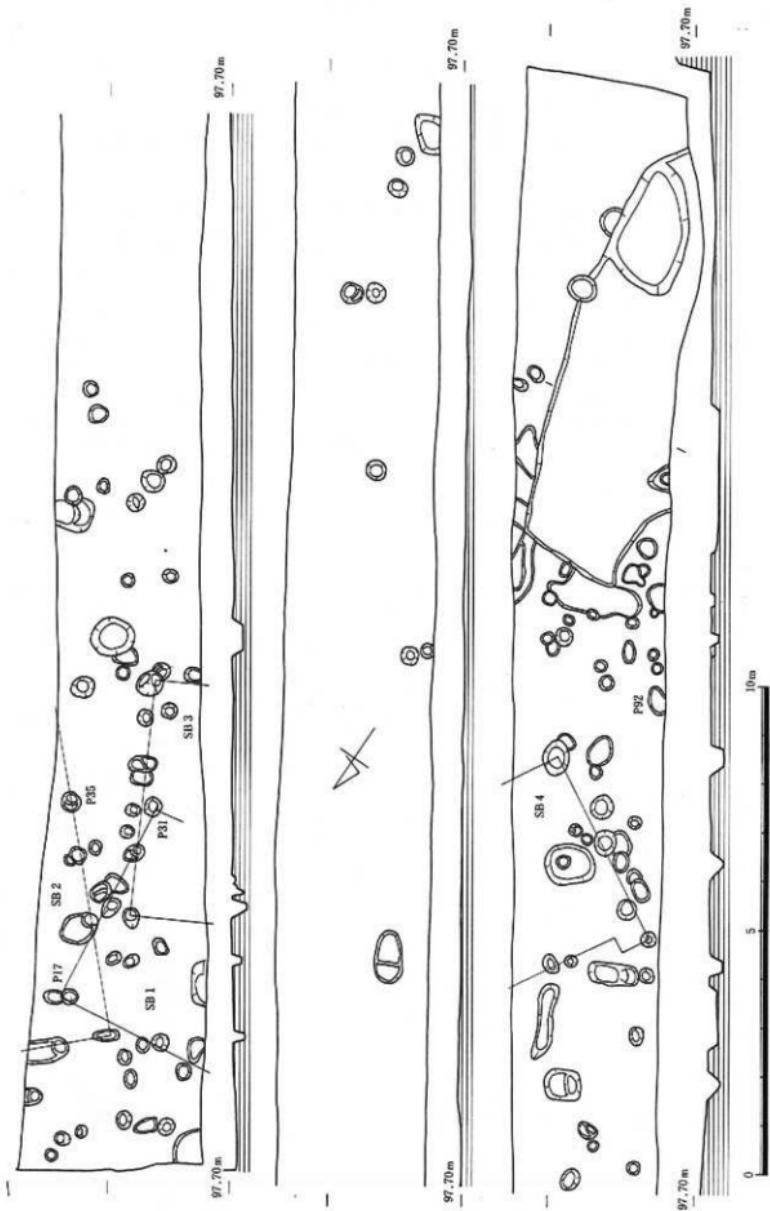
T13の南側延長部分にあたり、幅約3m・延長約67mのトレンチである。遺構面形成土はT13と同じであるが、現水田下部分である南半では粘性が強い。検出された主要遺構は、掘立柱建物4棟・不定形の落ち込みである。

SB 1 トレンチ北半柱穴集中部分にある1間以上×2間以上の掘立柱建物である。主軸方位をN-7°-Wとし、径約30cmの柱穴によって構成される。柱穴間は北辺が2.3m、東辺の平均が2.15mである。東辺のP 31からは、土師質土器・黒色土器が出土している(第44図・5~7)。5の土師質土器小皿は、口径9.0cm・器高1.6cmを計り、口縁部は外反して延び端部は丸みを帯びておさめる。6・7は、黒色土器の碗である。6は口径12.4cm、7は口径14.0cm・器高4.7cm・高台径5.4cmである。いずれもやや器壁が厚く、口縁部の外面には強いヨコナデによる段が明瞭に認められる。2点共に外面に放射状のヘラミガキが施され、7では高台接合部周辺の横方向のヘラミガキが極めて丁寧である。口縁端部内面の沈線は無く、7では密なラセン状暗文、6ではやや変則的な暗文が施されているが、共に作りは丁寧である。

SB 2 SB 1の東辺に重複し、N-43°-Wを主軸方位とする2間以上×の掘立柱建物の西辺である。平均柱穴間は2.4mであり、P 35からは土師質土器が出土している(第44図・3・4)。3は口径5.6cmを計り、底部から連続的に口縁部が大きく外方へ開き、端部は若干一面を持つ。4は口径13.4cmであり、口縁端部を水平気味に外方へ突出させる。



第44図 T13-P46・T14-P17・31・35・92出土土器実測図



第45図 T14全体平面図

SB 3 SB 1 と重複する 3間×の掘立柱建物の 1辺である。N-30°-W を主軸方位とし、柱穴間は北 1間が1.2m、他が1.8mである。

SB 4 トレンチ南端柱穴集中部に位置する 1間以上×2間以上の掘立柱建物である。主軸方位は N-30°-E、柱穴間は2.1mである。

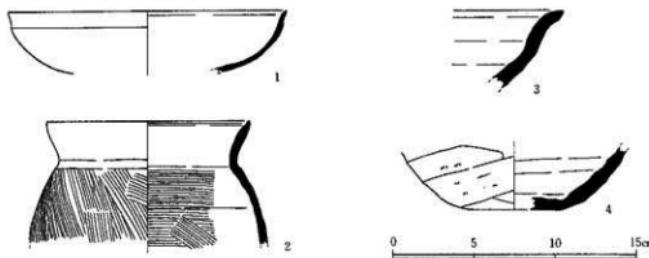
P 17・92 2 個の柱穴からは、黒色土器・上師質土器が出土している（第44図・1・2）。1はP 17出土の黒色土器碗であり、口径13.2cmを計る。口縁部は直線的に外方へ開き、端部に弱い面を持つ。外面にはヘラミガキは認められず、内面にラセン状暗文を施す。2はP 92出土の土師質土器の大皿であり、口径12.6cm・器高2.2cmを計る。口縁部は若干内側気味に立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。

(15) T 15・A 地区

T 14の南に続く幅約3m・延長約51mのトレンチである。遺構面形成土は黄灰色粘質土であり検出された主要遺構は溝・柱穴である。

SD 1・2 トレンチの北端に検出された 2 条の溝である。幅20cm～70cmを計り、N-35°-E に延びる。底面は平坦であり、平面はややいびつである。

SD 3 SD 2 の南約7mに位置する幅約1.4m・深さ約35cmの溝である。N-67°-E に延び、暗茶褐色系土を埋土としている。埋土内からは、土師器・須恵器が出土している（第46図・1～4）。3は最上面において出土した信楽焼のこね鉢であり、切り込んでいる小溝（耕作痕）に伴う混入である可能性が高い。1は土師器の碗であり、底面直上で検出された。壊滅が著しく調整は不明であるが、口径17.0cmを計り、底部から連続的に内側して立ち上がる口縁の端部は内傾する面を有する。胎土は精良であり、色調は橙褐色である。2は上師器の臺であり、口径12.4cmを計る。口縁部は内外面共にヨコナデによって調整され、端部内面には弱い沈線が巡っている。体部は内外面共にハケ調整であり、あまり刷が張らないものである。4は須恵器臺の底部である。外面はヘラケズリ、内面はヨコナデによって調整される。



第46図 T 15-SD 3 出土土器実測図



第47图 T15全体平面图·SD 3断面图

(16) T 16・A 地区

T 15 の南に連続する幅約 3 m・延長約 45 m のトレンチであり、遺構面形成土は T 15 と同様の黄灰色粘質土である。検出された主要遺構は、溝 13 条・方形土塹 3 基・柱穴である。

SD 1 トレンチの北端で検出された N-75°-E に延びる溝である。トレンチ内においては幅 1.4 m 分しか検出されていないが、北側に並行して流れている現水路とほぼ重複していると推定される。埋土は茶褐色土・暗灰色粘土の上下 2 層から成り、遺物としては土師質土器の小片が若干量出土するに過ぎない。尚、当トレンチにおいて検出された以の 12 条の溝についても、いずれ SD 1 と同じもしくは直交する方位を取っている。

SD 5 幅約 50 cm の溝であり、L 字状に屈曲して延びる。

SD 8・9・11・12 幅約 30 cm ~ 50 cm の溝であるが、深さ約 2 cm ~ 5 cm と非常に浅いものであり、耕作痕である可能性が高い。

SD 13 トレンチ南端で検出された幅約 70 cm・深さ約 40 cm の溝であり、L 字状に屈曲して伸びている。断面形は概ね U 字形を成しており、トレンチ西壁近辺では深さ約 60 cm と更に深く掘り込まれている。埋土は暗茶褐色土・灰褐色粘質土・暗灰色粘土の 3 層であり、西端の中層灰褐色粘質土上面において銅鏡が 1 点出土している（第 48 図・1）。径 2.5 cm を計る永楽通宝である。土器類の出土は認められない。

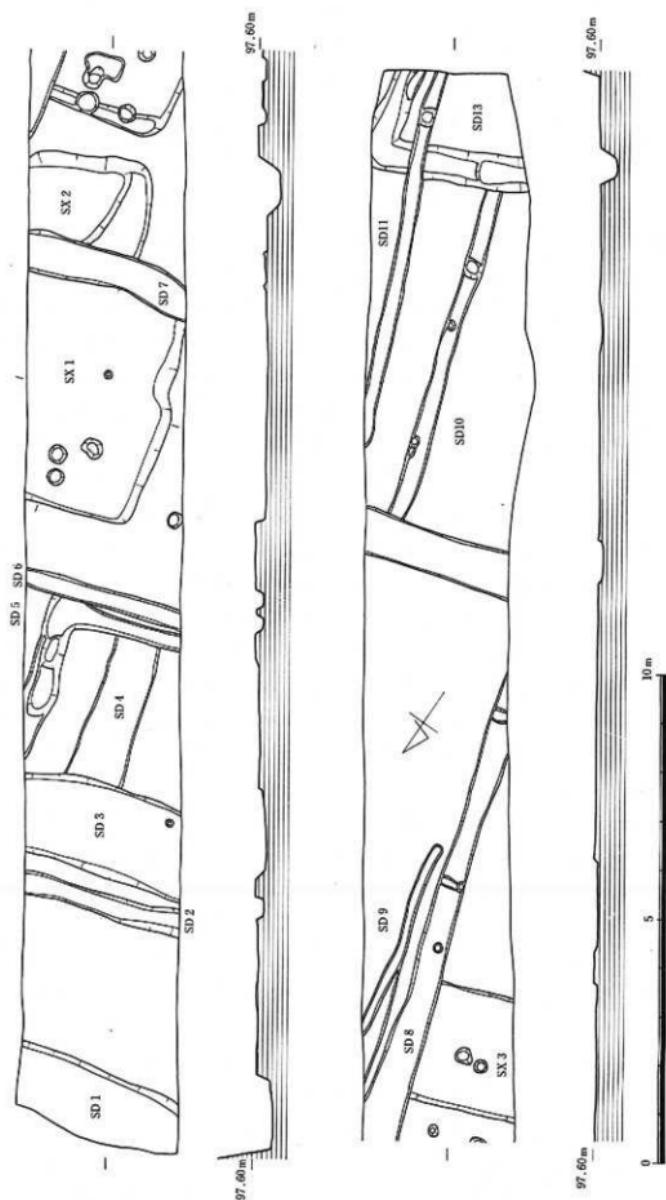
SX 1 トレンチのほぼ中央部に位置する 3 基の土塙の内、最も北において検出されたものである。南辺は SD 7 に切り込まれているが、1 辺 4.5 m 程度になると想定される。西辺はややいびつであるが、平面形はほぼ正方形となる。底面は凹凸が著しく、南側約 1/3 は大きく掘り込まれている。埋土は暗茶褐色土・暗灰褐色土の上下 2 層であり、主軸方位は溝と同じである。柱穴は埋土上面から切り込んでおり、当土塙に伴うものではない。

埋土内からは、須恵器が 3 点出土している（第 50 図・1～3）。1 は、口径 11.2 cm を計る杯蓋である。天井部は丸みを帯びて高く、口縁端部は垂直に屈曲させ尖らせ氣味におさめる。調整は、内外面共にヨコナデである。2 は口径 12.9 cm・器高 3.8 cm を計る杯身である。回転ヘラ切りの底部は平坦であり、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部の器壁は薄く、端部は単純



S = 1/1

第 48 図 T 16-SD 13 出土銅鏡拓影図



第49图 T 16全体平面图

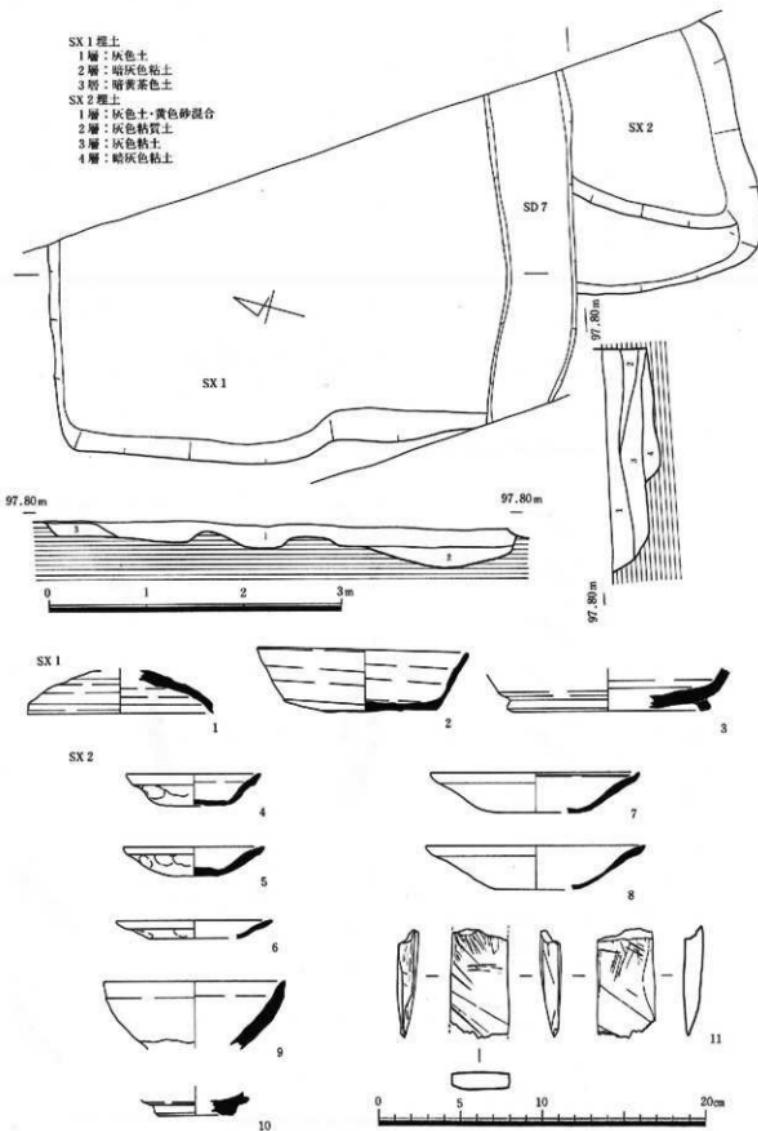
におさめる。3は高台を有する杯身であり、高台径は11.2cmである。高台は断面方形を呈し、やや開き気味である。

出土遺物は以上の3点であり、平面形とあわせて竪穴住居である可能性が考えられるが、底面の形状および後述するSX3との比較から断定することはできないので、ここではあえてSX1と称する。

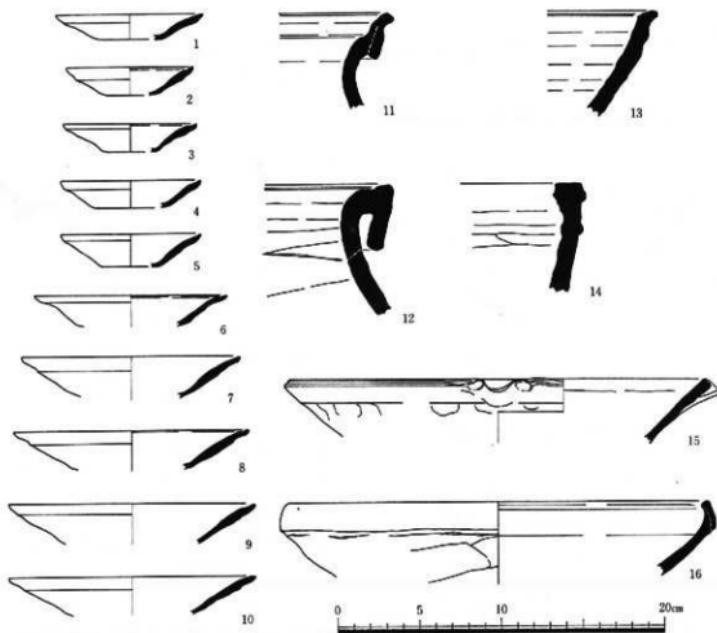
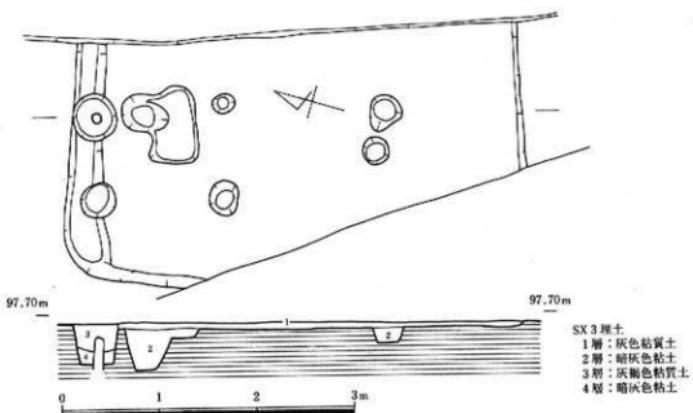
SX2 SD7を挟んでSX1の南側に隣接する長辺約2.8m・短辺約2.0mの隅丸長方形土塙である。東側約3mが2段掘りによって更に深くなってしまい、最深部では約50cmを計る。灰色系土を埋土とし、土師質土器皿・天目茶碗・砥石が出土している（第50図・4~11）。4~6は土師質土器の小皿であり、各々の口径・器高は8.2cm・1.9cm、4.6cm・1.8cm、9.4cm・1.1cmである。4は平底の底部から長い口縁部が外縁気味に立ち上がり、口縁端部を肥厚させるものである。口縁部内外面はヨコナデ、底部外面は強い指頭圧痕・ナデによって成形される。5は小めの底部から長めの口縁部が大きく外方へ開き、端部は単純におさめる。内面においては屈曲部の器壁が薄くなってしまい、外面の指頭圧痕は弱い。6は4と近似するが、扁平なものである。7・8は土師質土器の大皿であり、口径・器高は12.6cm・2.5cm、13.4cm・2.7cmである。いずれも磨滅が著しく調整は不明であるが、底部から外縁気味に長い口縁部が立ち上がるるものである。7では口縁端部内面に1条の沈線を加えることによって、更に短く上方へ端部が屈曲する。9・10は、天目茶碗である。9は口径11.0cmを有り、内縁して立ち上がる口縁端部を緩やかに直立させ、端部を尖らせ気味におさめる。外面下半は回転ヘラケズリであり、釉色は漆黒色を基調とし口縁部内外面は茶褐色を呈する。10は9とは別個体の底部であり、高台は削り出しによって成形される。11は、緑茶灰色を呈する粘板岩系の砥石である。最大幅3.5cm・残存長6.6cm・最大厚1.3cmを計る。砥面には擦痕・削痕が顯著に認められ、側面には切削痕が明瞭に残存している。中央部が使用によって薄くなり、折れたものである。

SX3 SX2の南側に隣接する1辺約4.5mの方形土塙である。底面は平坦であり、埋土は灰色粘質土の單一層である。北辺に沿っては幅約40cm・深さ約10cmの溝が伴い、これに木材を運ぶ柱穴約45cmの柱穴が重複している。底面には、他に2個の柱穴がこの造構に伴って検出されている。

遺物としては、土師質土器・信楽焼・瓦質土器が出土しており（第51図）、特に土師質土器皿類は北西隅部分の底面直上から壁にかけてに集中して検出されている。1~10は土師質土器皿類であり、1~5が小皿、6~10が大皿である。小皿類の口径・器高は各々10.0cm・1.6cm、7.8cm・1.8cm、8.0cm・1.7cm、8.4cm・1.7cm、8.6cm・2.0cmである。いずれも小片による復原口径であるため法量のばらつきが著しくなっているが、概ね口径8.0cm~8.6cm・器高1.6cm~1.8cmの範囲内に収まりそうである。いずれも平底の底部から外縁気味に長い口縁部が広がっていくものであり、口縁端部外面にはヨコナデによる弱い半坦面を有している。口縁端部は尖らせておさめるが、2~4では端部内面に若干のくせを持っている。2・3では、これが凹線状になっている。6~10の大皿の口径は、11.6cm・13.4cm・14.4cm・15.0cm・15.0cmである。小皿同様復原径であ



第50図 T 16-SX 1・2 平面図・断面図・出土遺物実測図



第51図 T 16-SX 3 平面図・断面図・出土土器実測図

るために数値のばらつきが大きいが、概ね14.0cm～15.0cm程度の口径となり、器高は2.5cm～3.0cm程度である。形態・成形手法は小皿類と同じであり、大小皿類の間に時期差は認められない。11は信楽焼の壺の口縁部断面である。口縁は折返しによって外方へ肥厚させ、内面には段を形成している。12は、常滑焼の壺口縁部断面である。H字状口縁を呈し、外方の垂下部分が非常に長い。13は、信楽焼のこね鉢である。体部は内彫気味に立ち上がり、口縁端部は若干外方へ突出している。上端部には内傾する面を持ち、1条の細い沈線を巡らせており。14は瓦質土器の火舍である。口縁部上端は水平であり、内面に突出する部分は欠損している。外面の口縁端部直下には2条の断面半円形の凸帯が巡り、その間を花菱形のスタンプ文で充填している。外面はヘラミガキによって極めて平滑に仕上げられ、黒色を呈する。内面もナデによって平滑に仕上げられているが、口縁部直下には横方向の強い押しナデが加えられている。器面が板状を成していることから、全体形は方形となる。15は瓦質土器であり、片口のこね鉢である。口径25.4cmを計り、直線的に大きく広がる口縁端部外面には1条の沈線が施される。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は指頭圧痕、内面はナデによって平滑に仕上げられている。色調は内外面共に黒色を呈し、外面にはススの付着が認められるため、鍋としても使用していたと想定される。16は口径25.0cmの土師質の炮烙である。口縁部が内彫するものであるが、外面においては面を成している。口縁部内外面はヨコナデによって平滑に仕上げられ、体部外面は幅の広いヘラケズリによって成形されている。

第4章 まとめ

今回の調査は狭長なトレチによるものが主体ではあったが、奈良時代から室町時代にいたる多様な遺構が検出され、大手前遺跡・上下遺跡の実態の一端を明らかにすることことができた。本章では、まず遺物の年代観を検討し、これに基づき各遺構および両遺跡の変遷をたどっていくことにする。

1. 遺物について

出土遺物は、砥石を除けば全て土器類である。これらは須恵器・土師器・土師質土器・瓦器・黒色土器・陶磁器と多種多様であり、7世紀末～8世紀初頭、11世紀後半～12世紀代、16世紀の3時期に大別される。以下、順に整理してみよう。

まず、T7-SH1・2とT11-SH1・2出土の土器群である。4棟の堅穴住居から出土した器種によってその組成を復元すると、須恵器・同壺蓋・土師器皿・同壺・須恵器長頸壺・同鉢・同瓶・土師器長胴壺・同小型壺・同片口鉢である。供膳形態・煮沸・調理具についてはほぼ充されているが、貯蔵形態である大型の壺が不確かであり、供膳形態の中では高壺が認められなかった。いずれも埋土中出土のものが主体ではあるが、概ね当該期の様相を反映していると言えよう。

次の平安時代後半～鎌倉時代の土器類が最も出土量が多いわけであるが、ここではその中から

一括性が高いと考えられる T7-SE1・2・3、T9-SB7・8、T11-SD11について比較しながら見ることとする。

まず黒色土器碗について見ると、外面に施されるヘラミガキ調整によって、口縁部・体部・高台接合部全てに加えられる T11-SD11と、部分的もしくは全く加えられないその他の一群にわけられる。内面の暗文については、そのパターンに大きな差異は認められないが、T11-SD11のものが最も丁寧かつ整っており、その他については疎らであったり乱れが生じたりしている。高台はいずれも断面三角形を呈するものであるが、T7-SE1・T9-SB8ではかなり縮小・扁平化しており、碗部全体も扁平なものである。以上のことから、黒色土器の流れは T11-SD11 → T7-SE2・T9-SB7 → T7-SE1・T9-SB8 ということになる。土師質土器皿類については、大きな変化は認められないが、端部に押しナデによる面を有するものが減少し、単純におさめるものが主体となる。碗類としては、瓦器も出土しているが、形態的には黒色土器と共通しており、各遺構に含まれながらも、量的には黒色土器を越えることはない。

室町時代の土器は、T16-SX2・3に代表される。いずれも土師質土器皿類を主体としているが、前段階と比較すると陶磁器類の増加が目につく。天目茶碗・信楽焼の壺・こね鉢・常滑焼の壺であり、碗類の出土量は減少している。

2. 遺構について

次に遺構の変遷を3期に分けて追ってみることとする。

I期：奈良時代末～平安時代初頭

T7-SH1・2、T11-SH1・2・3、T1-SK1・2とT8～9の溝が相当し、T7～T9の西半部分、T11周辺に集中している。西側に隣接する半田遺跡において、これよりも古い竪穴住居が検出されており、既に土地利用は開始されていたと考えられるが、T8～9にかけての溝の開削等から、当期において更にその開発が拡大されたと想定される。調査が狭長なトレントによっていたためでもあるが、竪穴住居は集中しているというよりは、むしろ散在傾向を示している。この傾向は、ほぼ同時期の後川遺跡においても看取される。また、明確な同時期併存の掘立柱建物は確認されず、竪穴住居を主体とする居住単位であったと考えられる。

II期：平安時代後半～鎌倉時代前半

ほぼ全域において検出されているが、遺構が集中する地点は、T6・7、T9中央部であり、居住の中核を成すと考えられる。掘立柱建物・樋・井戸・土塀によって構成され、掘立柱建物は2間×3間を基本とする。また、隅の柱穴に多量の土器が検出される例が、T9において顕著に認められる。土師質土器・黒色土器碗を主体とし、脚台付き皿・羽釜・砥石を含み、ほぼ完形であることが留意される。

III期：室町時代

T15・16を中心として検出されている。方形土塙群についてはその性格が不明であるが、II期の遺構と重複しない、新たな地点において遺構が検出されたことは、評価される。

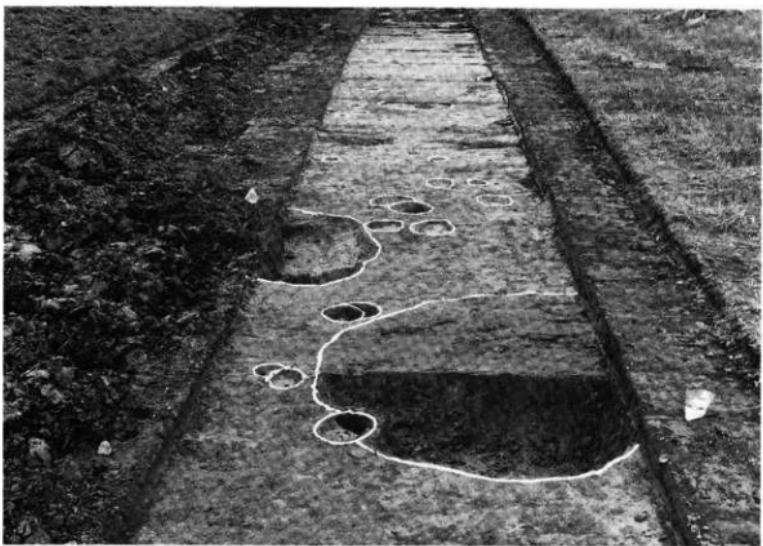
以上の様に、点的に居住域を移動しながら、周辺地を開発・利用していくことがうかがえるわけであるが、遺跡地図によると T1・2・13~16は、大手前遺跡、T4~12は上下遺跡の範囲ということになる。大手前遺跡に関しては、更に北東方向に遺構の拡がりが認められることから、今後、隣接する金剛寺遺跡・御所内遺との関連が問題とされよう。上下遺跡については、その範囲が大きくなっていることとなる。大手前遺跡との間には、沼沢地が存在することによって分けられる様である。当地周辺には、T3・6等で検出された沼沢地・落ち込み等が縦横に存在するが、これらの埋め立てや、埋没後の開発・利用と遺跡の拡大・移動が連動している様であり、今後その過程・母体の解明が進展することが想われるところである。

- 参考文献 田路正幸「第1章 近江八幡市半田遺跡」(『は場整備関係遺跡発掘調査報告書 XV-4』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1988)
小竹森直子・平井美典「大手前遺跡・金剛寺遺跡」(『は場整備関係遺跡発掘調査報告書 XVI-5』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1989年)
小竹森直子「高木遺跡・後川遺跡」(『は場整備関係遺跡発掘調査報告書 XVI-6』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1990年)

図 版



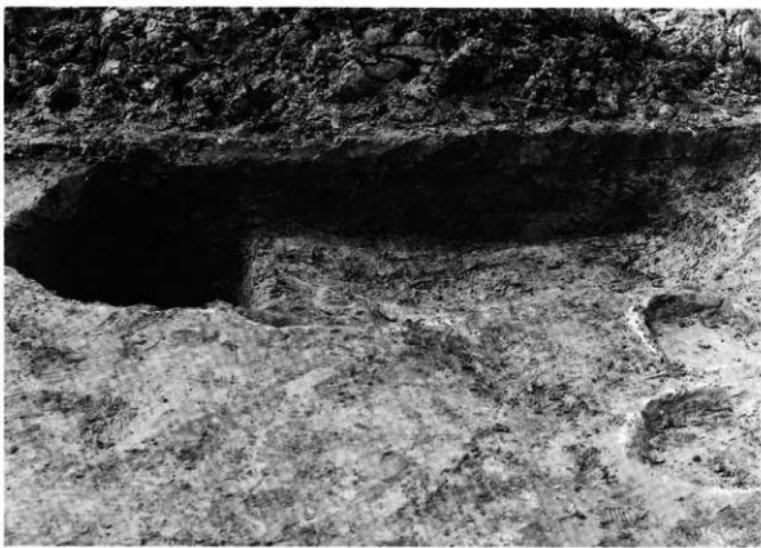
1. 調査前風景



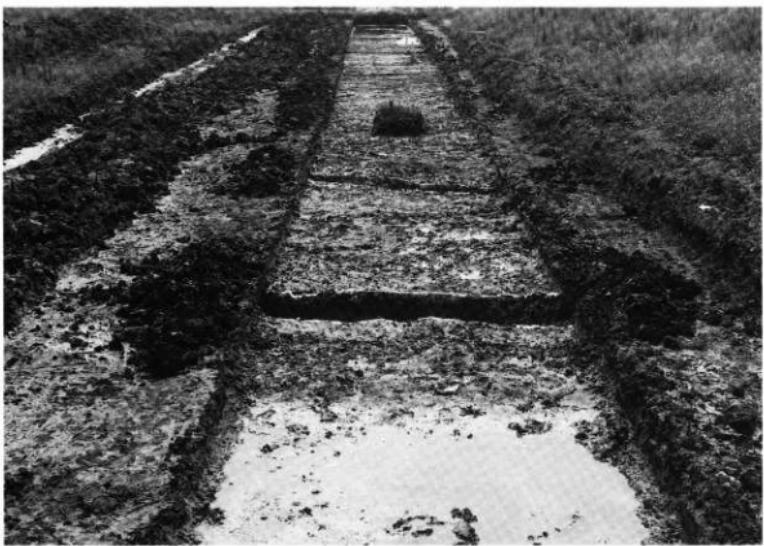
2. T1 全景（南西から）



1. T1-SK1 土層断面



2. T1-SK2 土層断面



1. T 2 全景 (北東から)



2. T 2 西端柱穴列 (北東から)



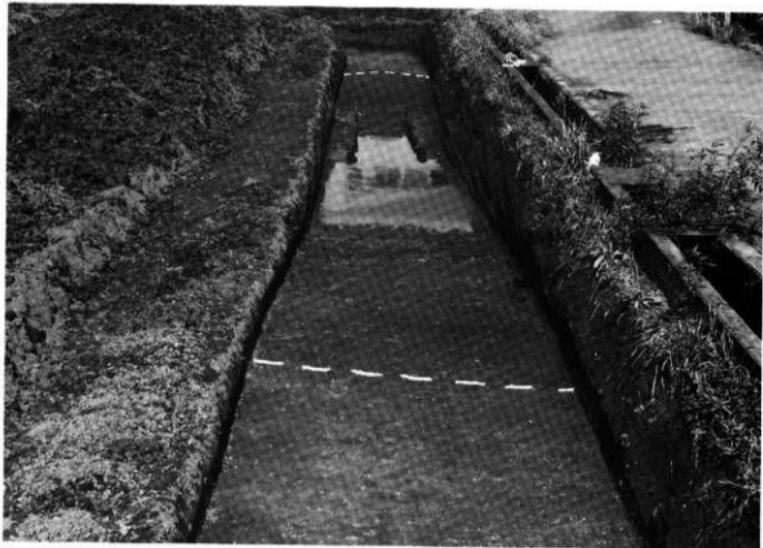
1. T 4 全景 (南西から)



2. T 4 - SD 3 全景 (北東から)



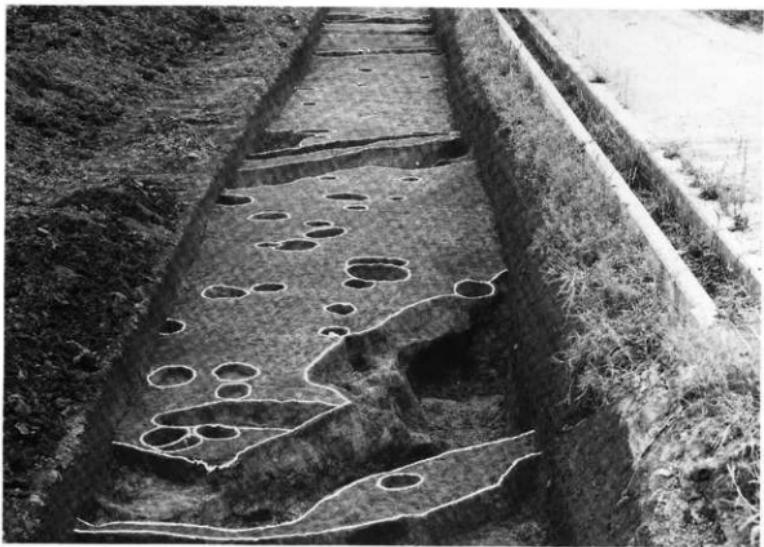
1. C地区全景



2. T 5 全景（西から）



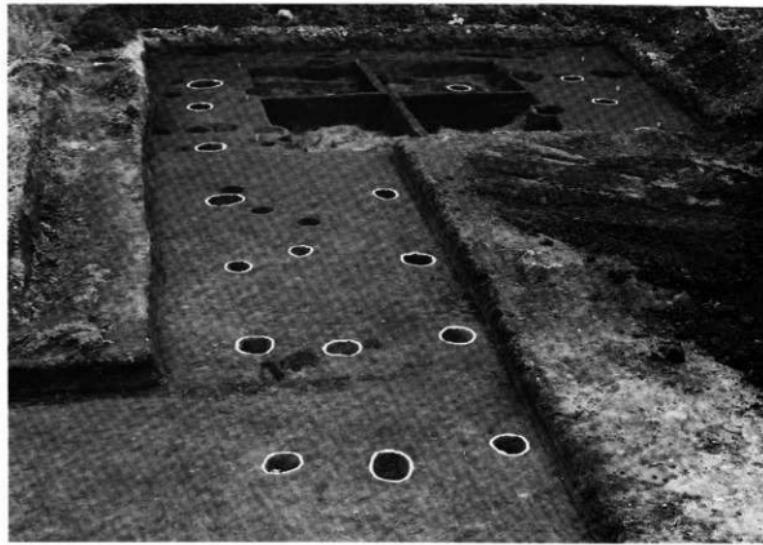
1. T 6 全景（東から）



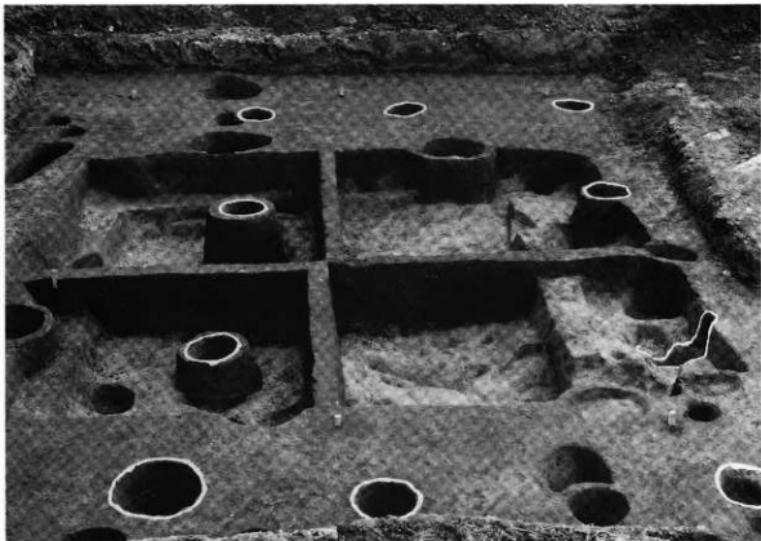
2. T 6 - S B 3・SK 2周辺（西から）



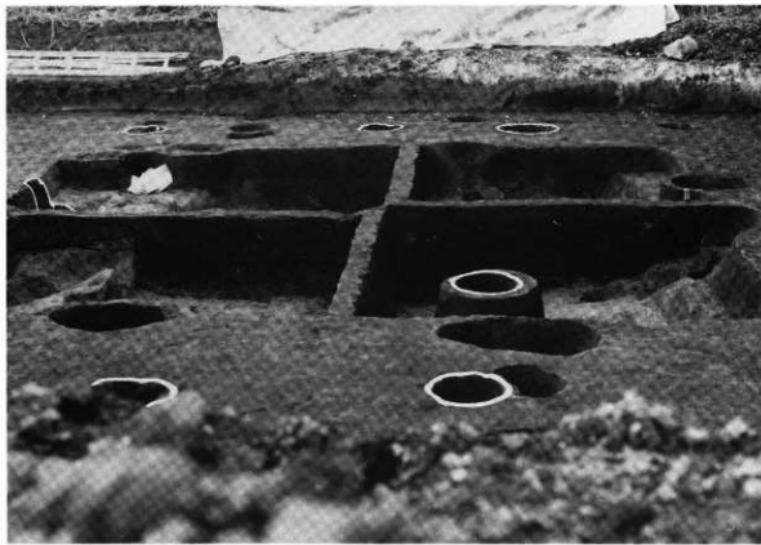
1. T 7 西半全景 (北東から)



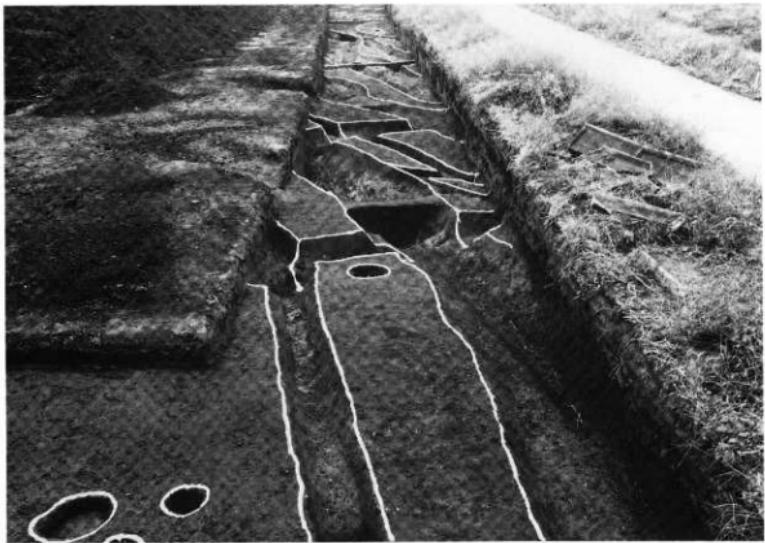
2. T 7 - S B 1 ~ 4 • S H 1 • 2周辺 (北西から)



1. T7-SH1・2全景（南西から）



2. T7-SH1・2土層断面



1. T 8 全景 (北西から)



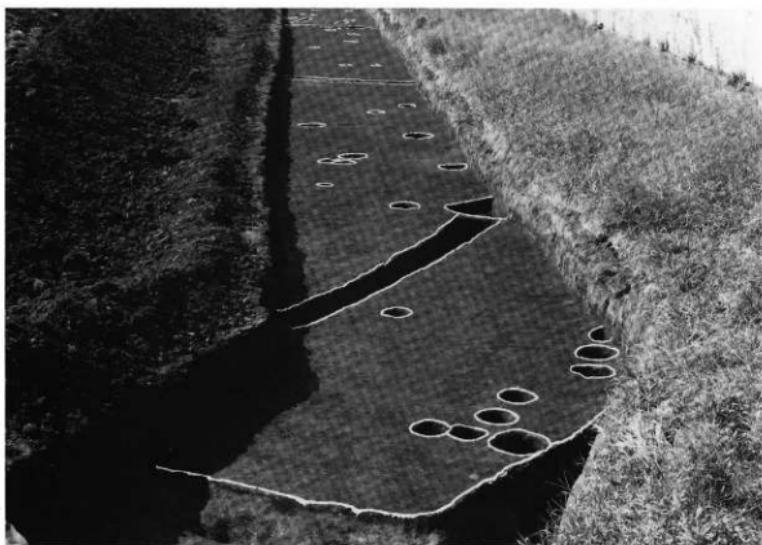
2. T 8 ~ T 9 溝列 (北西から)



1. T 9 - S D 3 (南から)



2. T 9 - S D 3 土層断面



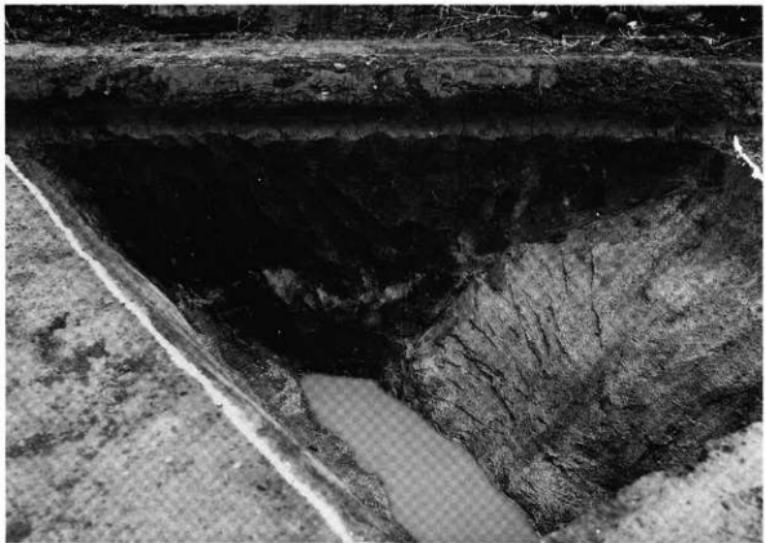
1. T 9-a 東端部全景（北東から）



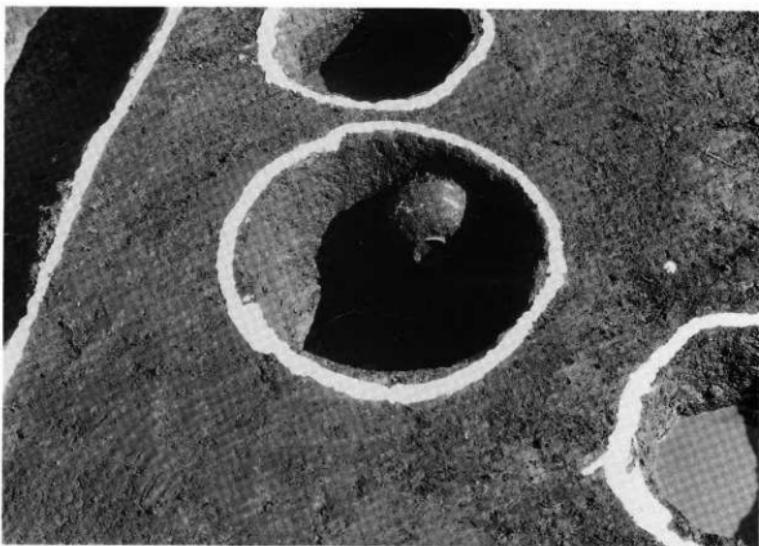
2. T 9-b 全景（南東から）



1. T 9 - S D 16・17周辺（北東から）



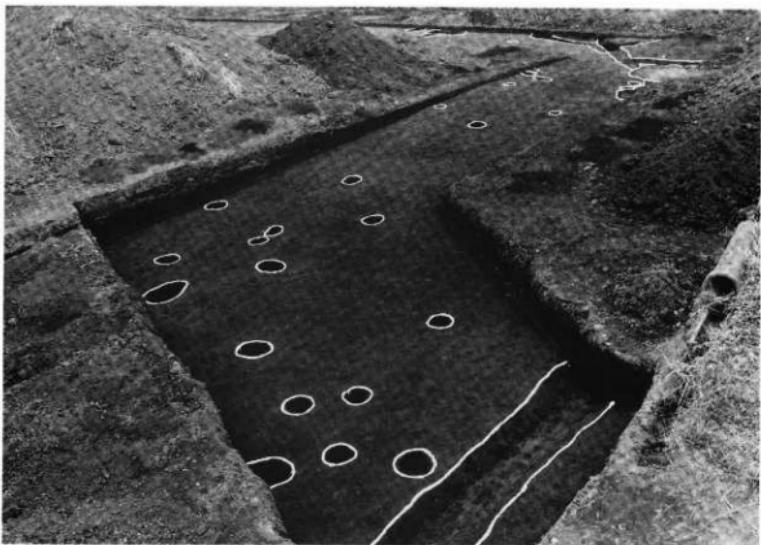
2. T 9 - S D 16土堀断面



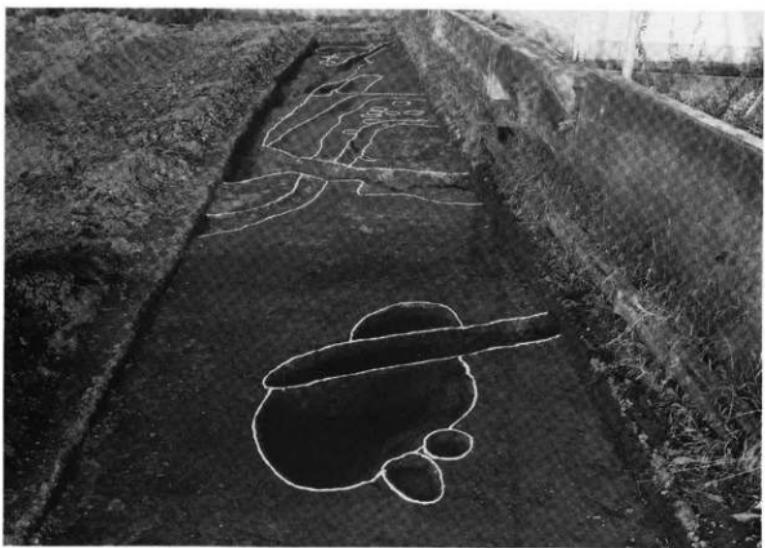
1. T 9 - P127 (S B 2) 黑色土器出土状况



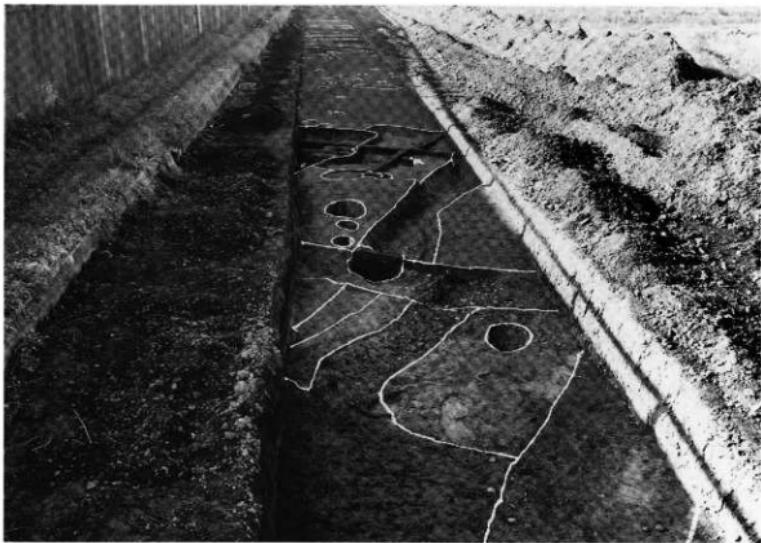
2. T 9 - S X 2 土層斷面



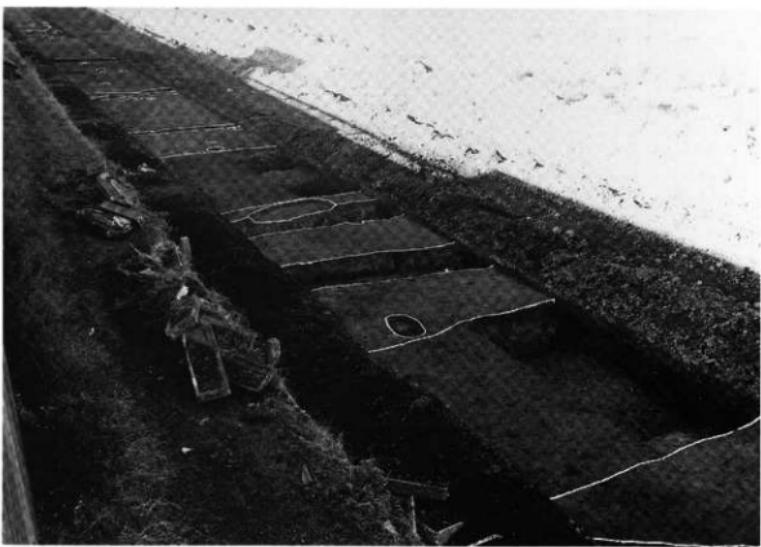
1. T10西端部（北西から）



2. T10東端部（南西から）



1. T11全景（北東から）



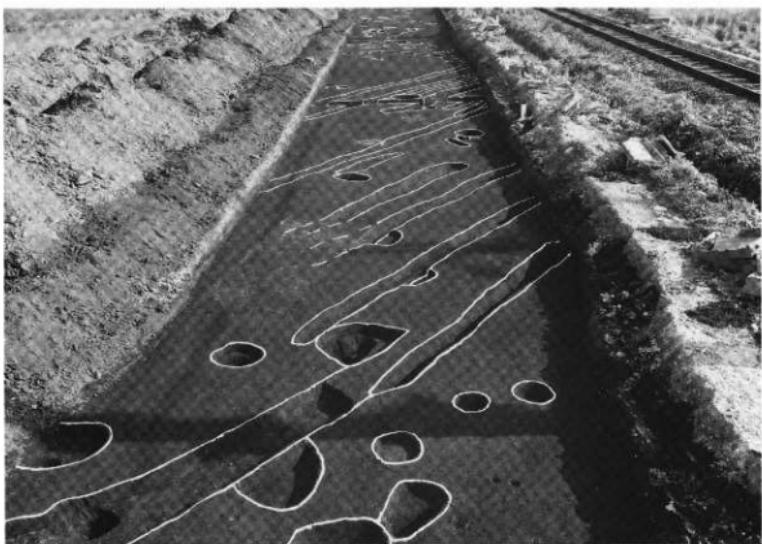
2. T11-SD 5-11（南東から）



1. T11-SH1・2全景(南から)



2. T11-SH1カマド



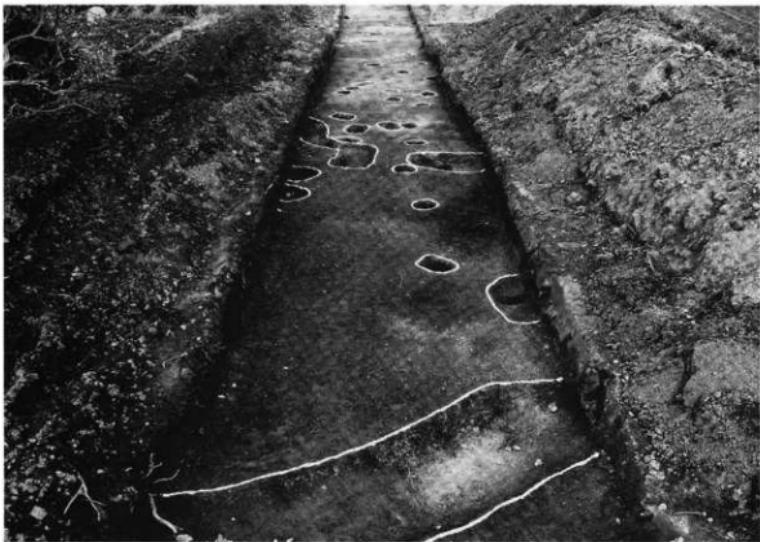
1. T12全景（北西から）



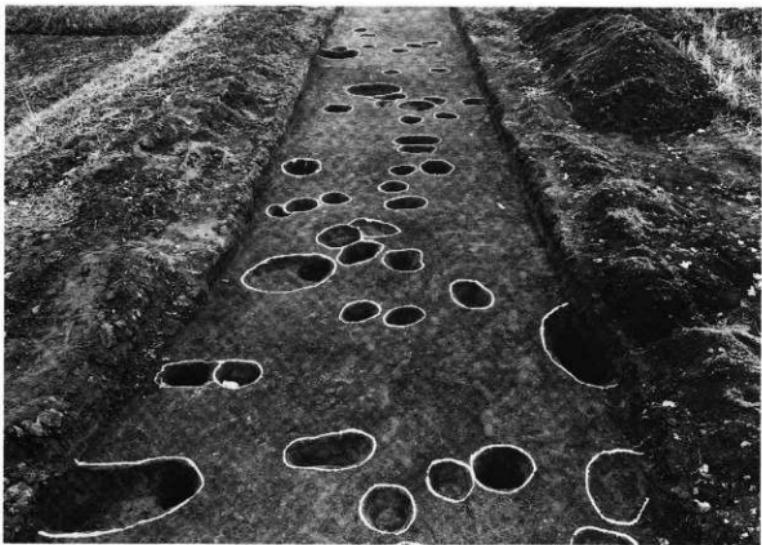
2. T12東半部（北西から）



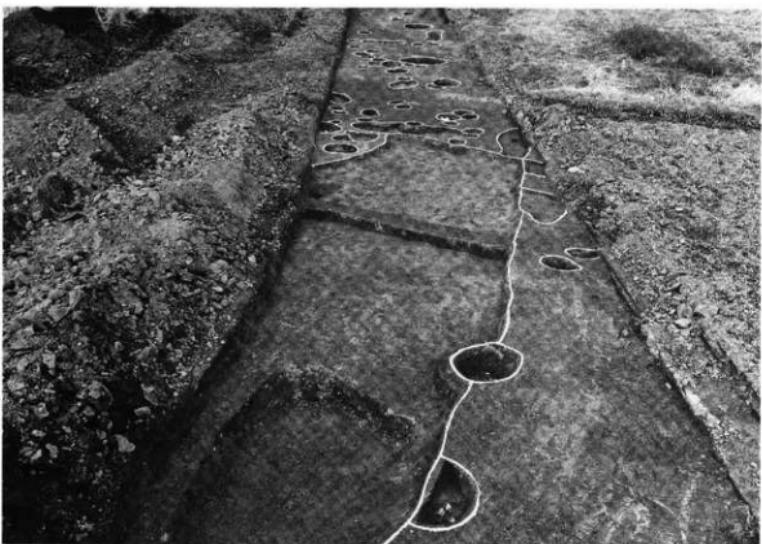
1. T13全景（北西から）



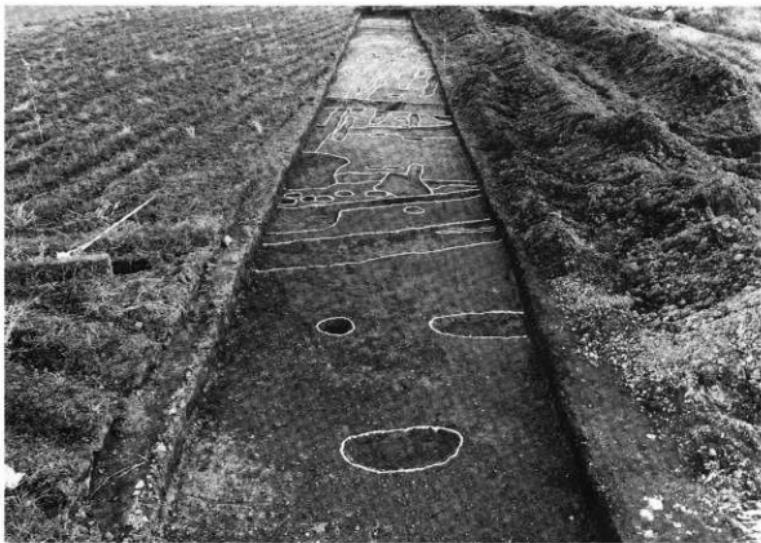
2. T13南半部（南東から）



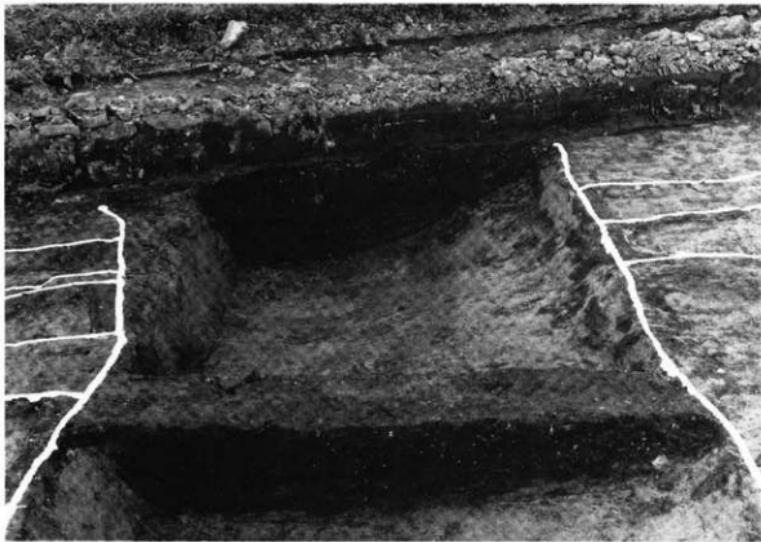
1. T14北端部（北西から）



2. T14南端部（南東から）



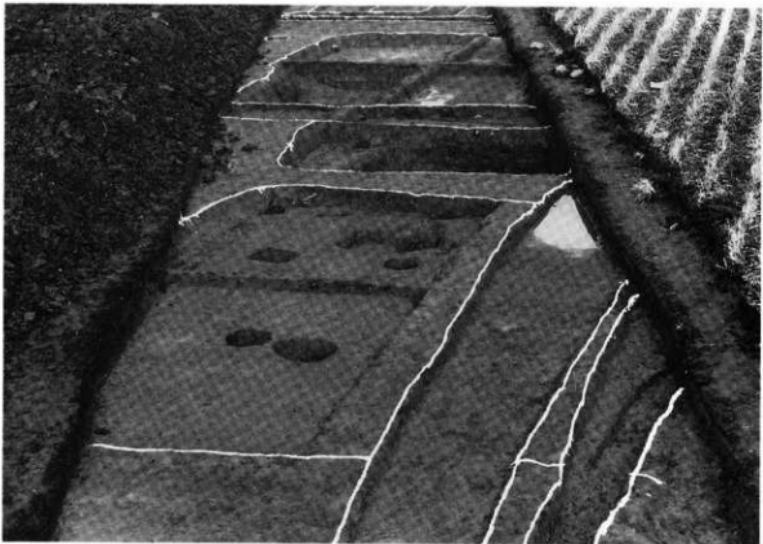
1. T 15全景（南東から）



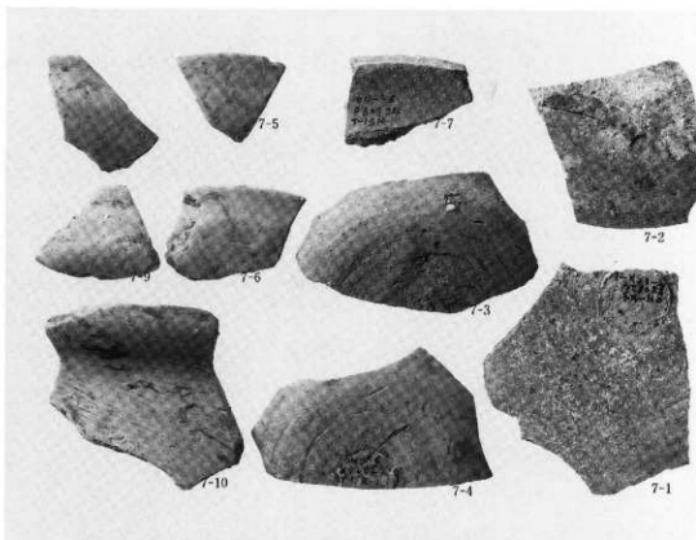
2. T 15-S D 3土層断面



1. T 16全景（南東から）

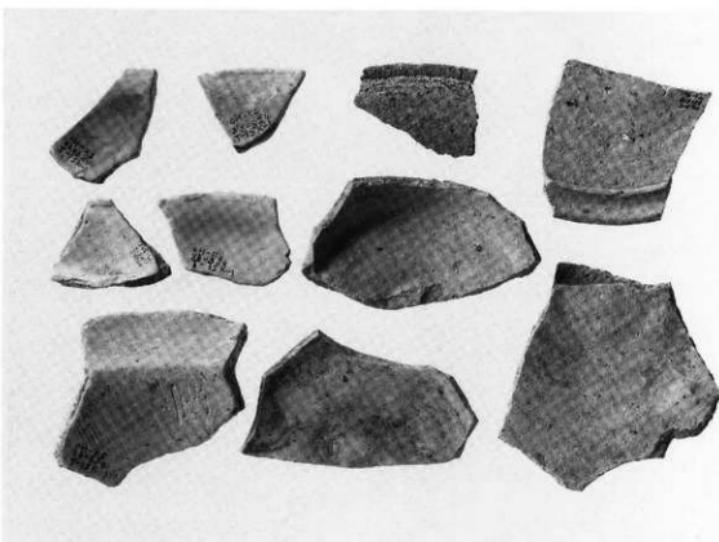


2. T 16-S X 1~3（南東から）

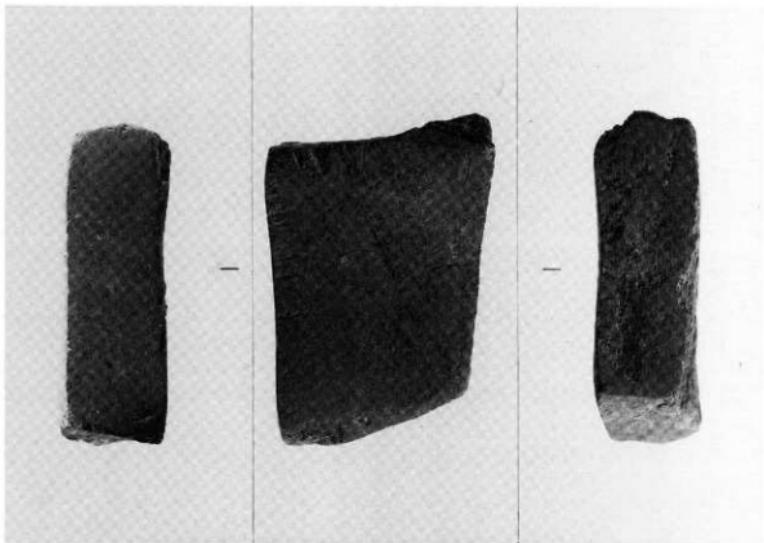


1. T1-SK1・2出土土器（外面）

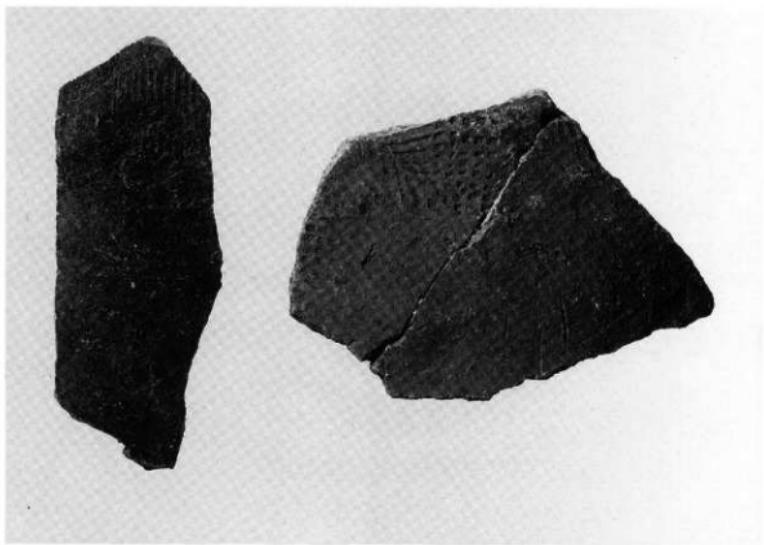
（番号は挿図番号に対応）



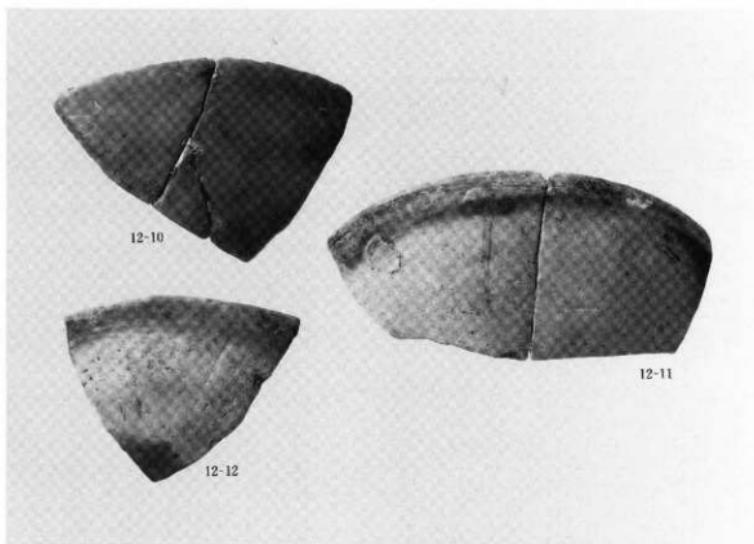
2. 同上（内面）



1. T 4 - S D 6 出土砾石 (10-3)

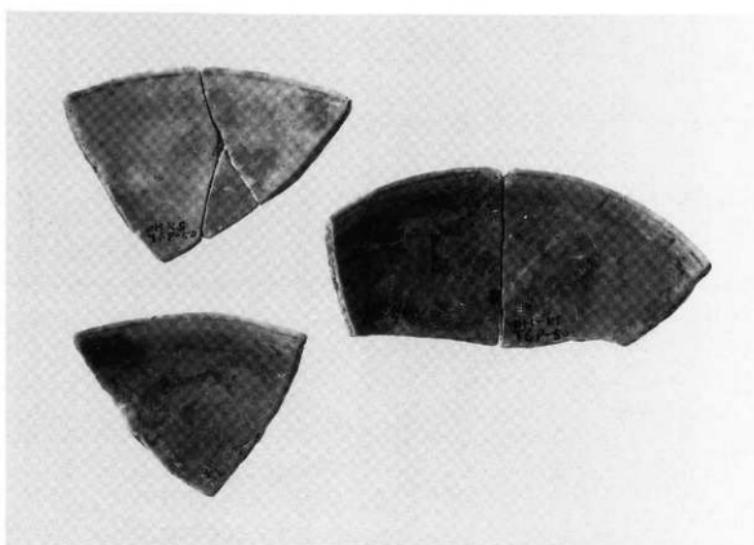


2. T 4 - S D 6 出土陶器

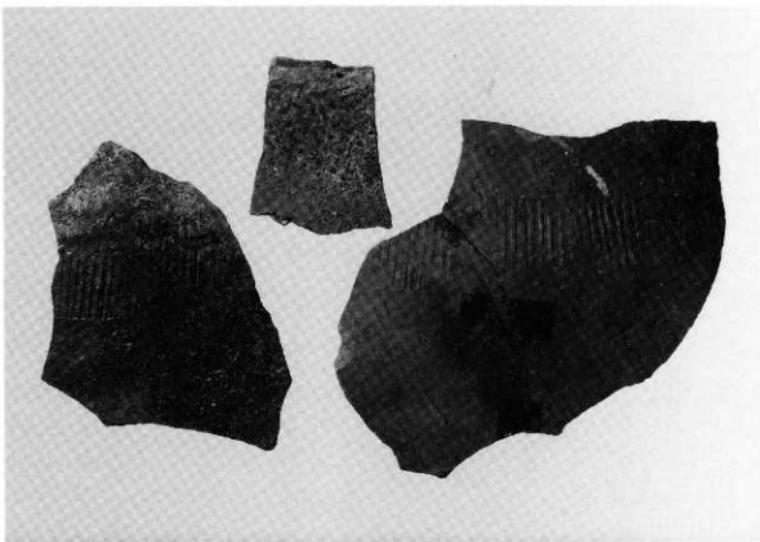


1. T 6 - S B 3 出土土器 (外面)

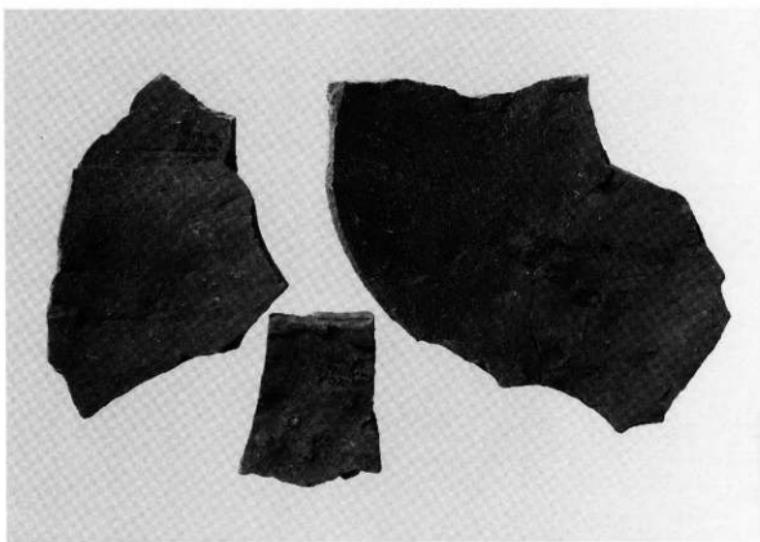
(番号は挿図番号に対応)



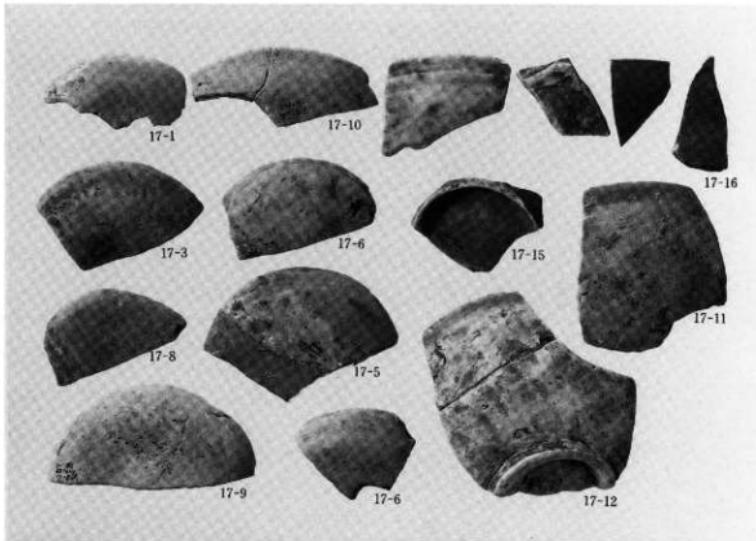
2. 同上 (内面)



1. T 7 - S B 3 出土陶器 (外面)



2. 同上 (内面)

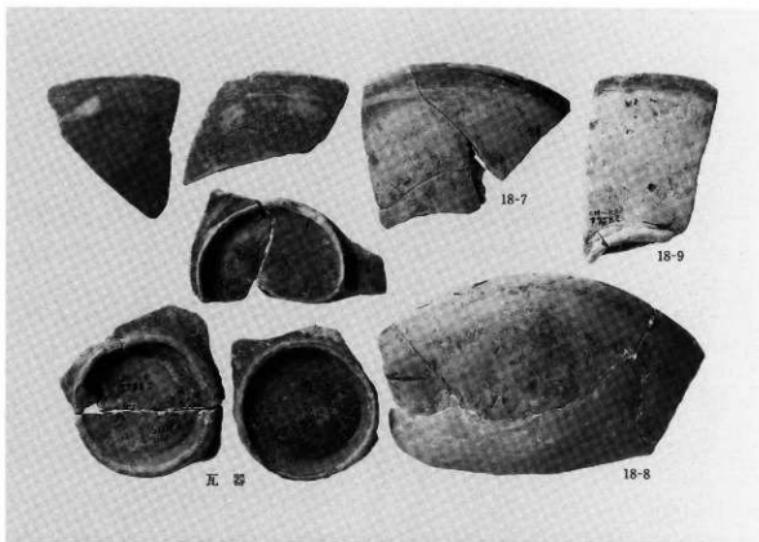


1. T 7 - S E 1 出土土器



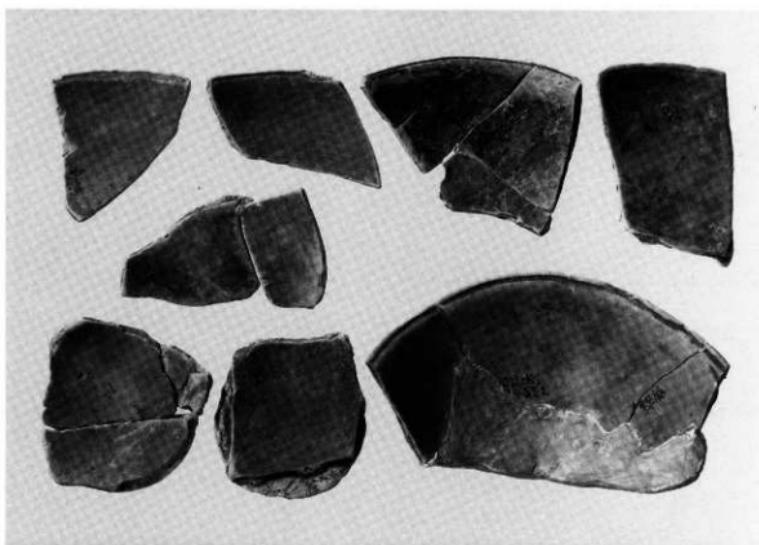
2. T 7 - S E 1 · 2 出土土器

(番号は挿図番号に対応)

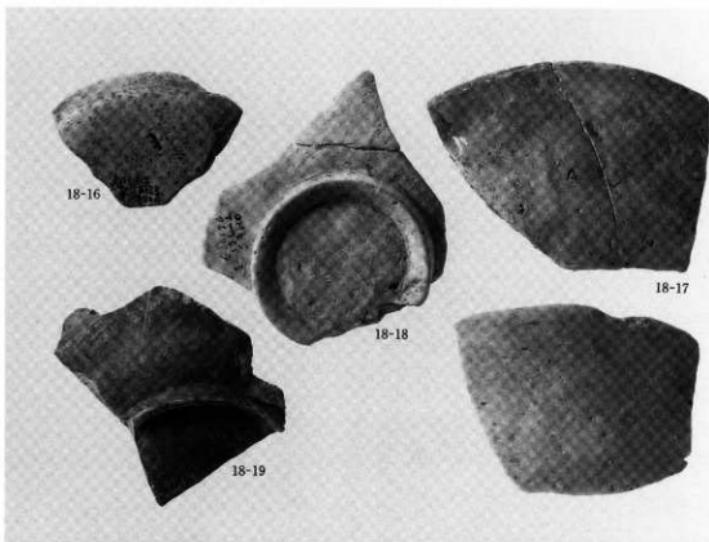


1. T7-S2 出土土器（外面）

（番号は挿図番号に対応）

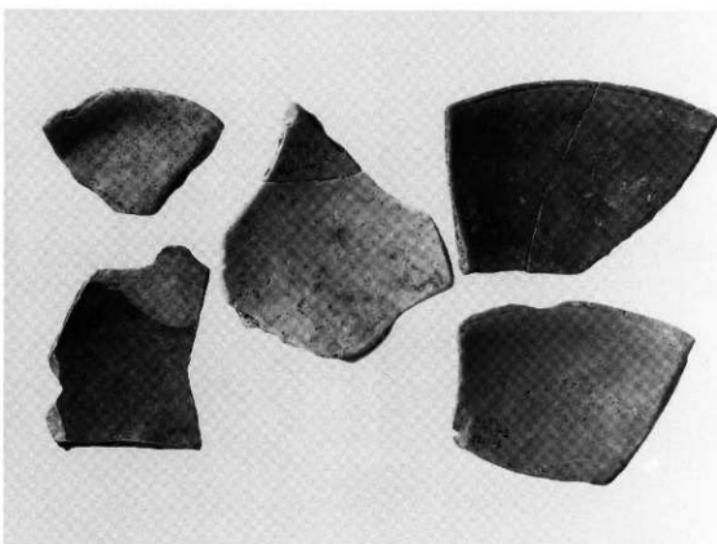


2. 同上（内面）

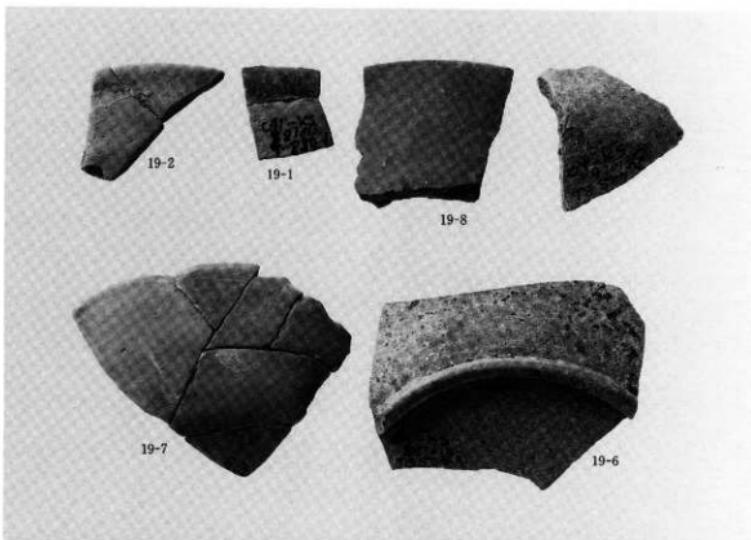


1. T7 - SE3 出土土器

(番号は挿図番号に対応)

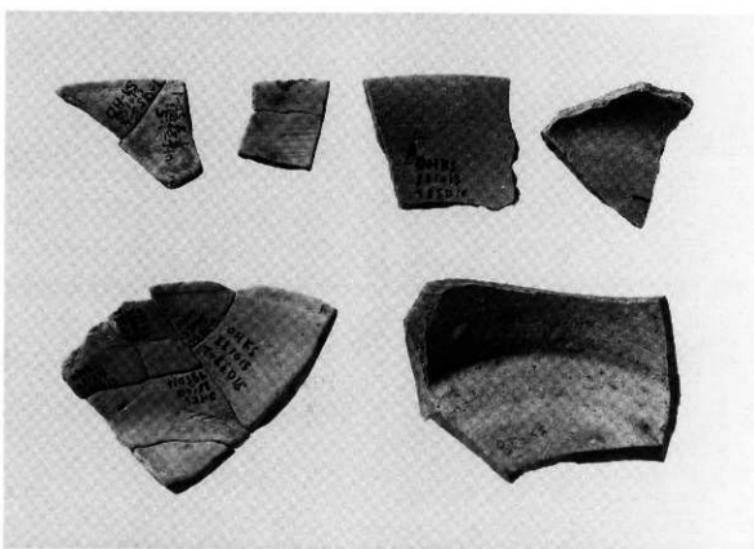


2. 同上 (内面)

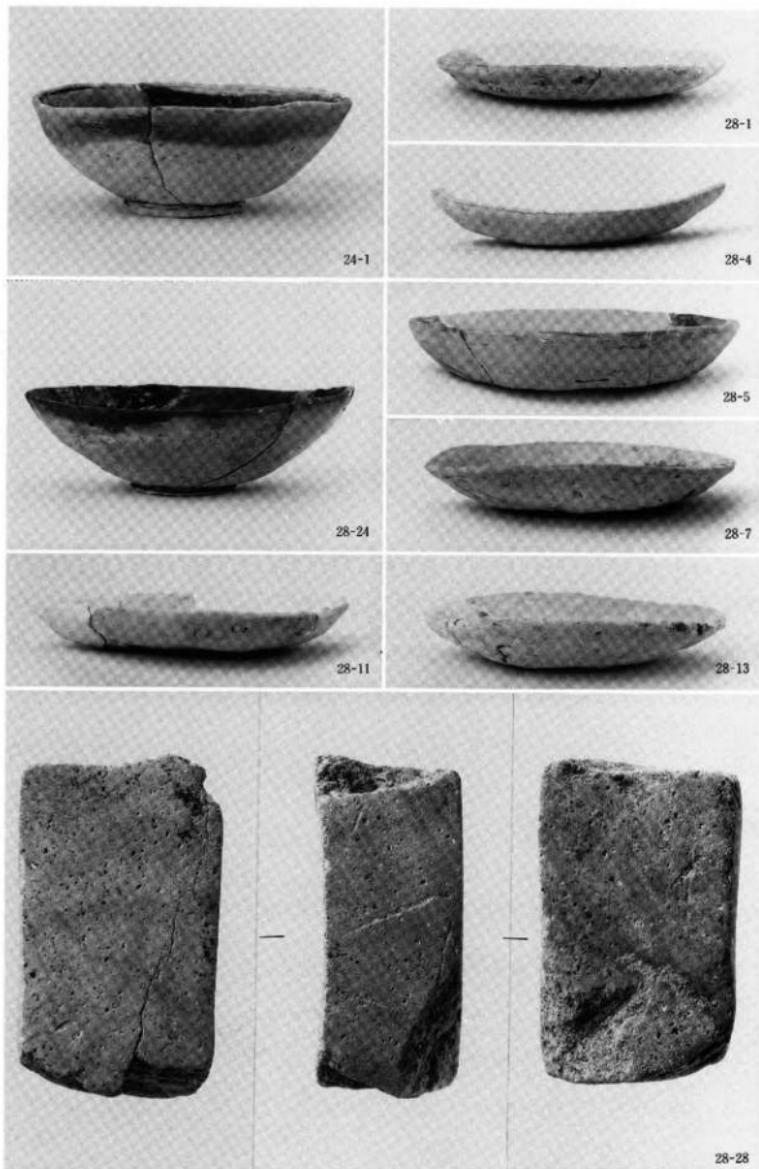


1. T 8 - S D 1 · 7 · 10出土土器（外面）

（番号は挿図番号に対応）

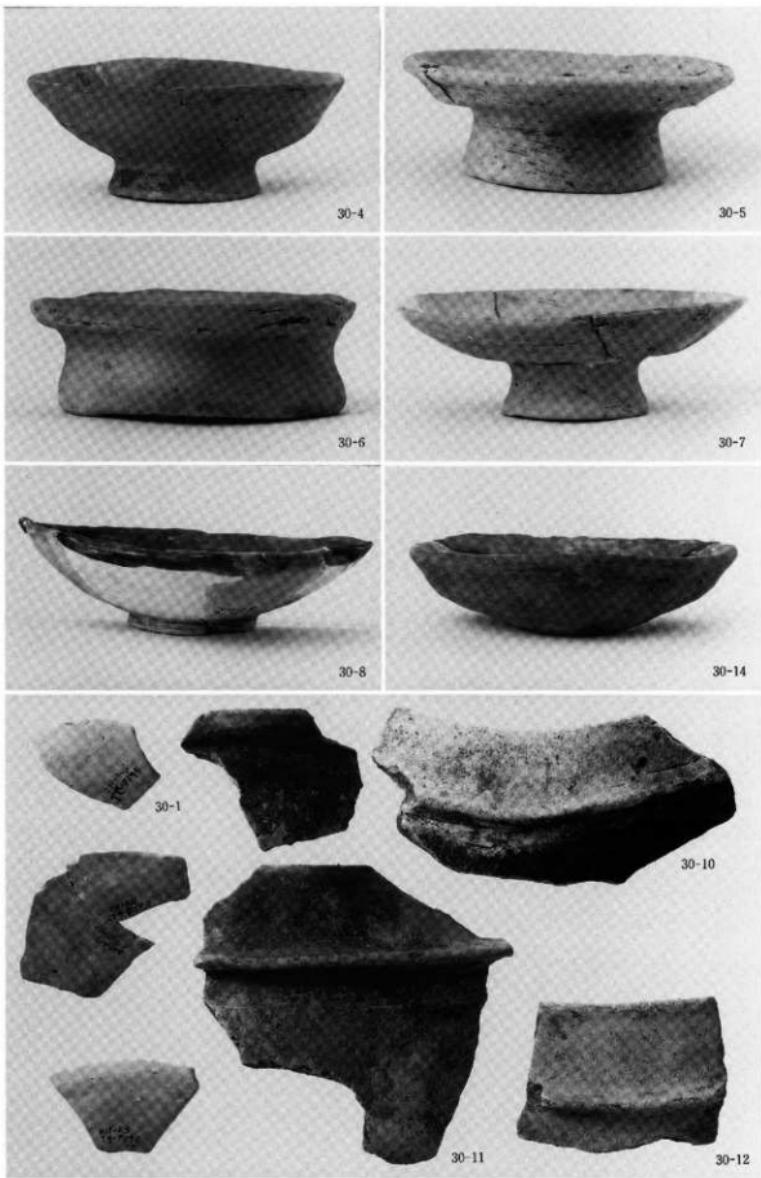


2. 同上（内面）



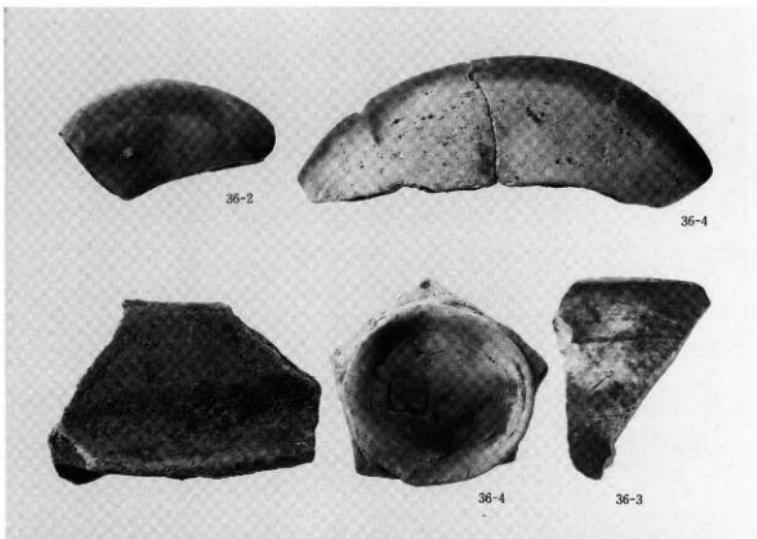
1. T 9 - P 127 (S B 2) · P 189 · P 198 (S B 7) 出土土器・砥石

(番号は挿図番号に対応)



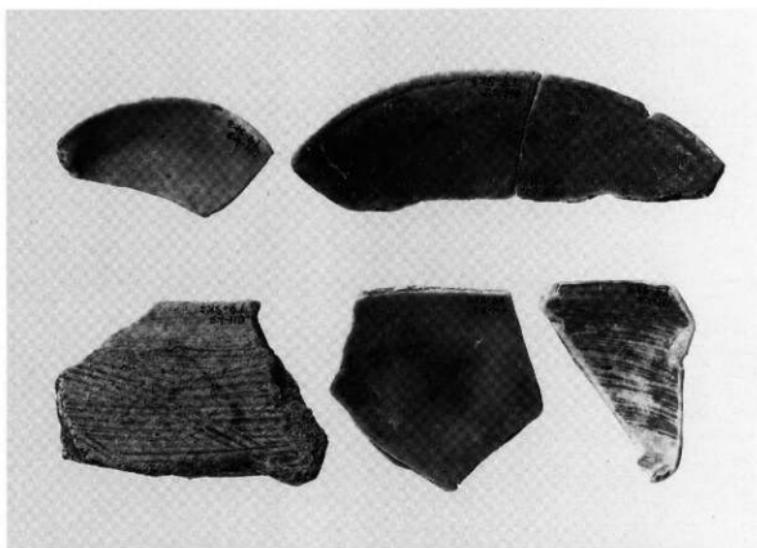
1. T9-P197 (SB8)・P203出土土器

(番号は挿図番号に対応)

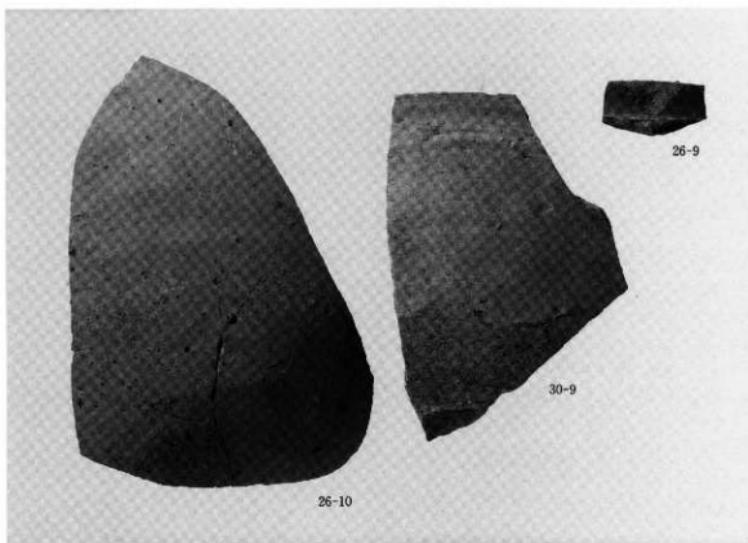


1. T 9 - SK 3 出土土器 (外面)

(番号は挿図番号に対応)

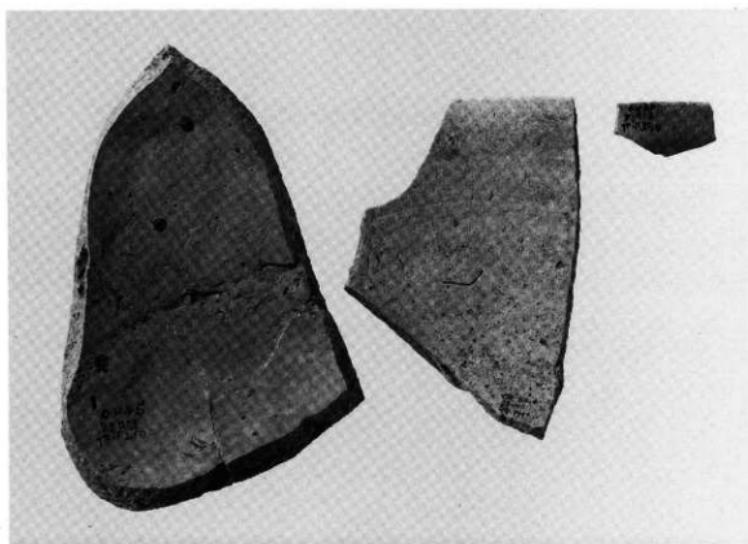


2. 同上. (内面)

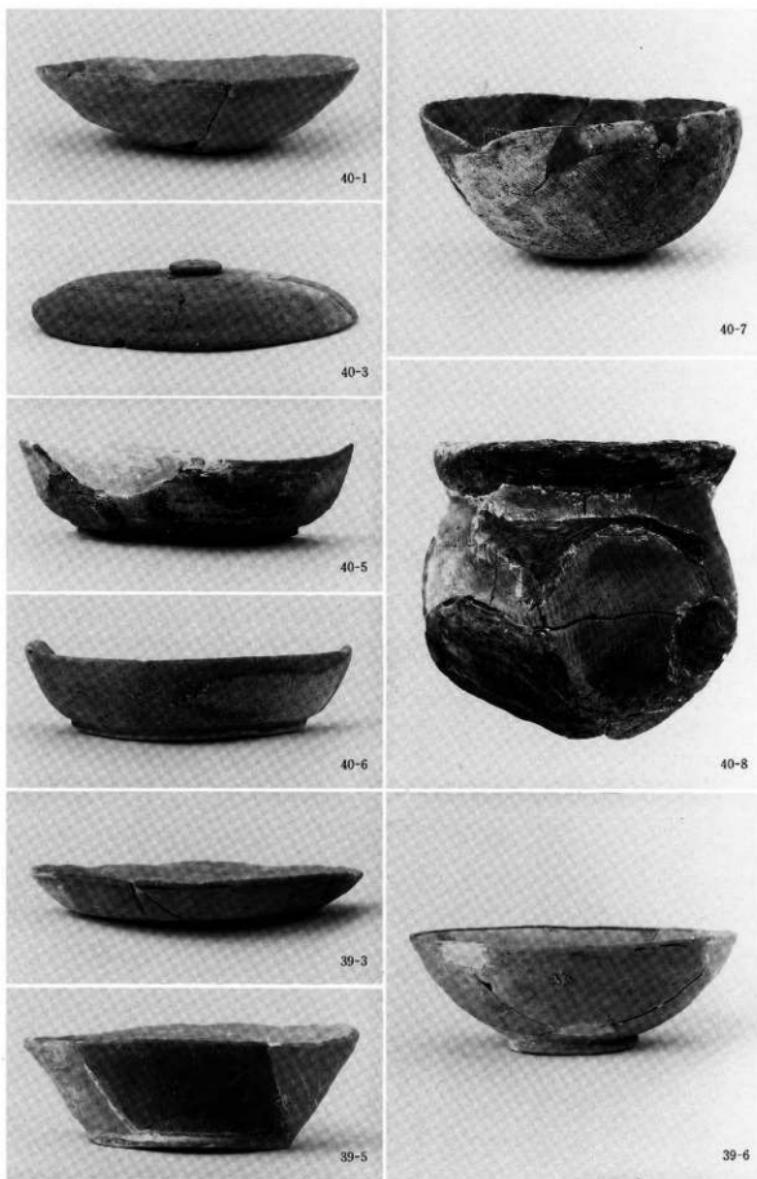


1. T 9 - P 290・197出土土器 (外面)

(番号は挿図番号に対応)

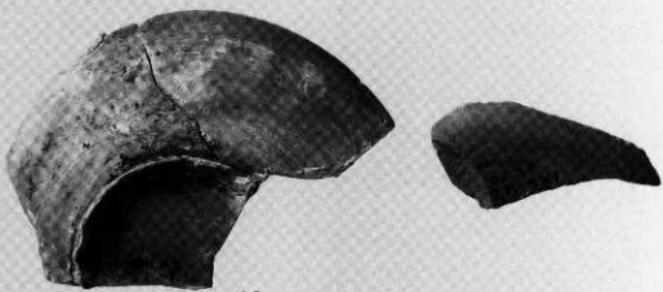


2. 同上 (内面)



1. T11-SH1・2・SD8・11出土土器

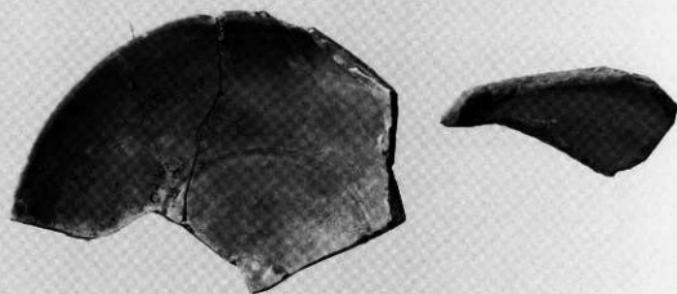
(番号は挿図番号に対応)



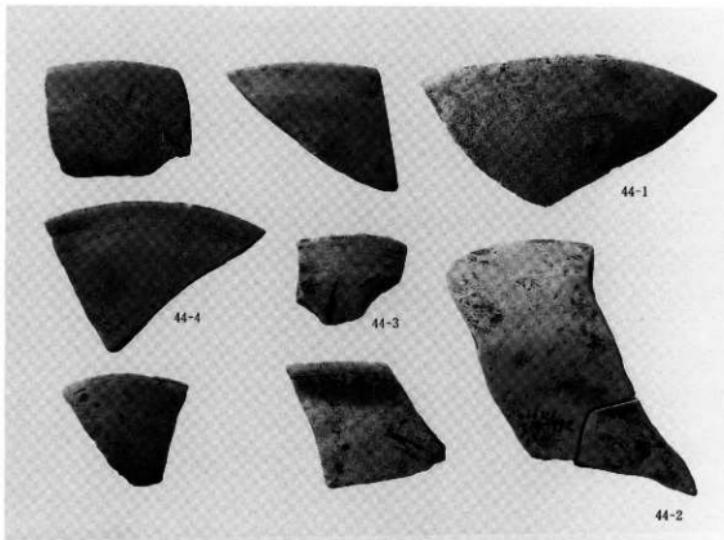
44-8

1. T 13-P 46・SK 1 出土土器（外面）

(番号は挿図番号に対応)



2. 同上（内面）

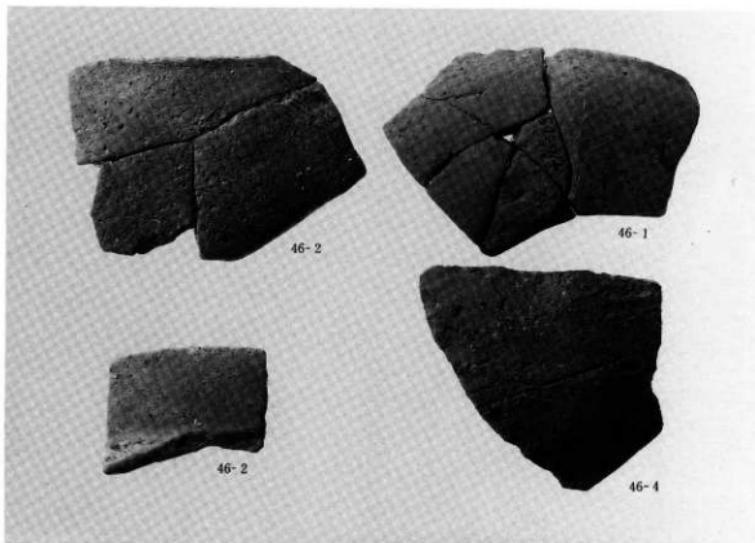


1. T 14-P 17・35・92出土土器（外面）

（番号は挿図番号に対応）

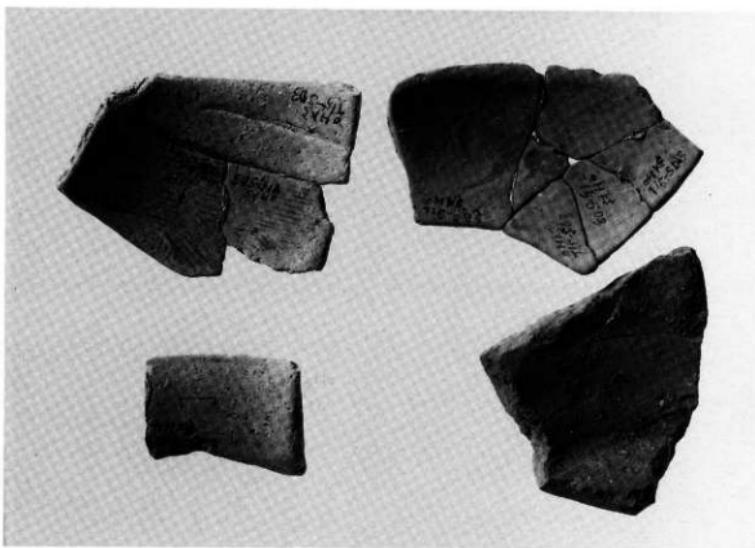


2. 同上（内面）

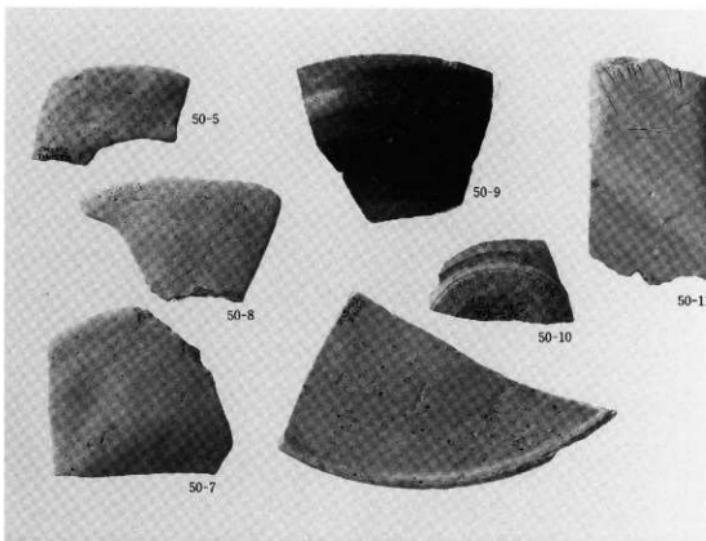


1. T 15-S D 3 出土土器 (外面)

(番号は挿図番号に対応)

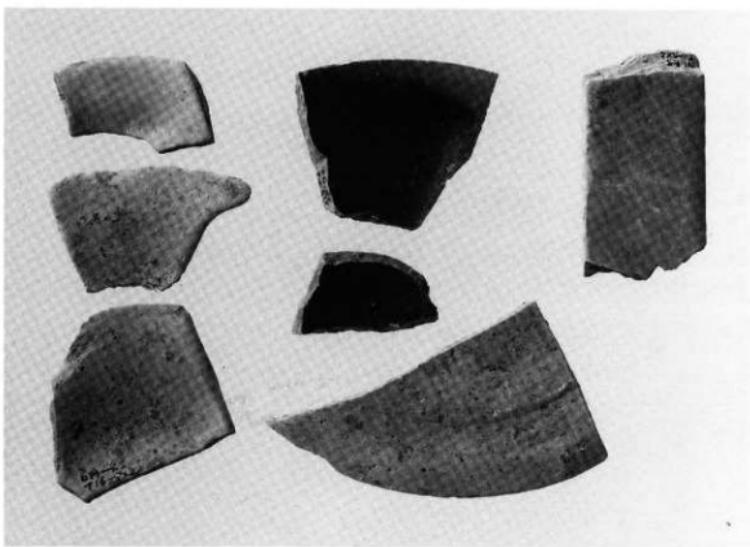


2. 同上 (内面)

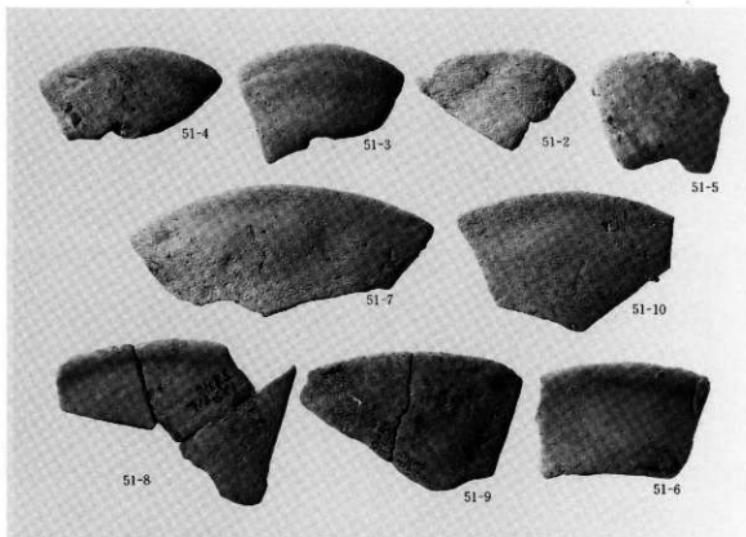


1. T16-S X 2 出土土器 (外面)

(番号は挿図番号に対応)

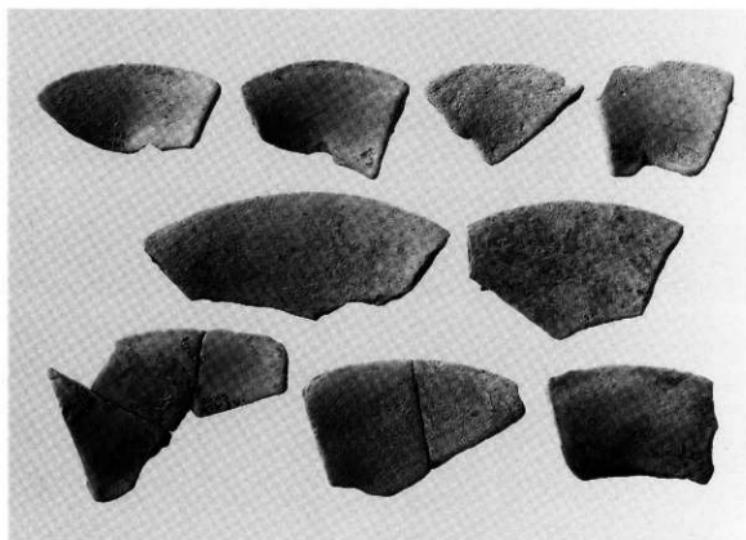


2. 同上 (内面)

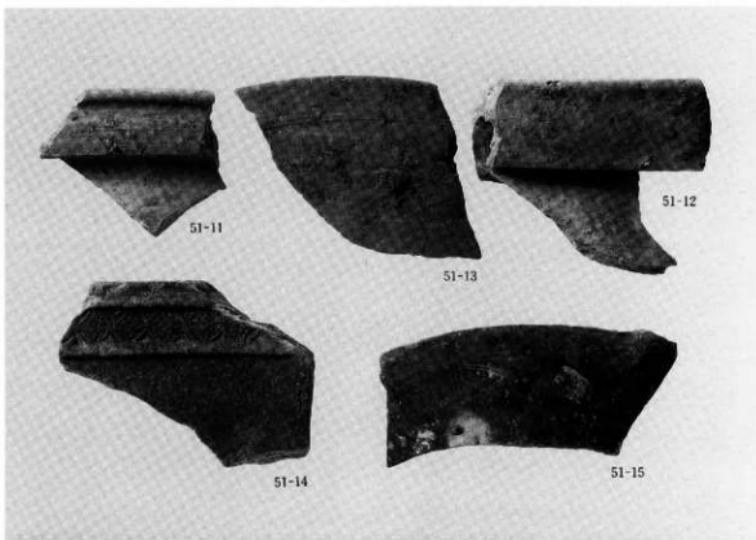


1. T16-S X 3 出土土器 (1. 外面)

(番号は挿図番号に対応)

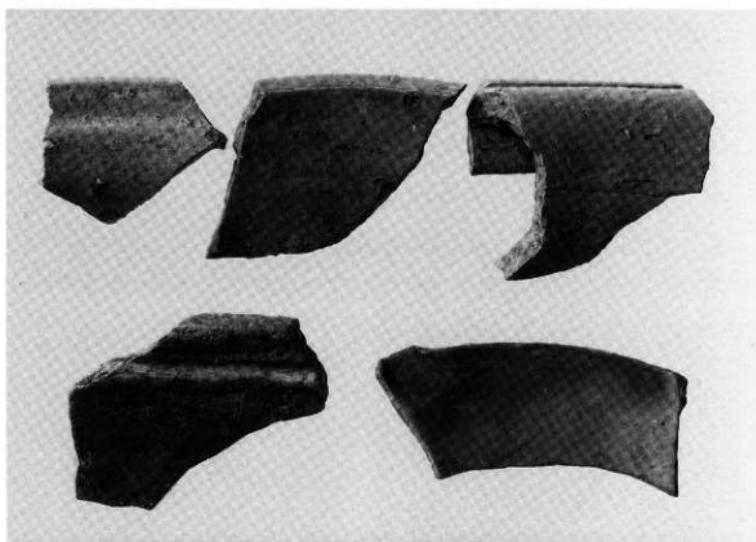


2. 同上 (内面)



1. T16-S X 3 出土土器 (2. 外面)

(番号は挿図番号に対応)



2. 同上 (内面)

平成2年3月

『は場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ-7』

大手前遺跡・上下遺跡

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121内線2536

財滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 0775-48-9781

印 刷 所 大津紙業写真印刷株式会社